

## 研究紀要



### 第31号

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	校長 田淵敏彦	(1)
平成26年度県総合教育センター研究提携報告		
	—全体まとめ— および各科の報告	・・・(2)
数学科学習指導案・新規採用1年目研修研究授業実施者	教諭 福山 健太郎	・・・(56)
保健体育科学習指導案・新規採用1年目研修研究授業実施者	教諭 須貝 佳奈子	・・・(62)
ホームルーム学習指導案・・・・・・・・・・・・・・・・	教諭 福山 健太郎	・・・(78)
ホームルーム学習指導案・・・・・・・・・・・・・・・・	教諭 須貝 佳奈子	・・・(80)
音楽科2年生研修旅行報告(音楽科)・・・・・・・・	音楽科2年担任 濱田 淳一	・・・(87)
美術科2年生研修旅行報告(美術科)・・・・・・・・	美術科2年担任 前村 卓巨	・・・(92)
普通科2年修学旅行報告・・・・・・・・	2学年引率者 内西 昭文	・・・(98)
美術科1年風景画合宿報告・・・・・・・・	美術科担当者 餅原 宣久	・・・(103)
英語コース語学研修実施報告・・・・・・・・	英語科担当者 上村 武志	・・・(106)
書道コース夏季宿泊研修実施報告・・・・・・・・	書道科担当者 鈴木 寛治	・・・(109)
平成26年度の主な行事・・・・・・・・	教務部	・・・(112)
平成26年度校内研究授業・研究発表の記録	教頭	・・・(113)

平成26年度

鹿児島県立松陽高等学校

## 序

校長 田淵敏彦

研究紀要「松濤」第31号が上梓される運びとなりました。初めに玉稿を寄せていただいた職員並びに編集に携わっていただいた職員に、心から感謝の意を表しますとともに、これまで本校に勤務された多くの職員の研究や実践が、脈々を受け継がれ結実していることに改めて敬意を払います。

この研究紀要は、本校職員の一年間にわたる各教科の学習指導、県総合教育センター研究提携における研究報告及び研究公開授業指導案、特色ある生徒研修会、職員の発表会や展覧会の報告など、教育活動や研究実践報告等を集大成したものです。

教師という仕事は、ほとんどの時間を自分より未熟な人間を相手に過ごすという希少な仕事であります。それ故、教師の絶え間ない勉強や研究は、学校教育の根幹であり、矜持でもあります。このことを真摯に受け止め、生徒のために第一に考える職員の姿が本稿には見られます。

さて、中央教育審議会は、昨年12月末に答申をまとめました。答申では、現行の大学入試センター試験を廃止し、知識の活用力をみる「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を導入することとしています。そして学力評価テストは、年に複数回実施し、「教科型」に加えて、教科・科目の枠組みを超えた思考力・判断力・表現力を評価するため、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせ出題し、知識を活用して自ら課題を発見し、解決する力をみることであり、解答方式は多肢選択方式だけでなく、記述式を導入すると示されています。各大学の個別入試は、新テストで学力を担保した上で、小論文や集団討論、プレゼンテーション等で主体的に学ぶ姿勢や問題を発見、解決する力を評価し、選抜することとしています。

実現すれば、共通一次試験導入以来の大きな改革であると言われていています。答申の中で、着目すべき点の一つは、教科・科目の枠組みを超えた「合教科・科目型、総合型」の出題であります。高校生に「合教科・科目型」に対応できる力を身に付けさせるためには、高校生を指導する教職員にも、その必要とされる資質・力量並びに指導力が求められるはずであります。それ故、現実問題として、教科の専門性はもちろんでありますが、教科・科目を超えた（教科横断的な）知識・技能・指導力をつけた教職員が、これからの高校教育に求められていくと思われれます。

教育活動における「不易」な部分を大切にしながら、時代に即した「流行」を追求していく姿勢がいつの時代にも求められるのです。

新たな高校教育を展開する上で、教職員にとっても「新たな学び」を追求していかなければなりません。このことが「学び続ける教師像」の証左であり、教師の謙虚な姿勢と教育への研究心が生徒・保護者の信頼を得るのであります。

終わりに、日頃の教育活動の息吹が記されている本稿を御高覧いただいた皆様の御教示と御意見をお願い申し上げまして、第31号の発行の序とします。

# 平成 24 年度～平成 26 年度 研究報告（3 年間のまとめ）

## I 研究主題

**個々の生徒の学力向上と進路実現を目指す授業改善**  
 －基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用を図る学習指導－

## II 研究主題設定の理由

### 1 新学習指導要領の趣旨から

平成 25 年度入学生から（数学及び理科は平成 24 年度入学生から）実施されている新学習指導要領では、生きる力の育成、中でも確かな学力の要素である「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「その活用を図った思考力・判断力・表現力の育成」は、喫緊の課題である。

### 2 生徒の課題から

本校の生徒は、確かな学力が十分身に付いているとは言えず、個々の生徒の進路実現を図るために生徒の実態を踏まえた授業改善が必要である。

### 3 研究推進の立場から

全教科において、授業改善を通じて研究の具体化を図る必要がある。

## III 研究の構想

### 1 研究期間

平成 24 年度～平成 26 年度（3 年間）

### 2 研究内容概略

- (1) 各教科（学科・コース）において各学年で生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化
- (2) 基礎的・基本的な知識・技能の習得を確実にする繰り返し学習指導の検討
- (3) 習得した知識・技能の活用を促す学習指導の検討
- (4) 教科や学年の特性を生かした学習教材やワークシートの開発
- (5) 学習領域の関連付けや教科間の連携
- (6) (1)～(5)の各教科における検証，次年度への継続

### 3 3 年間の研究計画

年度	主な内容
平成 24 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本校生徒の現状と実態について各教科で把握，分析する。</li> <li>・ 本校生徒が卒業時まで習得すべき基礎的・基本的な知識・技能について検討する。</li> <li>・ テーマに沿った学習指導法の工夫や改善，学習教材の開発等を行う。</li> <li>・ 研究内容に基づいた実践授業を公開し，研究内容の検証を行う。</li> </ul>
平成 25 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1 年目の研究を基に，研究内容を具体的に精査し，更なる授業改善を図る。</li> <li>・ 本校生徒が各学年で習得すべき基礎的・基本的な知識・技能について検討する。</li> <li>・ テーマに沿った学習指導法の工夫や改善，学習教材の開発等を行う。</li> <li>・ 研究内容に基づいた実践授業を公開し，研究内容の検証を行う。</li> </ul>
平成 26 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1・2 年目の研究を基に，研究内容を具体的に精査し，更なる授業改善を図る。</li> <li>・ 本校生徒が各学年で習得すべき基礎的・基本的な知識・技能について明確にする。</li> <li>・ テーマに沿った学習指導法の工夫や改善，学習教材の開発等を行う。</li> <li>・ 研究内容に基づいた実践授業を公開し，研究内容の検証を行う。</li> <li>・ 研究のまとめを行う。</li> </ul>

#### 4 研究の体制

教務部の研究開発係が県総合教育センターと提携しながら研究を行う。係は世話係2名と各教科1名（保健体育科を除く）の10名から成る。研究の体制は、研究開発係が教務部、進路指導部、各種委員会の学力向上対策委員会、各教科と連携を図りながら研究を進めていく。（図1）

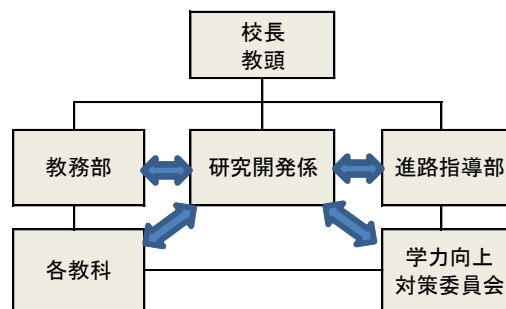


図1 研究体制

#### 5 研究提携における教科研究概要について

##### (1) 3年間の各教科研究テーマ一覧

国語	ことばに対する興味・関心を喚起し、進路実現に向けた表現力向上を目指す指導法の研究～基礎的・基本的知識・技能の習得と活用を図る国語科学学習指導～
地歴 公民	科目横断的学習内容の重視による社会的事象に関する基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用
数学	「学び直し」と「数学的活動のテーマ別学習」を生かした授業構成に関する研究～小中学校の内容から大学入試までを見通して～
理科	学力を向上させる効果的な指導法の研究～中学校での既習事項との関連を重視して～
音楽	表現及び鑑賞の実践を通して学ぶ、音楽理論やソルフェージュ指導の在り方
美術	生徒の個性と表現の多様化に応じた、美術活動への意欲を高める指導
英語	生徒の実態にあった指導法の研究～読解力と論理的思考力をもった生徒を育てるために～
家庭	中高等学校の学びのつながりを重視し、生徒の問題解決力の育成を中心とした学習指導法の研究～キャリア教育の視点を取り入れながら～
情報	情報モラルと日常モラルを身に付け、よりよく生きる生徒の育成

##### (2) 本研究1年目（平成24年度）教科研究の概要一覧

国語	○ 各学年における生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化 ○ ことばに対する興味・関心の実態把握と習得状況の把握
地歴 公民	○ 各科目での共通する学習内容及び生徒に身に付けさせたい基礎的・基本的知識・概念の明確化 ○ 現時点で生徒の到達度を授業や課題、定期考査等を通じての把握
数学	○ 第1学年を研究対象学年として、レディネステストなどによる現状把握とそれに応じた学び直しを活かした授業構成の研究
理科	○ 生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化 ○ 中学校での既習事項と、高等学校で習得すべき基礎的・基本的な知識・技能との関連付け
音楽	○ 入学前の知識及び技能の個人差を補う音楽理論や実技の指導の在り方の検討
美術	○ 新学習指導要領に対応し、教育課程や選択専門科目等の見直し ○ 今日のニーズに合った指導計画の整備
英語	次の観点での各学年での取組の交流（ワークシートや指導体制等） ○ 学習方法の習得 ○ 基礎的な語彙・文法力（語順）の習得
家庭	○ 特定の課題に関する調査（技術・家庭）を活用し、生徒の実態調査と分析 ○ 中学校教諭との連携 ○ 学習指導法（生徒の問題解決力の育成）の工夫 ○ 学校家庭クラブ活動と連携し、キャリア教育の視点を取り入れた学習指導法の工夫
情報	○ 情報モラルの班別学習、日常モラルを育む授業、情報モラルの標語づくりの在り方の研究

## (3) 本研究2年目(平成25年度)教科研究の概要一覧

国語	○ 生徒の到達度を基に各学年における習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化 ○ 基礎的・基本的な知識・技能を効果的に習得させるための指導法研究と授業改善
地歴 公民	○ 科目間の学習内容の関連を図った授業づくり ○ 各科目の授業における地図活用の工夫・改善
数学	○ 第2学年を研究対象学年として、1年目と同様の研究を、数学Ⅱまたは数学Bの内容において実践
理科	○ 生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化、検証 ○ 中学校での既習事項との関連付けに重点を置いた、高等学校での科学的な知識・技能を効果的に習得させる指導法の研究 ○ 生徒の実態を踏まえた授業改善
音楽	○ 入学前の知識及び技能の個人差を補う音楽理論や実技の指導の在り方の検討
美術	○ 生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識や技能の明確化 ○ 指導上の問題点や課題等の洗い出し
英語	次の観点での各学年における取組の交流(ワークシートや指導体制等) ○ 語彙力・文法力の蓄積 ○ 文章の構成を読み解く力の習得 ○ 文章の主張を読み取る力の習得 ○ 知識の蓄積
家庭	○ 特定の課題に関する調査を活用した生徒の実態調査と分析 ○ 学習指導法(生徒の問題解決力の育成)の工夫・食生活分野における研究活動 ○ 家庭クラブ活動と連携しながら、キャリア教育の視点を取り入れた学習指導法の工夫
情報	○ 高校入学時点での教科「情報」に関連する生徒の実態調査とその分析 ○ 生徒の実態に即した情報モラルと日常モラルを身に付けさせるための指導法の研究

## (2) 本研究3年目(平成26年度)教科研究の概要一覧

国語	○ 各学年における進路目標達成のための習得すべき事項の明確化 ○ 具体的な改善策に基づいた授業実践と評価 ○ 研究のまとめ
地歴 公民	○ 地歴・公民科における共通の資料・地図の利用による、科目間連携の強化 ○ 課題・考査等での科目間連携の強化による基礎・基本的知識の定着向上 ○ 研究のまとめ
数学	○ 第2学年における学び直しを活かした授業実践と、学習集団の経年比較分析 ○ 第3学年における、特定のテーマに絞った大学入試演習問題の作成
理科	○ 基礎的・基本的な知識・技能の習得をより確実にするための指導法の研究 ○ 研究のまとめ
音楽	○ 各学年における生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化 ○ 基礎的・基本的な知識技能を効果的に習得させるための指導法研究と授業改善実践 ○ 研究のまとめと評価
美術	○ 各領域において、基礎的・基本的技能を発展的に生かすための指導の研究 ○ 今日のニーズに対応できる作品制作を目指した指導の研究
英語	次の観点での各学年における取組の交流(ワークシートや指導体制等) ○ 語彙力・文法力の蓄積 ○ 文章の構成を読み解く力の習得 ○ 文章の主張を読み取る力の習得 ○ 論理的思考力の育成 ○ 思考した内容の伝達力の育成
家庭	○ 特定の課題に関する調査の分析とまとめ ○ 中高等学校の学びのつながりについての分析とまとめ ○ 研究のまとめと評価
情報	○ 社会の流れに対応できるモラル教育の研究 ○ 研究のまとめと評価

#### IV 本研究の内容と成果・課題

##### 1 本校の現状と実態についての把握・分析（特に本研究初年度に把握した実態について）

###### (1) 生徒の生活面や進路に対する意識について

ア 普通科は文科コース・体育コース・書道コース・英語コース・理科コースに分かれており、また普通科の他に音楽科・美術科がある。このような学校の特性上、部活動が盛んであり、85%の生徒が部活動に所属している。JR通学生が多く、北薩や始良方面からの遠距離通学生も多い。部活動や遠距離通学以外にも様々な原因が考えられるが、生徒は概して自宅で過ごす時間が短く、十分な宅習時間の確保が厳しい。

イ 進路希望調査によると、生徒の進路希望は四年制大学・短期大学・専門学校・公務員などであるが、四年制大学への進路希望者が毎年全体の6割程度であり、生徒の多くは大学進学を目指している。

###### (2) 生徒の学習に対する意識や教師の実感（全校生徒と教員を対象としたアンケート結果分析）

ア 高校に入学したての頃や、新学期がスタートした頃は、生徒は比較的高い学習意欲をもつが、学期が進むにつれ、高校生活への慣れからか学習に対する意識が低くなり、学ぶ意義を感じにくくなっている（図2, 3）。特に基礎的・基本的な知識・技能の習得が求められる1・2学年次において、いかに基礎的段階で喜びを感じさせるか、またその学びが将来につながるという意識をどのようにしてもたせるのか、ということは本校の大きな課題と言える。

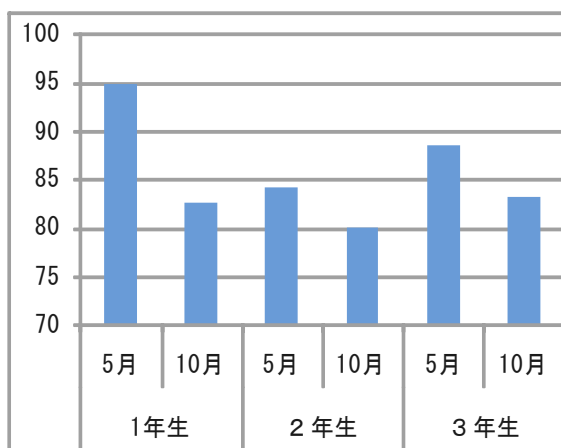


図2 調査項目「今学ぶことは自分将来のために必要だと思う」

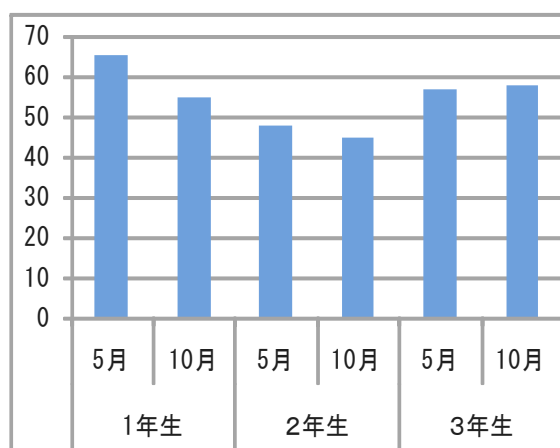


図3 調査項目「学ぶことは楽しい」

（補足：図2, 3について）

項目に対して生徒は4段階（①自分には全くあてはまらない～④自分によくあてはまる）で回答した。図1, 2の数値は、「③自分にあてはまる」と「④自分によくあてはまる」の合計（%）である。調査は同じ年の5月と10月に行った。

図2は、全学年で5月より10月の方が全体に占める割合が下降している。図3では1学年から2学年にかけて下降が著しいが、3年生では割合は上昇している。

イ 語彙や文法の学習をおろそかにしてはいけないことを多くの生徒は分かっている（生徒の自由記述の回答より）。また基礎・基本の繰り返し学習が学力向上につながるという認識もある（「英単語の小テストを続けていくうちに、長文が読みやすくなった」）。一方で、教師の実感としては、語彙力や文法の理解力がまだ不足しているなど、基礎・基本が定着していないと感じている。

ウ 教師は、「中学校までの学習内容を生徒は十分に理解していない」、「中学校までの学びと高校での学びを連続帯として捉えるような取組が更に必要だ」と感じている。

##### 2 本校生徒が卒業時まで習得すべき基礎的・基本的な知識・技能についての検討

3年間授業改善を進める中で、本校で卒業時まで生徒に身に付けさせたい知識や技能は何かを各教科検討してきた。本研究の集大成として、次頁に学年ごとの一覧表にまとめてみた。

(1) 1 学年までに生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能について

国語	○ 物事（教材）に対する意識を高めるために、語彙・文法事項などに興味・関心をもつ。
地歴 公民	○ 世界地図をもとに基本的な地名や国名を知識として身に付ける。
数学	○ 式の展開，因数分解，根号や絶対値を含む式の計算ができる。（その他省略。全6項目）
理科	○ 中学校での既習事項と，高等学校での学習内容の関連性に気付く。
音楽	○ 音楽理論の基礎知識を身に付ける。 ○ ソルフェージュの基礎技能を養う。
美術	○ 用具の使用に慣れることができる。 ○ 正確な形態を理解する力を身に付けることができる。 ○ 観察力を描写力につなげることができる。
英語	○ 教科書の英文を聞き手にわかりやすく音読することができる。 ○ 予習・復習の仕方など，学習方法が分かる。
家庭	○ 生活課題を把握する。 ○ 課題解決に向けた知識や技術を実践的な学習を通じて身に付ける。 ○ 学校家庭クラブ活動と連携しながら，生活に関する職業の進路選択を視野に入れた学習をしていく。
情報	○ ロールプレイやKJ法などの学習法を通じて，望ましい情報社会の在り方を主体的に考え，情報モラルと日常モラルについて，必要な知識と態度を身に付ける。

本研究によって，中学校との接続等に配慮して学習指導を行おうとする姿勢が，これまで以上に教員の間で高まった。

中学校と高等学校の学びは異なるという視点から，例えば音楽科は，これまで専門的に学習していない生徒が多い音楽理論やソルフェージュの基礎知識・技能を養うことを1学年次の目標に掲げた。英語科においても，高等学校から本格的に触れる辞書を使った学習法を定着させることを挙げている。一方で，家庭科や理科，情報科はいかに中学校までの既習事項や日常生活との関連性に気付かせるか，といった視点を重視している。

1 学年次には後半になるにつれ学ぶ楽しさを感じにくくなっていることが分かっており（図3参照），国語科のように興味・関心をもたせることを指導の柱とすることも，学力向上につながると考えられる。

(2) 2 学年までに生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能について

国語	○ 興味・関心をもって学習した語彙，文法事項を確実に習得し，活用できるようになる。 同時に，今まで習得した語彙，文法力などを生かし，自分の考えを相手に的確に伝えるための表現力を育成する。
地歴 公民	○ 地図を基に国際関係を，歴史的・地理的条件から考察する。
数学	○ 図形と方程式において，線分の内分点，外分点や直線，円の方程式などの知識を問題解決に活用できる。（その他省略。全6項目）
理科	○ 中学校での既習事項と，高等学校での学習内容の関連性に気付く。 ○ 生徒自ら，学習内容と既習事項との関連性を考える。
音楽	○ 音楽理論の知識やソルフェージュ能力を，実技レッスン等で活用できるようになる。
美術	○ 作品の制作を集中して取り組むことができる。 ○ 自分なりに課題を持って，研究しながら取り組むことができる。 ○ 観察や表現の理論を裏付けした形で表現できる。
英語	○ 教科書等を読み，細かい情報まで読み取ることができる。 ○ 高校の新出文法を理解する。
情報	○ LHRや各授業，情報モラル講演会等を通じて，社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を身に付ける。

2 学年次は基礎的・基本的な知識・技能の習得を確実にするとともに，習得した知識・技能を活用できることを目標に掲げる教科が多い。また校外研修など体験学習が行われることの多い学年で，学校行事として知識や習得した技能を使う場面を設定している。

(3) 3 学年までに生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能について

国語	○ これまで習得した語彙，文法力などを生かし，自分の考えを相手に的確に伝えるための表現力を育成する。
地歴 公民	○ 現在の国際社会における諸問題について，歴史的・地理的条件から考察し，論理的に表現する。
数学	○ 大学入試センター試験の問題について，問題の誘導を理解し，これまでの既習事項を用いて，問題解決を図ることができる。（その他省略。全6項目）
理科	○ 生徒自ら，学習内容と既習事項との関連性を考える。 ○ 学習内容の系統的なつながりを理解し，広い視点で知識・技能を習得する。
音楽	○ 学んだ理論や身に付けた技能を生かして楽曲分析を行い，演奏に反映することができる。
美術	○ 作品の制作を集中して取り組むことができる。 ○ 自分なりに課題をもって，研究しながら取り組むことができる。 ○ 観察や表現の理論を裏付けした形で表現ができる。
英語	○ 教科書等の内容についての質問に英語で応答できる。 ○ 教科書等を読み，自分の意見を論理的に表現できる。 ○ 3000 語程度の語彙力を身に付け，英語を読んだり聞いたりできる。

最終的には，身に付けた基礎的・基本的な知識・技能を，表現活動や言語活動において活用できる力を求める教科が多い。さらに，地歴公民科や理科が掲げたような，自分たちの学びを社会の問題やより広い系統的なつながりとして捉える力は，高校卒業後，生徒たちが社会で生き抜くために必要な生きる力であり，同時に大学入試等で求められる学力にもつながると思われる。

(4) 成果と課題

本研究によって，3年間で生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能を明確にし，教科や全職員で共有することができた。生徒の学力向上に向けて，教師が共通理解の上，指導していくことが重要であるため，このことは大きな成果であると考え。上記のような知識や技能を身に付けさせるには各学年でどのような指導を行えばよいかについて，引き続き，教師間の対話を欠かさないことが大切である。

3 基礎的・基本的な知識・技能の習得を確実にする繰り返し学習指導の検討（各教科主な実践を抜粋）

(1) 基礎知識を身に付け，基礎技能を養う授業改善

ア 基礎的な知識を定着させるための小テストや日々課題等を実施した（国語・数学・理科・英語）。定期考査の漢字の正答率が向上したり（国語），英文法の知識が定着したり（英語）するなど，一定程度の学力向上につながった。

番号	単語・熟語	発音記号	品詞	注、動詞の活用
1	Burden	[ˈbɜːrɪdn̩]	名	負担
2	military	[ˈmɪlətəri]	名	軍の
3	gradually	[ɡrædʒuəli]	副	だんだん
4	base	[beɪs]	名	基地
5	remain	[rɪˈmeɪn]	動	のこる/残る remain, remained, remaining

生徒の単語ノート例

イ 単語ノート（ボキャブラリー・ビルディングノート）を作成させ，

教科書や模試等で出た単語を全てまとめさせた。3年間継続した結果，「ボキャビルノートに書くと，模試の復習のたびに繰り返し同じ単語が使われているので覚える」と生徒は感じるようになった（英語）。

ウ 「学び直し」を1・2学年で取り入れ，知識・技能を確実に定着させ，既習事項を多面的に活用する力を育てる工夫を行った（数学）。

エ 表現の基礎としての素描力の向上を目標に指導を行った結果，学年が上がるにつれ，「素描が得意だ」とか「素描が好きだ」という回答が増え，苦手意識を克服していることがわかった（美術）。

オ 3年間の授業での音楽理論やソルフェージュの系統的な学習により，「音楽の知識が増え，聴音が得意になった」とか「自分の演奏する曲を分析するときに発見があった」という意見が寄せられ，学んだ基礎知識が生徒自身の演奏や活動に生かされた（音楽）。



歌唱授業の様子

(2) 課題

「小テスト実施直後は既習事項を覚えているが，本当に全員に学習内容が定着しているのか」という意見が教師から寄せられた。小テスト後，正答率の低い問題は解説を詳しくするとか，間違えた箇所を生徒自身が自主的に見直して定着を図るようにするなど，教師が授業を更に工夫すると同時に，生徒が主体的に学ぶ姿勢を涵養することが重要である。引き続き継続して指導法の研究や授業改善を行っていきたい。



#### 4 習得した知識・技能の活用を促す学習指導の検討

##### (1) 表現活動の実施や問題解決型の活動の実施

- ア 既習の語彙や文法を使った表現活動や読解活動を積極的に行った（国語・英語）。アンケート結果より、英文読解の上で重要な構成・主張を読み取る力が3年間で向上したことが分かった（英語）。
- イ グループでディスカッションやディベートを行い、生徒が主体的に活動し発表する場を設定した（情報・国語・英語）。また、プレゼンテーションソフトを使って、生徒が発表を行った（情報）。
- ウ 栄養バランス弁当や家族の食事の献立を作ることを課題とし、その後作った弁当等について発表させた。生徒自身が献立の問題点や課題を見つけ、改善する方法を考えることができた（家庭）。
- エ 風景画合宿での野外活動や陶芸窯元の見学など、学校行事やカリキュラムを工夫して美術、工芸・デザインの概要を学ばせ、計画的に制作活動を行った（美術）。



##### (2) 課題

教師が一方向的に教え込んだり、既習事項の小テストを実施したりするだけではなく、実験器具を操作したり、話し合いに参加したり、制作活動を行ったり、自分の言葉で表現したりすることによって、既習事項をより正確に再現できることが可能になるとともに、基礎・基本が確実に習得できるようだ。日常の授業において継続して知識・技能の活用を促す学習活動を設定することは難しいが、各教科更に取組を広げることが求められる。

#### 5 教科や学年の特性を生かした学習教材やワークシートの開発

##### (1) 視覚的に分かりやすい教材やレディネステスト等の開発

- ア 授業内容の理解深化のために、美術科の生徒が漫画やポスターの制作を行い、美術科以外のクラスでも閲覧したことで、生徒の興味・関心を引き出した（国語・情報）。
- イ 中学校の教科書の内容や図を用いた。原子の大きさのイメージを捉えやすくするためオリジナルの図も併せて使用したり、火成岩の特徴をまとめた図を復習で何度も使用したりするなど、視覚的に概念や特徴を捉えられるよう工夫した（理科）。
- ウ 意見が出やすいように付箋紙を使って書き出し、その後広幅用紙に貼付して、内容ごとに小見出しを付けた。視覚的に分かりやすく分類できるので、実態把握や問題点の整理に役立った（情報）。
- エ 授業中の学び直しをより効果的なものにするためのレディネステストの開発を行った。生徒の既習内容の定着度を知り、得意な分野、苦手な分野を確認することで授業のポイントを押さえて指導することが可能となった（数学）。



##### (2) 課題

レディネステストは本研究で完成に至らず、引き続き問題検討を行い、より生徒の実態を把握するものにしたい。またオリジナルの教材等を教科内外で共有する場が少なかった。指導に効果のあったものについては、今後機会を設け指導に役立てるようにしたい。

## 6 学習領域の関連付けや教科間の連携

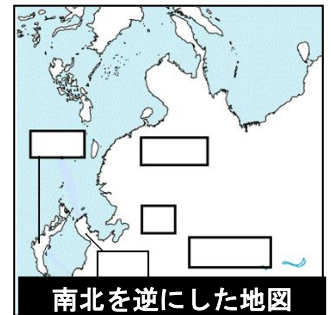
### (1) 過去の学習（中学校までの学習を含む）との関連付け

ア 中学校の学習指導要領，教科書を基に，高等学校での学習単元と中学校での既習事項を対応させて表にまとめた。また中学校の教科書の内容や図を用いた（理科）。

イ 中学校で学習した内容に関する確認テストや，高校入学時点での生徒の実態を把握するためにアンケート調査を行った。その結果から定着度を分析して指導に生かした。生徒の実態を改善するための授業実践を行った（理科・情報・家庭）。

### (2) 地歴公民科における科目間の連携

地理以外の科目でも地図の活用を図った。世界史・日本史・地理で共通の地図を用い考查問題を作成するなど，生徒の理解を深めさせる取組を行った。また南北を逆にした地図の提示など，いつもと違う教材の提示の仕方に生徒は高い関心を示した（地歴・公民）。



### (3) 課題

中学校の教科書や問題を見せただけでは，生徒の記憶を呼び起こし難く，それ以外のアプローチが必要ではないか，という指摘が出された。引き続き研究を進めていきたい。

## 7 本研究の成果と課題のまとめ

### (1) 成果

ア 各教科の特性を生かしながら，授業改善を全教科で行うことができた。語彙力や素描力といった基礎的・基本的な知識・技能の習得を確実にする学習指導を検討・実践し，更にその活用を促す学習内容として，既習文法を使った作文やディベートといった表現活動を授業に取り入れるなど工夫した。

また，必要に応じて図や付箋紙など視覚的に分かりやすい教材を用い，授業内容の理解深化を図った。

イ 本校生徒が卒業時までには習得すべき基礎的・基本的な知識・技能について，教科内で共通認識することができた。また，生徒の学力や現在の学習内容を教科ごとに見直したり，分析したりすることで，教科内でこれまでの指導の在り方について検討する機会が増えた。

ウ 各教科の研究しているテーマに基づく実践授業を毎年公開し，多くの先生に参観してもらった。授業改善に直結する実践的な研究となったようだ。

エ 多くの教科で，中学校とのつながりを意識した授業展開を心掛けるようになった。

オ 3年間で生徒の1日当たりの自宅学習時間は約1.5倍に増えている。また，学校評価に関するアンケートの結果からも，学習の習慣化に努める生徒が増えていることが分かっており，生徒の学力向上への意欲は高まっている。

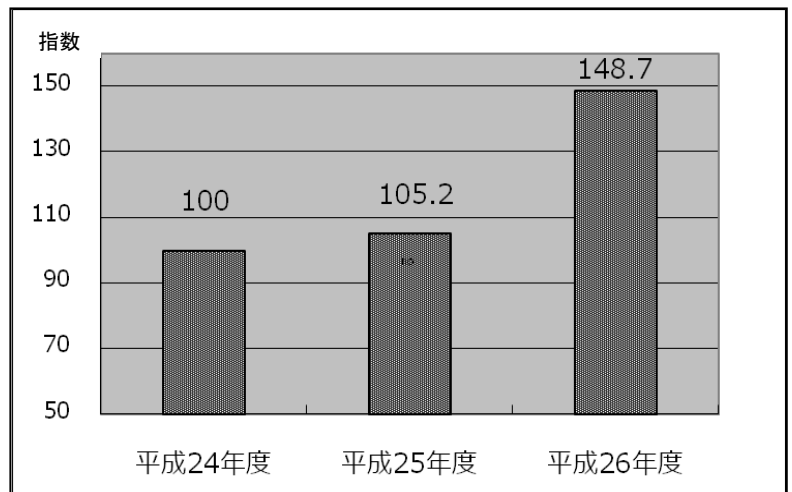


図4 自宅学習時間一日平均（毎年7月実施分・全校生徒対象）  
（平成24年度を100とした指数を表示）

### (2) 課題

全校体制で生徒の進路実現に向け最善は尽くしているものの，生徒の進路希望を100%達成できる訳ではない。特に，四年制大学への進学率は50%には届かず，四年制大学を希望していた生徒の12~18%は卒業後，大学受験のための浪人や，短期大学，看護・専門学校への進学といった進路選択をしている。今後とも授業改善を模索しながら継続し，生徒の一層の学力向上を図る努力を重ねていきたい。

【各教科資料】

国 語 科

1 3年間の研究テーマ

ことばに対する興味・関心を喚起し、進路実現に向けた表現力向上を目指す指導法の研究  
～基礎的・基本的知識・技能の習得と活用を図る国語科学習指導～

2 本教科おける3年間の研究の流れ

研究1年目（平成24年度）

- ・ 各学年における生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化
- ・ ことばに対する興味・関心の実態把握と習得状況の把握

→

研究2年目（平成25年度）

- ・ 生徒の到達度を基にした各学年における習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化
- ・ 基礎的・基本的な知識・技能を効果的に習得させるための指導法研究と授業改善

→

研究3年目（平成26年度）

- ・ 各学年における進路目標達成のための習得すべき事項の明確化
- ・ 具体的な改善策に基づいた授業実践と評価
- ・ 3年間の研究のまとめ

	国語科の研究内容	取り組んだ具体策	反省や課題
平成 24 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各学年における生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化</li> <li>・ ことばに対する興味・関心の実態把握と習得状況の把握</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各学年による分析（現在の問題点）</li> <li>・ 授業改善案を基に授業計画を立てる（学年ごとに「興味・関心」「習得」「活用」の3観点の比重を変え効果的に指導を行う工夫）</li> <li>【公開授業】</li> <li>1学年 折句（和歌の修辞法）</li> <li>→伝統的な言語文化への意識付け</li> </ul>	<p>基礎的・基本的知識・技能の習得という点においては生徒の実力定着が芳しくない。だからこそ授業の改善が必要であり、効果的な授業を計画するためにも、細やかな分析が必要である。</p>
平成 25 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒の到達度を基にした各学年における、習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化</li> <li>・ 基礎的・基本的な知識・技能を効果的に習得させるための指導法研究と授業改善</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各学年による授業実践</li> <li>・ 小テストの工夫</li> <li>・ 視覚的教材の使用</li> <li>・ 評論文の構成を理解させるための実践</li> <li>・ 語彙力向上のための工夫</li> <li>【公開授業】</li> <li>2学年 更級日記（敬語理解）</li> <li>→基礎的基本的な力の定着</li> </ul>	<p>更なる定着を図るため、小テストや学習教材・ワークシートの工夫を進める。基礎的・基本的知識・技能を効果的に習得・活用するための授業改善や指導の工夫を引き続き行う。</p>

3 本年度の研究の概要

- ・ 各学年における進路目標達成のための習得すべき事項の明確化
- ・ 具体的な改善策に基づいた授業実践と評価
- ・ 3年間の研究のまとめ

4 本年度の研究の実際

国語科では、進路実現の際に最も必要な学力を、自分の考えを相手に伝える「表現力」と考えた。卒業後の生徒たちが社会生活を営む上で身に付けておいてほしい「表現力」を国語科で考え、高校3年間でその力を育成するために段階的な達成目標を設定した。本年度は、各学年における到達すべき目標を定めた上で、学年終了時までの習得事項を明らかにした。併せて、達成目標に応じて授業や小テストの方法の改善策を検討し、授業実践を行った上で、研究の成果と課題を考察した。

○国語科において各学年で生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能

個々の生徒の進路目標を達成できる学力へ

↑↑↑

3 学年	<p><b>〔達成目標〕</b> 今まで習得した語彙、文法力などを生かし、自分の考えを相手に適切に伝えるための表現力を育成する。</p> <p><b>〔習得すべき事項〕</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 課題に対する情報収集や情報の取捨選択ができる。</li> <li>・ 根拠や事実に基づいて意見を深め自らの表現を推敲することができる。</li> <li>・ 自分の意見を論理的に組み立てることができる。</li> <li>・ 相手の立場や考えを尊重して自分の考えを広げ表現することができる。</li> </ul>
------	--

3年終了時までには習得すべき事項

↑↑↑

2 学年	<p><b>〔達成目標〕</b> 興味・関心をもって学習した語彙、文法事項を確実に習得し、活用できるようになる。同時に、今まで習得した語彙、文法力などを活かし、自分の考えを相手に適切に伝えるための表現力を育成する。</p> <p><b>〔習得すべき事項〕</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 語句の意味を確認し、日常生活のどのようなシチュエーションで用いられるか考えさせる。</li> <li>・ 文章における日本語特有の表現を味わい、自らの表現に活かす。</li> <li>・ 古典のことばや表現に着目し、古典特有の語感や意味を学び、現代語にも通じることばの意味や表現を味わう。</li> </ul>
------	--

2年終了時までには習得すべき事項

↑↑↑

1 学年	<p><b>〔達成目標〕</b> 物事（教材）に対しての意識を高めるために、語彙・文法事項などに興味・関心を持つ。</p> <p><b>〔習得すべき事項〕</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基礎的・基本的な語句の意味を理解できる。</li> <li>・ 間違えやすい漢字や定着しにくい漢字を意識を持って読み書きできる。</li> </ul>
------	--

1年終了時までには習得すべき事項

○本年度の各学年の実践

	実践	成果	課題
1 学年	漢字を小テストで確認するのではなく、日々題として百字漢字プリントを配布し誤字で習得することがないよう点検した。古語単語テストは、例文で確認するような日々題を課した。	点検を通し生徒の間違いに気付くことができた。初期の段階で言葉のイメージをもたせた。	考査において定着の十分さが分かった。アウトプットできる工夫が必要である。
2 学年	教科書・漢字テキスト等で触れる語彙・慣用表現について、以下の3点の取り組みを心がけた。①語としての意味を調べさせ、本文中での意味を理解させる。②短文を作成、発表させ、語の真の意味に適切か検討させる。③定期テスト等に出題し理解度を把握する。	ことばの意味を定着させ、応用する力を身に付けることができた。	必要な語彙力の量的なガイドラインを示すことができない。適当な語彙・慣用句の教材が求められる。
3 学年	自己推薦書や志望理由書の作成・発表の機会を設け、自分の考えを相手に効果的に伝えるための演習を行った。また、ディベートやディスカッションなどを通して、集団での話し合いの技術を育成した。	自らの意見を持ち、言語で表現し発表する力や、相手の意見を聞く力が身に付いた。	発展的思考力の不足。総合的な知識を獲得したうえで思考し、論理的表現力を育む必要がある。

## 5 本研究のまとめ

本研究では、生徒の語彙力や文法力などの基礎的・基本的な力の習得・活用を通して、進路実現のための「表現力」向上を目指した。ここでいう「表現力」とは、進学を目的としたものにとどまらず、社会人として求められる表現能力を見据えたものである。生徒は、将来、社会において、様々な課題を解決するために、自ら考え判断したことを表現していかなければならない。そのような「表現力」を育成するため、本校国語科においては上記のように、各学年段階における達成目標を共有した。これは、「表現力」を身につける必然性を生徒にどう意識づけるかという観点から各学年段階において設定したものである。1 学年では、自分自身が言葉に対する興味・関心をもつことが重要である。さらに2 学年においては、習得した言葉を活用させ、相手に伝えるための意識付けをし、3 学年では、社会人としてのコミュニケーション能力を育む必要がある。つまり、この「自分の意識付け」→「相手意識」→「社会意識」の流れを踏まえた系統的な授業実践や指導法を実践し、「表現力」をスパイラルに高めることが生徒の進路実現につながると考えられる。

ただし、本研究においては現代文、古典という2つの科目の特性を踏まえたそれぞれの研究結果が出せなかった。日本語の言語文化や伝統文化を生徒たちにいかに学ばせ、意識づけさせるかを今後も考察する必要がある。また、現段階では、「表現力」の評価規準を明確にしていなかったため、生徒の実態を踏まえて教科で共有したい。以上のことを今後の課題として挙げ、本研究のまとめとする。

1 3年間の研究テーマ

科目横断的学習内容の重視による社会的事象に関する  
基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用

2 研究テーマ設定の理由

研究テーマの設定にあたり、地歴・公民科では、全体のテーマである「基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用」から本校生徒に必要とされる基礎的・基本的な知識及び技能とは何かという考察を行った。

まず、知識の習得においては、本校生徒の現状から、中学校社会段階での知識の習得が十分でないということが、大きな課題として考えられた。

しかし、地歴公民科の各科目で、個別に、基礎的・基本的であると考えられる知識・技能の習得を目指すのでは効率も悪く、また取り扱いの違いにより偏った視点での知識・技能に陥ってしまう可能性があると考えた。

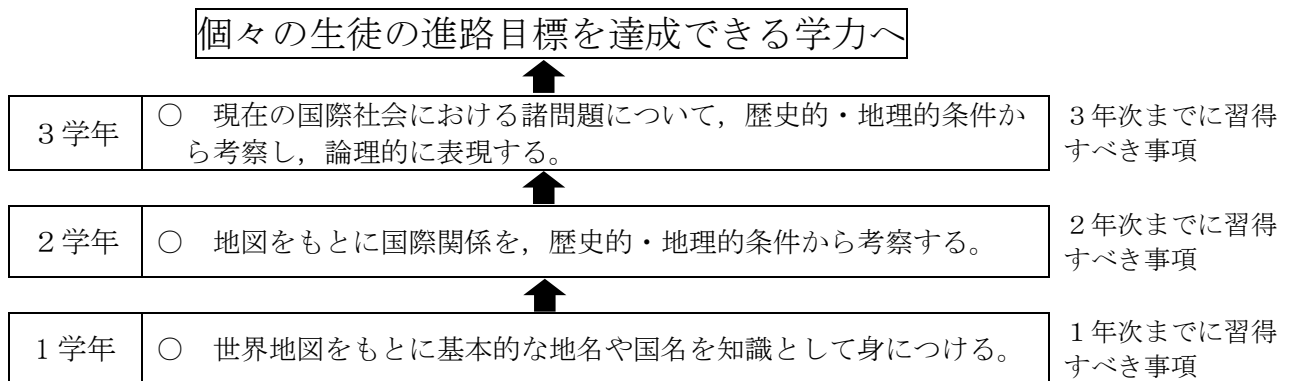
そこで、科目間での連携を強め、どの科目にも共通して習得すべき知識や概念を「基礎的・基本的な知識・技能」と位置づけ、これを重点的に指導することで、生徒に必要な知識の補完を行うことを目指すべきであると考えた。

なお、知識を習得しても、それを基に考察を行ったり表現を行ったりする活動が苦手であることが大きな課題であった。これについても、各科目で学習する社会的事象を一方的な観点でなく、複数の視点からとりあげることで、考察のきっかけを与えることが重要であると考えた。

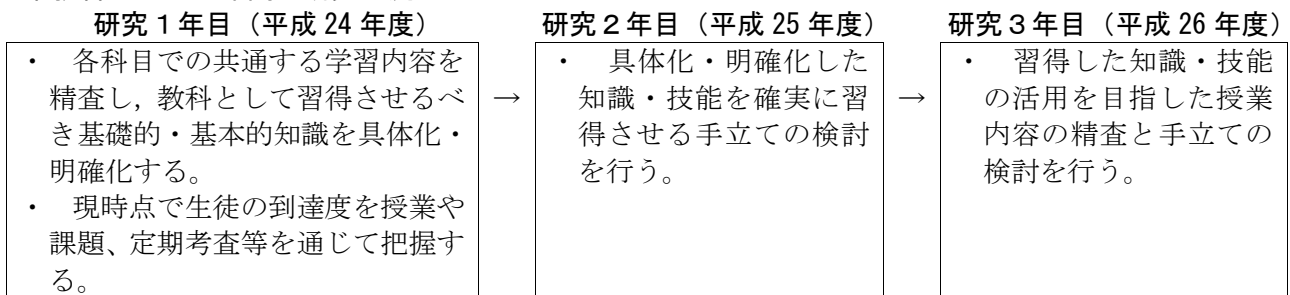
また、授業や定期考査、長期休業中の課題等の機会を通して、簡易な論述問題を積極的に課していくことも、表現の技能の向上には必要であると考えた。この際も複数の観点から指導できる内容を取り上げれば、生徒が表現を行う上で、深く考察を行わせることが期待できる。

これらの考察を通して、地歴・公民科においては科目内で、科目横断的学習内容の重視によって生徒に基礎的・基本的な知識・技能を習得させ、またその知識・技能を活用させていきたいと考える。

3 教科において各学年で生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能



4 本教科における3年間の研究の流れ



## 5 本年度の研究の実際

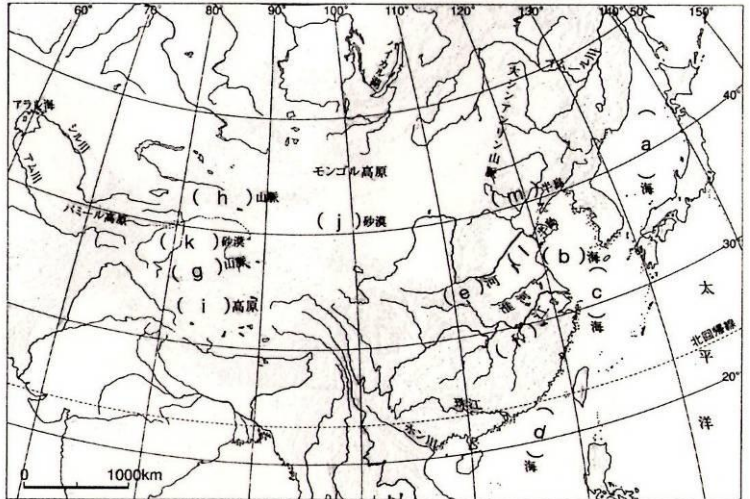
昨年度から、科目横断的な内容として、「地図の見方」を地歴公民科全体で重点的に指導することとした。生徒一人一人が、世界地図や各地の地図から知識を習得していく中で、「自分たちが生きる空間」への認識が深まり、より深い授業内容の理解につながるのと観点からである。特に今年度は、科目間で同様の地図を用いることで、より深い地図の見方を生徒が身に付けることにつながると考え、考査を利用して、共通の地図を使った問題を出題するなどの工夫を行った。

## 6 具体例

右の東アジアに関する地図について次の3つの観点から各科目で出題した。

- ・ 世界史Aでは地名や国名について
- ・ 日本史Aでは現在の日本と東アジア各国の領土問題について
- ・ 地理Aでは北緯40度以北の都市について

生徒が最もよく目にすると思われる日本列島近辺の出題については、高い正答率であったが、日本列島から離れるにつれて、やはり正答率が下がる傾向にあった。生徒個々が自分と世界を結び付けて考えていく上で、地域から日本、日本から東アジア、そして世界へと広げ学習していく必要がある。通常の授業や課題、考査などで繰り返し、同様の地図を用いていくことで、生徒の知識定着が図られると考える。地歴公民科の科目を生徒が結びつけて学習するきっかけを作るためにも、このような科目間の連携を今後も続けていきたい。



## 7 3年間の研究の成果と課題

成果としては、地歴公民科全体として「科目間の連携」を掲げたことが挙げられる。地歴公民科では、科目間で相互に共通・関連する内容が多数あるが、それを授業で取り上げる際には各科目担当者の裁量による部分が大きく、連携して取り組むことは難しかった。今回、「科目間の連携」をテーマとして掲げたことにより、教材研究や考査問題作成において、協力して取り組めたことは前進であった。また、各科目担当者が生徒の持つ課題を共有したり、指導方法について話し合ったりするなど、今回のテーマ設定で、授業改善の基盤が形成されつつある。

一方で課題としては、具体的な取組が「地図使用の重視」という段階に留まっており、そこから生徒個々の知識・技能を高めていく取組をいかに充実させるか、日本周辺だけでなく他の地域についても同様の取組をすべきではないかなど、まだ取り組まなければならない部分も多い。本年度以降も、「科目間の連携」を高めることで、本校の生徒の学力向上についての取組を継続していくことが重要である。

# 数 学 科

## 1 3年間の研究テーマ

『学び直し』と『テーマ別問題解決学習』を活かした授業実践に関する研究

～小・中学校の内容から大学入試までを見通して～

## 2 研究テーマ設定の理由

本校の生徒の数学学習における現状として、以下の2点が挙げられる。

- ① 高校数学を学習する上で必要とされる基礎学力が定着していない。
- ② 基礎的・基本的な知識・技能を活用する問題に苦手意識を持っている。

まず、①のような生徒については、小・中学校での算数科・数学科の学習内容に十分理解できていない部分があると思われる。数学は系統性の強い学問であるので、既習事項の理解が不十分であると、新しい知識・技能もうまく習得できない。そこで、「学び直し」を意識した授業実践を試みたい。

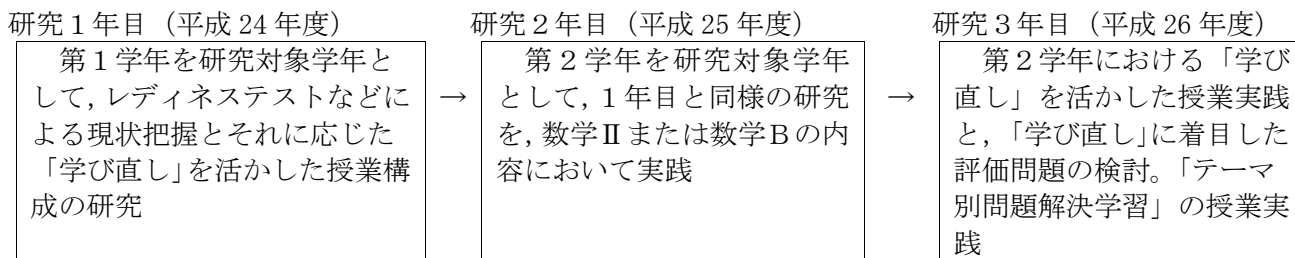
また②は数学が比較的得意である生徒でも、基礎的・基本的な知識・技能を活用して解決する応用問題を避ける傾向が顕著に見られる。約6割が国公立大学への進学を希望する状況から、学習単元の項目別問題解決だけでなく、テーマ別の問題解決学習により複数の解法を探究し、既習事項を多面的に活用する力を育てたい。

「学び直し」は、研究対象学年の中心を第1学年から第2学年前半までとする。中学校数学、さらにさかのぼって小学校算数の学習内容の学び直しも必要であるが、高校の学習内容においても行われるべきである。

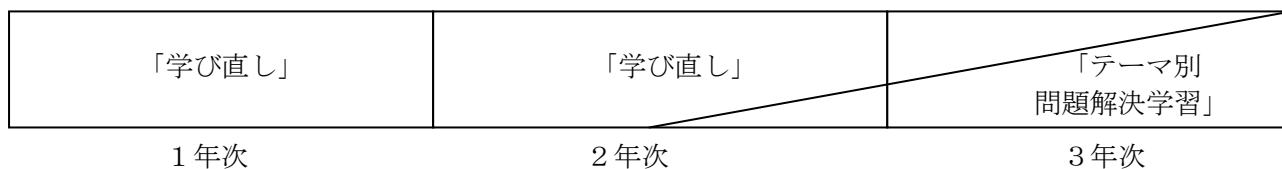
「テーマ別問題解決学習」は、ある程度の数学的知識・技能が蓄積されていることが必要になるため、研究対象学年を第2学年後半から第3学年にかけて設定する。

全体の研究テーマのサブテーマ「基礎的・基本的な知識技能の習得と活用を図る学習指導」に対して、「学び直し」が基礎的・基本的な知識・技能の習得、「テーマ別問題解決学習」が基礎的・基本的な知識・技能の活用を示す。

### 3 本教科における3年間の研究の流れ



#### ・数学学習における「学び直し」と「テーマ別問題解決学習」(イメージ図)

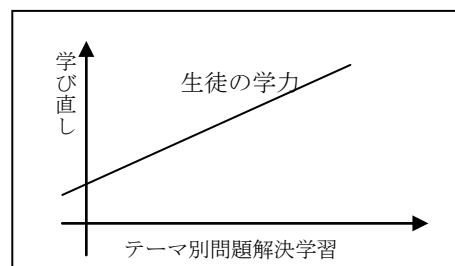


#### ・「学び直し」…

高等学校での学習を進める上で必要な基礎的・基本的事項を小学校まで戻って定着させることで、本時の学習内容を理解することがスムーズになることを目的とする学習活動。

#### ・「テーマ別問題解決学習」…

あるテーマ(「最大・最小」, 「方程式の実数解の個数」など)の問題について、様々なアプローチによる解法を模索することで、1つの課題に対する多様な見方や単元にとらわれない柔軟な思考力を培うことを目的とした学習活動。



#### ・教科において各学年で生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化および教科での共有

個々の生徒の進路目標を達成できる学力へ

↑↑↑

3 学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 微分において、極限に関する基本的な考え方を理解し、問題解決に活用できる。様々な関数の導関数を求め、関数の増減を調べて問題解決に活用できる。</li> <li>○ 積分において、不定積分、定積分や置換積分法、部分積分法など様々な計算法に習熟し、問題解決に活用できる。</li> <li>○ 複素数平面において、極形式による表現やド・モアブルの定理を問題解決に活用できる。また、図形問題にも活用できる。</li> <li>○ 式と曲線において、二次曲線についての基本的知識・技能を、問題解決に活用できる。</li> <li>○ 大学入試センター試験の問題について、問題の誘導を理解しこれまでの既習事項を用いて、問題解決に至ることができる。</li> <li>○ 個別大学入試において、問題のテーマに応じて、分野にとらわれない解法により問題解決に至ることができる。</li> </ul>
------	---

3 年終了時までには習得すべき事項

↑ ↑ ↑

2 学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 図形と方程式において、線分の内分点、外分点や直線、円の方程式などの知識を問題解決に活用できる。</li> <li>○ 三角関数において、弧度法や単位円などの基本的知識や、相互関係、加法定理、三角関数の合成などを問題解決に活用できる。</li> <li>○ 指数関数、対数関数において、指数法則や対数法則などを用いた計算や、グラフの描画ができ、問題解決に活用できる。</li> <li>○ 微分と積分において、微分係数、導関数の意味を理解し、接線の方程式を求めたり、関数の増減を調べる技能を、問題解決に活用できる。</li> <li>○ ベクトルの幾何的表現や、成分表示を理解し、基本的演算や内積の計算ができる。位置ベクトル、ベクトル方程式の考えを図形問題に活用できる。</li> <li>○ 数列において、等差数列、等比数列の一般項や和を求めることができる。<math>\Sigma</math>を用いた表現を理解するとともに、階差数列、一般項と和の関係、漸化式の問題解決ができる。</li> </ul>
------	---

2 年終了時までには習得すべき事項

↑ ↑ ↑

1 学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 式の展開、因数分解、根号や絶対値を含む式の計算ができる。</li> <li>○ 集合や命題についての基礎的・基本的な知識・技能を問題解決に活用できる。</li> <li>○ 係数に文字を含む 1 次不等式、2 次方程式、2 次不等式、2 次関数等の問題解決ができる。</li> <li>○ 三角比に関する基礎的・基本的な知識・技能を図形問題に活用できる。</li> <li>○ 場合の数と確率の基礎的・基本的知識・技能を問題解決に活用できる。</li> <li>○ データの分析に関する基礎的・基本的な知識・技能を問題解決に活用できる。</li> </ul>
------	--

1 年終了時までには習得すべき事項

#### 4 本年度の研究の具体策

研究 2 年目までの成果として、各単元に入る前のレディネステストにより生徒の状況を把握することで、新しい単元の学習における「発展的学び直し」や「補充的学び直し」に有効であったことが挙げられる。一方、「学び直し」を活かした授業実践による生徒の学習内容の定着をどのように評価すればよいかということと、身につけた学習内容を「テーマ別問題解決学習」によってさらに深化、発展させるための授業実践を行うという課題もある。本年度は研究のまとめとして、この 2 点について、「学び直し」の観点からみた評価の在り方の検討と、「テーマ別問題解決学習」による授業実践を行うこととした。

##### (1) 本校数学科における「学び直し」の共通認識

「学び直し」は…

各単元における基礎基本（必要不可欠な理解度）の段階をほとんどの生徒がクリアするためのものである。

「学び直し」を適宜行うことで…

本時の学習内容を理解することがスムーズになることを目的としている。（本校では主に「発展的学び直し」を日頃の授業実践で重視している。）

##### (2) 学び直しの観点からみた評価の在り方の検討

- ① 方法：1 つの問題において、A, B, C を以下のように定め、生徒の達成度をみる。
  - A…B を活かして課題解決出来る → 1 番よいもの（上位の達成度）
  - B…現在の学習内容の基礎・基本が定着 → 一般的な達成度（A, C 以外のもの）
  - C…既習内容が未定着（「学び直し」） → 必要不可欠な達成度に届かない
- ② 実践：定期考査の問題で、生徒の達成度をみるのに適した問題を抽出し、分析する。
  - ・ 対象考査（単 元）…2 学期中間考査（微分・積分）



- 対象生徒（クラス数）…2年普通科理系コース（3クラス）
- 問題の抽出においては「単元の学習内容が豊富に盛り込まれており、生徒の達成度のA～C段階が判断できる問題」を事前に協議し、以下の2問を選択した。

<問題1>

点(2, 5)から曲線 $y = x^2 - 6x + 12$ へ引いた接線の方程式を求めよ。

<問題2>

方程式 $x^3 - 3x^2 + 1 = 0$ の異なる実数解の個数を求めよ。

(3) 評価問題の分析結果およびその成果と課題

① 分析結果

<問題1>

	人数	割合
A	38	34%
B	16	14%
C	58	52%
合計	112	

<問題2>

	人数	割合
A	34	34%
B	41	37%
C	33	29%
合計	112	

- 問題1は受験者の52%がC段階であった。誤答例を分析するとほとんどにおいて接点を文字定数を用いて表すことが出来ないことが原因であった。

② 手立て

特にC段階の割合が高かった問題1に対して、再度復習し、事後テストを行った。定期考査と事後テストの結果を比較したものが下表である。

<問題1>

	人数	割合
A	38	34%
B	16	14%
C	56	52%
合計	112	

<事後テスト>

	人数	割合
A	61	54%
B	20	18%
C	25	22%
合計	106	

- C段階が52%から22%と30%減少し、A段階が34%から54%と20%増加したことから、多くの生徒が復習後の事後テストで、C段階からB段階またはA段階へと達成度を上昇させることができた。
- B段階が4%増加にとどまったのに比べ、A段階は20%増加であり、「接点をうまくおけない」というつまづきを克服することで、大幅に達成度は増加した。

③ 成果と課題

- 評価問題の分析により、生徒の基礎・基本の定着状況を客観的に把握することができ、事後の手立てに有効に活用することができた。
- 評価問題は、その単元の内容が豊富に盛り込まれた応用問題であったが、事後テストの結果から、各段階での達成度の向上が見られたことから、事後の手立て（補充的学び直し）は、全ての達成度の生徒に有効であった。
- 今後は他の単元についても同様に評価問題の選択と評価規準の設定を共有していくことで、本校数学科として目指す達成度をより明確化していきたい。

(4) テーマ別学習の授業実践

① テーマ 方程式の実数解の個数を求める。

問1 文字定数を含む2次方程式の実数解の個数を求める問題

解法① グラフとx軸の共有点の個数に着目する解法

解法② 定数分離して曲線と直線 $y=a$ の共有点の個数に着目する解法

② 活動例 1つの課題に対して得られた複数の解答を吟味し、各解法について意見を出し合う。

## 5 本研究のまとめと今後の課題

- 新しい単元において「発展的学び直し」を活かした授業を日頃から取り入れたり、「補充的学び直し」の観点から、日々課題等を作成したりすることで、生徒の基礎・基本を高めようという教師の授業実践における共通認識ができた。
- レディネステストを単元の初めに行うことにより、生徒がどこでつまづくかを事前に把握することができ、必要に応じて「補充的学び直し」に適宜取り入れながら授業実践を行うことができた。
- これまでは考查を生徒が復習するよう促すことはあっても、教師が評価問題を「学び直し」の観点から分析することはなかったが、分析することによって生徒の達成度を測るだけでなく、つまづきも発見することができ、再度「補充的学び直し」を行うなど有効な手立てをうつことができた。
- 考查後の分析により本校の生徒のつまづきやすい内容などをデータとして蓄積し、情報を教師間で共有して連携した教科指導を構築していく必要がある。

# 理 科

## 1 3年間の研究テーマ

学力を向上させる効果的な指導法の研究～中学校での既習事項との関連を重視して～

## 2 研究テーマ設定の理由

学習指導要領の改訂においては、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る観点から、小・中・高等学校を通じた理科の学習内容の構造化を図るとともに、中学校との接続に配慮し、高等学校理科の各科目の構成及び内容の改善・充実を図ることが示されている。

しかし、生徒からの質問や、授業中の発問に対する回答から判断すると、生徒は、単元間の関連や中学校での既習事項とのつながりがイメージできておらず、すべてが「点」として暗記されており、学習内容の確実な定着に至っていない。

そこで、中学校での既習事項と高等学校での学習内容との関連性を明らかにし、授業において中学校での既習事項を効果的に活用した学習指導を行えば、学習内容のつながりを理解することができ、基礎的・基本的な知識・技能が定着し、学力を向上させると考え、本研究テーマを設定した。

## 3 本教科における3年間の研究の流れ

研究1年目（平成24年度）

- (1) 生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化
- (2) 中学校での既習事項と、高等学校で習得すべき基礎的・基本的な知識・技能との関連付け

→

研究2年目（平成25年度）

- (1) 生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化、吟味
- (2) 中学校での既習事項との関連付けに重点を置いた、高等学校での基礎的・基本的な知識・技能を効果的に習得させる指導法の研究
- (3) 生徒の実態に合わせた授業改善

→

研究3年目（平成26年度）

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得をより確実にするための指導法の研究
- (2) 3年間のまとめ

## 4 本年度の研究の具体策

個々の生徒の進路目標を達成できる学力

↑↑↑

第3学年	生徒自ら、学習内容と既習事項との関連性を考える。 学習内容の系統的なつながりを理解し、広い視点で知識・技能を習得する。
------	--

↑↑↑

第2学年	中学校での既習事項と、高等学校での学習内容の関連性に気付く。 生徒自ら、学習内容と既習事項との関連性を考える。
------	--

↑↑↑

第1学年	中学校での既習事項と、高等学校での学習内容の関連性に気付く。
------	--------------------------------

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得をより確実にするための指導法の研究  
各科目において、前年度までの研究を基に改良を加え、授業の組み立てから発問の内容や仕方など、日

頃から随所に取り入れることができる指導法に重点をおき、検討を行った。

(2) 3年間のまとめ

① 生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能

(例) 化学基礎 (一部抜粋)

編	学習項目 (単元)	習得すべき基礎的・基本的な知識・技能	中学校での既習事項
第1編	第1章 物質の構成	1, 2 単体, 化合物及び混合物についての理解	1 水溶液の性質
	1 混合物と純物質	3 粒子の熱運動と温度及び物質の三態変化についての理解	1 物質のなり立ち
	2 物質とその成分		3 物質の姿と状態変化
	3 物質の三対と熱運動		

② 各科目の研究成果

物理基礎	<ul style="list-style-type: none"> <li>「第1編 第3章 仕事と力学的エネルギー」の導入において、中学校で学習した内容に関する小テストを予告せずに行い、定量的な問題などの正答率を各年度において比較、分析し、指導に生かした。</li> <li>既習事項の「点」における記憶はまずまずの結果だが、学習した事実から得られた科学的な根拠を基に考察する力が不足しているため、日常に見られる物理現象について科学的に考察する活動を、日々の授業の中に積極的に取り入れた。</li> </ul>
化学基礎	<ul style="list-style-type: none"> <li>「第1編 3章 1 イオン」の導入において、中学校の教科書に掲載されている図を用いて説明した。原子の大きさのイメージを捉えやすくするためにオリジナルの図も併せて使用し、視覚的に概念を捉えられるよう工夫した。</li> <li>「第2編 2章 酸と塩基」, 「3章 酸化還元反応」の学習前に、中学校で学習した内容について小テストを実施し、理解度を見た。その結果、文章の穴埋めよりも、箇条書きの問一答形式の方が正答率が高かった。このことから、中学校での既習事項を問一答や図単独で暗記していることが推測される。そこで、科学的な理論に基づいた知識を想起させるには、中学校で学習したキーワードについて正確に問う必要があると考え、発問の仕方を改善した。</li> </ul>
生物基礎	<ul style="list-style-type: none"> <li>「2編 遺伝子とそのはたらき」では細胞分裂について、「3編 生物の体内環境の維持」では体液の循環について、「4編 生物の多様性と生態系」では食物連鎖について、それぞれ、導入において中学校で学習した内容に関する小テストを実施し、その結果から定着度を分析して指導に生かした。</li> <li>「1編 生物の特徴」では、細胞や酵素の導入において、中学校での既習内容に関する問いに答えさせることにより振り返りを行った。この様な取組を多くの場面で実施することにより、高等学校での学習に対する印象を、「難解で暗記する事が多い」から、「中学校で勉強したものをさらに深く学習する」へと変化させることができれば、高等学校における学習に対して意欲をもたせることが期待できる。</li> </ul>
地学基礎	<ul style="list-style-type: none"> <li>「第一部 第二章 第三節 火山活動と火成岩の形成」の導入において、中学校で学習した内容に関する小テストを実施し、火山の形や岩石の組織などについて振り返りを行った後、高等学校での学習内容を確認した。岩石の名前については、中学校で学習した内容を覚えている者は多かったが、高等学校での内容と関連させて定着させるために、火成岩の特徴をまとめた図を繰り返しかかせて復習を行った。</li> <li>「第三部 第一章 第二節 水と気象」の導入において、中学校で学習した飽和水蒸気量と湿度や露点などについて確認を行った後、高等学校の学習内容である飽和水蒸気圧の学習を行った。しかし、学習後にテストを行った結果、正答率は6割程度であった。そこで、高等学校で学習する内容については、授業中の演習を可能な限り多く行い、定着を図りたい。</li> <li>「第四部 第一章 第三節 太陽」の導入では、中学校で学習した内容について、中学校の教科書の図を示して発問し、それに答えさせることで振り返りを行った。その結果、ほとんどの生徒は、コロナやプロミネンス等の名称を答えることができ、中学校での学習内容を想起しながら、興味・関心をもって高等学校での学習に取り組み始めることができた。</li> </ul>

5 今後の課題

理科は、多くの自然現象を幅広く様々な角度から学習するので、生徒は、学習した内容の一つ一つに関連性のないものと捉える傾向がある。中学校で学習した内容についても「点」で捉えているため、一つ一つの事象・現象や言葉の関連性を見いだすことは難しい。

中学校での既習事項を想起させ、関連付けながら高等学校での学習に生かしていくためには、確実に思い出すべきポイントを正確に提示しなければならない。しかし、関連性を重視し指導内容を工夫していくと、高等学校での学習内容を習得させるまでに、莫大な時間と労力がかかる。そこで、高等学校での学習内容を

習得させるために、特に中学校での知識が必要となる単元についてのみ、中学校での既習事項との関連性を考慮した指導法の改善に取り組んだ。

また、生徒に関連性を理解させるには、教師が一方向的に図を示したり、既習事項の小テストを実施したりするだけではなく、生徒自身の活動によって見出させることが大変重要である。実験器具を操作したり、自分の言葉で表現したりすることによって、既習事項をより正確に思い出し、関連性に気付きやすくなると考える。

このように、既習事項と新しい学習内容の関連付けを、様々な手法で日々の授業に取り入れることで、生徒は、学習内容のつながりを捉えて広い視点から理解を深め、基礎的・基本的な知識・技能を身に付けることができ、学力を向上させることができると考える。今後も、関連性を考慮することでより効果的に学習できる単元については、時間を設定して既習事項を想起させたり関連性を考えさせたりするなどの授業改善を図り、生徒が学習内容を「点」ではなく「つながり」で理解できるような指導法を工夫していきたい。

## 音 楽 科

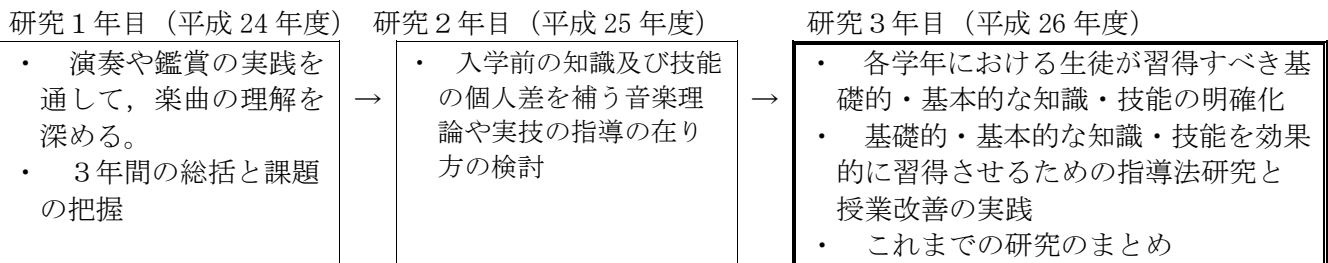
### 1 3年間の研究テーマ

表現及び鑑賞の実践を通して学ぶ、音楽理論やソルフェージュ指導の在り方

### 2 今年度の主な取り組み

本校の音楽科の教育基本方針として、専門的な学習と芸術的体験を通して創造的な芸術活動に必要な知識や専門的技術を習得させるとともに、鑑賞の能力を高め豊かな感性を培い、芸術文化の発展に寄与する態度を育てることがあげられる。また、生徒一人ひとりの適性や希望に応じた進路実現のためには、基礎的学力の習得とその応用による音楽表現を確立していく必要がある。3年間の授業においてどのような学力を習得したかを確認し、そこから自己表現の手段である「音楽」を表現するために必要な学習事項を明確にするるとともに、豊かな芸術的感性の涵養に努めていこうと考える。

### 3 本教科における3年間の研究の流れ



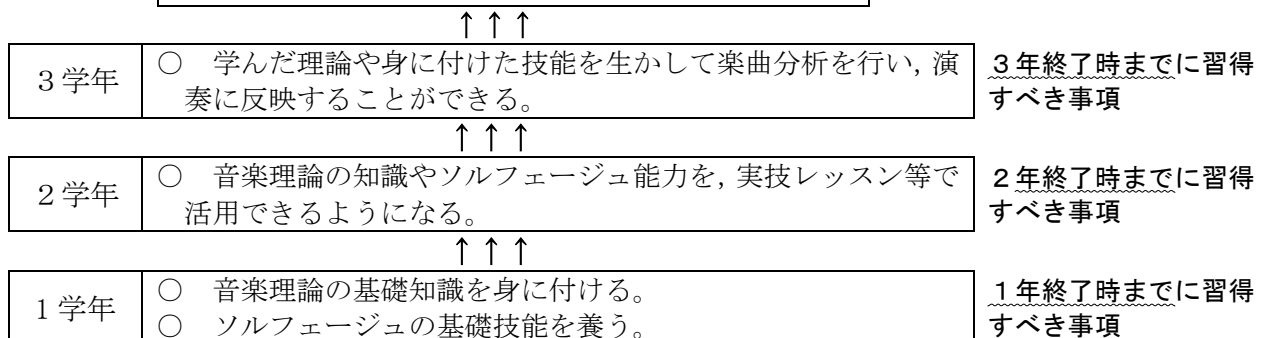
### 4 本年度の研究の実際

#### (1) 本年度の教科研究の概要

- ・ 各学年における生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化
- ・ 基礎的・基本的な知識・技能を効果的に習得させるための指導法研究と授業改善の実践
- ・ これまでの研究のまとめ

#### (2) 教科において各学年で生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化

個々の生徒の進路目標を達成できる学力へ



(3) これまでの研究のまとめと評価

3年間の研究を通して、音楽の基礎的な知識の習得、実践的な学習の指導に努めてきた。入学当初、音楽理論の知識もまだあまり持っていない生徒も見られたが、授業での系統的な学習により、めざましい発展を遂げた生徒がほとんどであった。学習領域が広がれば広がるほど、より幅広く深い表現を目指して、生徒は理論の観点からも音楽へアプローチするようになってきた。音楽理論やソルフェージュの3年間を通して行う学習は確実な知識となり、生徒の学習の大きな礎となると考える。

以下は、現在の音楽科3年生が、平成24年～26年の3年間の音楽理論とソルフェージュの学習を通して感じたことをまとめたものである。

① 音楽理論やソルフェージュを高校入学以前に個人で習っていましたか。(35名中)

はい (16名)                      いいえ (19名)

② 音楽理論やソルフェージュについて今の学習の段階を100%の割合とした場合、入学時は何%に感じますか。

－100% (1名)	30% (7名)
0% (1名)	35% (2名)
5% (1名)	40% (7名)
10% (7名)	50% (1名)
15% (1名)	55% (1名)
20% (6名)	

③ 音楽理論やソルフェージュの授業を通してどのようなことを学びましたか。

- ・ 音楽の知識がとて増えた。また、入学時は苦手としていた聴音は、今では特に伸びて、得意になった。
- ・ このような音楽に関する理論がたくさん身に付いたこと以外にも、精神面でも成長し、自分に厳しくなった。
- ・ 音楽の深さを今までより感じるできるようになりました。
- ・ 演奏する時の表現力やひとつひとつの音色に気を付けながら前より演奏できるようになりました。
- ・ 初見視奏、楽譜を読むことのスピードが圧倒的に早くなった。
- ・ 基礎を学ぶことの大切さ、毎授業の積み重ねの大切さを実感しました。
- ・ 音楽理論やソルフェージュの基本的な事を学ぶことでコードの進行から曲の雰囲気をつかむスキルや曲の流れを予想する力を身に付けた。
- ・ 聴音や楽典などで「耳」をきたえたため、楽典も理論だけの漠然としたものではなく普段演奏している音楽を裏付ける知識として身につけることができた。
- ・ 音楽理論の授業では今まで知らなかった音程や調判定、移調などを学び自分の演奏する曲を分析する時に発見があって良かったと思う。
- ・ ソルフェージュ、音楽理論、音楽史が別々の分野ではなく、ひとつのつながりとして関連していると思うようになった。全て演奏に生かせるということが身をもって体験できるようになった。



## 5 今後の課題

3年間を通して学習した内容をいかに生徒が自己の知識として習得できるかということが、非常に重要である。音楽についての基本的知識の上に本校で学習した内容が生徒自身の演奏や活動にどのように生かされているかということを引き続き具体的に着目していき、今後も音楽科の活動の指針の一助としていきたい。

# 美術科

## 1 3年間の研究テーマ

生徒の個性と表現の多様化に応じた、美術活動への意欲を高める指導

## 2 3年間の主な取組

造形的な創造活動の基本となる諸要素の理解を深め、感性や造形感覚と創造的な構成能力を高めるため、各学年とも「構成」の時間を有効的に活用し、多くのジャンルの専攻を体験する機会とする。特に1年次には上級学年での専攻科目の選択への手がかりになっている。

1年次は、風景画合宿での野外活動や陶芸窯元の見学など、学校行事やカリキュラムを工夫して美術、工芸・デザインの概要を学ばせる。特定の科目を専門的に履修させることや、同一科目を2以上の年次にわたって履修させる。複数の科目を関連づけて取り扱うことなど、履修の仕方を工夫することによって、生徒の特性の伸長が図れるようにしている。

2年次は、文化財や美術作品、作家などについての鑑賞研究を通じて美術に対する理解を深め、美術や美術文化を尊重する態度を養い批評する能力を育て、表現活動だけでなく鑑賞体験を深めている。ヨーロッパ研修旅行では、研究レポート（「アーティスト・レポート」や「トラベル・レポート」）を主軸に鑑賞研究の醍醐味を味わせている。

3年次は、これまでの選択科目や素描の作品などを中心に、ポートフォリオや作品集にまとめて自己の個性や特徴を認識させている。研修旅行レポートや文化祭でのインスタレーション、装飾作品や行事プログラムの表紙、ポスター原画なども含めて、3年間の美術活動を省みるとともに、個性や能力を客観的に示すための材料を整理させる。それぞれの作品や実績を具体的な形に残すことによって、主体的、計画的に美術活動に取り組む態度が養われ、多様化した美術活動への意欲を高める。

## 3 本教科における3年間の研究の流れ

研究1年目（平成24年度）

新学習指導要領に対応し、教育課程や選択専門科目などを見直す。今日のニーズに合った指導計画を整備する。

→

研究2年目（平成25年度）

生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識や技能を明確にし、指導上の問題点や課題等を洗い出す。

→

研究3年目（平成26年度）

課題等に基づき、具体的な改善策を取り入れた指導計画を整備する。

## 4 本年度までの研究の実際

美術科において各学年で生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化および科内での共有

生徒が個性を發揮し、自発的に美術活動に取り組んでいるか。

↑↑↑

3学年	○ 主体的に表現や鑑賞の美術活動に取り組む態度 ○ 個性を生かした美術経験や制作活動についての蓄積と整理 ○ ポートフォリオや個別の作品集などの編集
-----	--

↑↑↑

2学年	○ 研修旅行の事前学習と体験学習への取組 ○ 美術史や鑑賞研究などについての関心や知識 ○ 鑑賞ガイドや研究レポート等の作成
-----	--

↑↑↑

1学年	○ 計画的な制作活動や素描への取組の習慣 ○ 「構成」を基本にした専門科目の経験と情報収集 ○ 専門科目についての基本的な知識と適切な選択
-----	---

## 5 本年度の研究の具体策

### (1) 本年度の教科研究の目標

美術活動への高い意欲を持ち、進路目標を達成できる学力をつける。

### (2) 各学年における、進路実現に向けての目標

3 学年	<b>進路実現</b> <input type="radio"/> より高度な制作に挑戦する。 <input type="radio"/> 進路実現に向けて、具体的計画を立てて取り組む。 <input type="radio"/> 3年間の制作のまとめと総括をする。
2 学年	<b>専攻決定</b> <input type="radio"/> 自分の目指す専攻を決め、表現の深化を図る。 <input type="radio"/> 知識、技能を深め、公募展等に挑戦する。 <input type="radio"/> 進路希望を決定する。
1 学年	<b>技能習得</b> <input type="radio"/> 基礎基本を知り、技術を磨く <input type="radio"/> 広く美術に触れ楽しみ、興味を広げる。 <input type="radio"/> 自分の目指したい専攻を見つける。

### (3) 各学年で達成すべき基礎的・基本的技能の研究

今年度美術科としては、「個々の学力向上を素描力の向上」と捉え、進路実現のための方策として

「描」において学年ごとに達成すべき基礎的・基本的技能を具体的に取り上げ研究した。

#### ア 1年次

##### (ア) 達成目標

- a 用具の使用に慣れる。
- b 正確な形態を理解する力を身につける。
- c 観察力を描写力につなげることができる。

##### (イ) 指導上の留意点・・・授業の他、放課後など課外の活動と連動した指導を行う。

- a 表現の基礎としての素描の位置づけを明確にし、それぞれが自分の課題をもって制作にあたるようにさせる。
- b 実技指導に理論的な裏付けを心がけさせる。

#### イ 2年次

##### (ア) 達成目標

- a 作品の制作に集中して取り組み、完成させることができる。
- b 自分なりに課題をもって、研究しながら取り組むことができる。
- c 観察や表現の理論を裏付けした形で表現できる。

##### (イ) 指導上の留意点・・・授業の他、放課後など課外の活動と連動した指導を行う。

- a 表現の基礎としての素描の位置づけを明確にさせ、それぞれが自分の課題をもって制作にあたるようにさせる。
- b 完成したイメージに沿って制作できるよう指導する。
- c 実技指導に理論的な裏付けを心がけさせる。

#### ウ 3年次

##### (ア) 達成目標

- a 作品の制作を計画的に、集中して取り組むことができる。
- b 自分なりに課題をもって、研究しながら取り組むことができる。
- c 観察や表現の理論を裏付けした形で表現ができる。

##### (イ) 指導上の留意点・・・授業の他、朝、昼休み、放課後などあらゆる機会を通して指導を行う。

- a 美術表現の基礎としての素描の重要性を認識させ、確かな表現力の定着を図らせる。
- b 各自に課題意識をもたせ、問題解決の具体的な目標を明確化しながら制作を進めさせる。
- c 表現としての素描の作品の創造を目指させる。
- d 各人の進路希望に応じた指導の充実を図る。

## 6 本年度の反省

### (1) アンケート結果より

素描が好きな生徒（1年80%、2年70%、3年82%）、素描が得意な生徒（1年40%、2年44%、3

年 64%・・10月現在)であった。学年が上がるにつれ、苦手意識を克服していることがわかる。

(2) 反省と今後の課題

美術科教育課程では1年次4科目、2年次12科目、3年次10科目の合計27単位の授業を行っている。また、3人の常勤教諭と12人の非常勤講師で指導を行っているが、基礎的・基本的事項については毎年、指導上の問題点や課題の洗い出しや、見直しをしながら取り組んできている。今年度は、「素描」を重点項目にあげて取り組み、各学年に応じた指導を行ってきた。今後とも進路実現を目指し、基礎基本をしっかりと身につけさせていきたい。

英語科

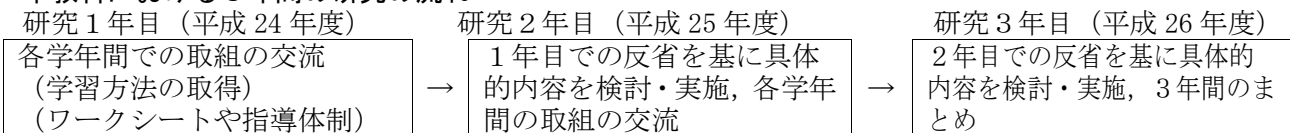
1 3年間の研究テーマ

生徒の実態にあった指導法の研究～読解力と論理的思考力を持った生徒を育てるために～

2 研究テーマ設定の理由

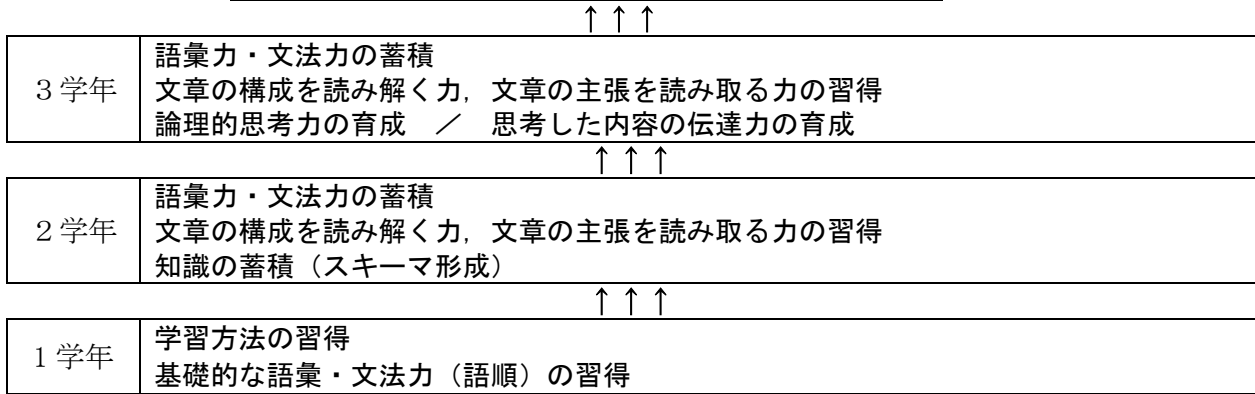
センター試験においても、個別試験においても、本校生徒の第一の課題は語彙力不足である。また、ある程度英文を読めたとしても、その英文の構成や主張を読み取ったり、読みを深めたりすることや、自分の考えを英語で論理的に述べることに課題がある。よって、まずは語彙力をつけさせること、英作文に必要な英語の語順を身につけさせること、そして長文読解力、論理的思考力を育成することをテーマに掲げ、研究することにした。

3 本教科における3年間の研究の流れ



4 本年度の研究の具体策

個々の生徒の進路目標を達成できる学力へ



5 本年度の取り組み

(1) 各学年の取り組み

※習得項目の1…「学習方法」／2…「語彙力」／3…「文法力 (語順)」  
4…「構成・主張を読み取る力」／5…「知識の蓄積 (スキーマ形成)」／6…「論理的思考力」／7…「伝達力」

学年	取組の概要	習得項目						
		1	2	3	4	5	6	7
1	既習事項に関連して30語～50語程度で意見を書かせる (授業で取り組みその後定期考査に出題)						論	伝
	考査後に復習考査を実施し、7割未満不合格者は放課後追試 (文法・単語関連はすべて出題、実力長文は単語の意味を出題)		語	文				
	コミュI授業の工夫・授業プリント・予習ノートの活用 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">1-1</span> ①英語で授業を行い、文章の内容を読み解くような発問の工夫 ②本文を読み、自分の意見を述べるタスクの導入	学		文	読		論	伝



	③新出文法事項は、作文でできるような評価問題や小テストを作成 ④自宅では予習ノートで予習・復習								
	基本文例600は朝補習で音読活動実施（解説も作成した） <b>1-2</b>	学		文					伝
	単語学習本MEWを活用し、日常単語を学習する <b>1-3</b>	学	語				知		伝
	スキットを全員作成し、クラス発表後、クラス代表は校内スキット・弁論大会に出場、優勝チームは県大会出場							論	伝
	1学期は全員 show and tell を実施、他にも好きなことなどをクラスの前で発表、英表の1学期の評価は、4割実技点とした		語	文				論	伝
	平日は毎日スプリング帳1ページ、コミュIの時間でチェック	学	語				知		
2	単元の導入として単元の内容を視覚的に把握できるようプリントを工夫 <b>2-1</b>	方				読	知		
	パートごとの予習プリントを工夫 <b>2-2</b> 、各パートの最初に確認 ①綴りまでかける必要があるもの、意味がわかれば良いものを生徒がわかるよう、記号（▼△）付 ②「補足欄」に注意項目（「発音注意」「派生語」「熟語」等）記載、考查で出題 ③TF問題、要約問題も英語で表記（必要であれば日本語でも） ④内容把握問題も視覚的に認識しやすいよう工夫 ⑤レッスンに関連する内容での自由英作	方	語			読		論	伝
	単語帳を購入し、毎時間音読・確認テストの実施	方	語						
	授業で音読（シャドウイングを含む）を多く取り入れ、定着を図る	方	語	文					伝
	英文の述語動詞や主語、連結詞に記号をつけることで英語の構造を視覚的に理解させる			文					
	定期考査後、同じ問題を解きなおさせる確認テストを実施		語	文					
	600選を解説し、音読活動後、小テスト実施		語	文					
関連資料や映像を見せたり、感想や意見を書かせる							知	論	伝
3	[語彙] 単語ノート（「ボキャブラリー・ビルディング ノート」）を作成させ、教科書や課題、模試で出た単語をまとめさせ小テストなどに活用	方	語						
	[文法] 文法ノート（「スクランブルノート」）を作成させている。文法書の問題文に記号（主語は下線、述語動詞は○、連結詞は□）をつけ、まとめさせる単語には番号をふったプリントを配布、生徒はプリントを貼り、問題を解き、解説をノートに写して単語の意味を調べてまとめる	方	語	文					
	[Reading] 語彙・文法指導、音読 <b>3-1</b> ①単語の指導にあたり、綴りまで書くことのできる必要があるもの、意味がわかれば良いものを生徒がわかるよう、記号（▼■●）を付ける ②スラッシュリーディングで単語力に加え文法力を鍛える	方	語	文					
	[Reading] 長文読解 ①問題を解く前に目を通し目的を持って読むよう指導する ②段落の関係を考え、文の内容や展開に注意して読むよう指導する ③文中の主張と具体例、論理的展開に着目して読むよう指導する	方				読	知	論	
	[テスト後] テストの解説プリントを作成し、生徒はそれを訂正ノートに貼り、指示に従って解説を写す	方	語	文					
	[文科コース] 毎時間 600選テストを行い基本的文法事項の定着を測る	方	語	文					
	[文科コース] 長文読解後に要約をさせる <b>3-2</b>	方	語	文	読	知	論	伝	
	[英語コース] 文の構成、構造、内容や展開に注意して読む活動に加え、要約や意見を書く活動を取り入れる <b>3-3</b>	方	語	文	読	知	論	伝	
[英語コース] 読み聞きた事柄について意見を交換し、文法・内容・構成・文の構造に気を付けて意見を書いたり、友人の書いた原稿を添削したりする <b>3-4</b>	方	語	文	読	知	論	伝		

(2) 本年度の成果と課題

【1 学年】

- (成果) ・ 予習や復習などの高校生としての学習法はどうあるべきか理解した。ペア・スキット活動などを意欲的におこなった。
- (課題) ・ 基本的な語順がまだ身につけていない生徒が多く、今後更なる指導が必要である。

【2 学年】

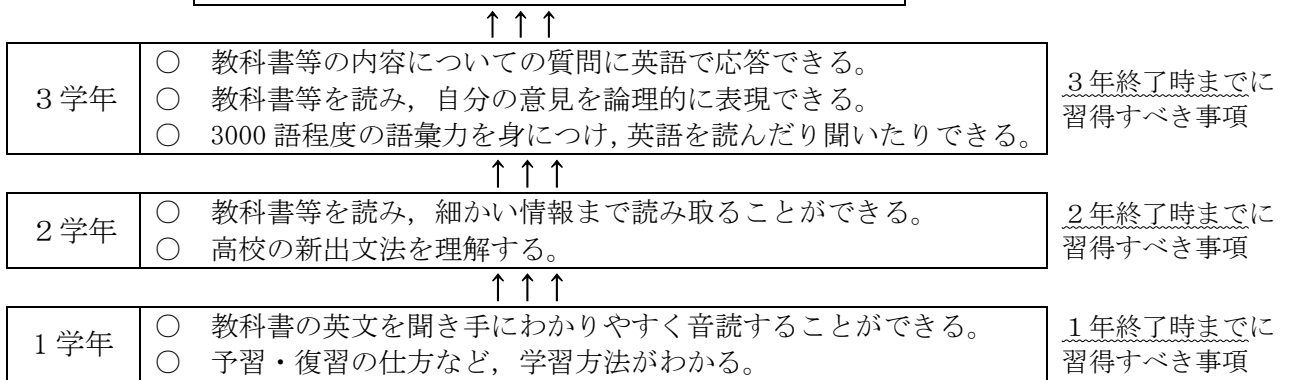
- (成果) ・ ディスコースマーカーや文の区切りを意識して、声に出して英文を読めるようになったことにより、少しずつではあるが読解力が身につけてきている。
- (課題) ・ 語彙力・文法力の定着が不十分である。演習を増やして定着を図る。表現の機会を増やす。

【3 学年】

- (成果) ・ ボキャビルノート、単語テストの成果で語彙力を身につけている。
- (課題) ・ 2 年 1 月と 3 年 7 月の対外模試を比較すると、長文読解と語彙文法で伸び悩んでいることがわかる。

6 教科| 問題演習を通して多読させ、読解力・語彙力の更なる向上を目指したい。

個々の生徒の進路目標を達成できる学力へ



(設定理由) :

- ・ 3 年間の研究の中で、各学年での指導について振り返り、教科で共有した。その中で語彙力をつけることが課題だと共通認識している。そのため語彙に関する目標を設定した。
- ・ 音読は各学年で意欲的に取り組んでいる活動の 1 つである。1 学年で音読をしっかり習慣づけるために、1 学年次に音読の項目を設けた。

7 本研究のまとめ

(成果)

- (1) ボキャビルノートを作成することによって、単語の使用頻度の状況が目に見えて理解できるようになり、語彙を整理しながら覚えるのに役に立った。
- (2) 論理的思考力の育成に関しては英作文や発表の場を増やしたことで、意識も高まり課題に取り組む姿勢が身につけてきた。
- (3) 3 年生は読解の上で重要な、構成・主張を読み取る力が身につけているようである。リーディング活動に関するアンケートによると、以下の項目において 3 年生の回答が、1 年生を上回った。

質問内容	質問項目	3 年生	1 年生
英文の概略把握	文章をしっかり読む前に、タイトル・図表・設問を確認しますか。	3.14	2.74
段落間の関係把握	段落と段落の関係に注目するようにしていますか。	2.67	2.33
段落の概略把握	段落ごとにおおまかな表題をつけるようにしていますか。	2.03	1.75
英文の概略把握	自分の持っている知識を参考に、何が書いてあるか予測をしながら読んでいますか。	3.17	3.10
主張を読み解く方略	大事な情報に (筆者の主張が読みとれる表現や文に)、しるしをつけながら読んでいますか。	2.87	2.59

※学年の数字は、「全くそう思わない」を 1 点、「とてもそう思う」を 4 点とした 4 件法の調査を行い、平均を記載したもの。

- (4) 授業改善という点では、学年間の情報共有をすることで、各学年において何を重点的に取り組まなければ

ばならないか明確にすることができた。またワークシートの作成や指導体制において指導の幅が広がった。語彙力に関してはこの3年間を通じて、各学年ボキャビルノートやスペリング帳など、継続して活用してきた。

- ※語彙力や論理的思考力の育成で取り組んだボキャビルノートや英作文についての生徒の声
- ボキャビルノートに書き、知っている単語が増えてくるとやる気がでる。
  - ボキャビルノートに書くと、模試の復習のたびに繰り返し同じ単語が使われているので覚える。
  - 自分の考えを英語で表現できるようになったけれど、もっと深く自分の気持ちを伝えたいと思えるレベルになった。
  - 英作文をすることで文章の作り方や、文法の決まりごとなどが更によくわかるようになった。
  - 1年生の頃と比べると、英作文に書ける内容が幅広く、濃くなった。

(課題)

・これまで段階を踏みながら工夫し指導してきたが、生徒の語彙力や英文の主張を読み取ったり、読みを深めたりする力はまだまだ不足している。文法力や、知識の蓄積を積み重ねていくための工夫を更に高め、生徒が論理的思考力を身につけるための指導について今後も努力したい。

家庭科

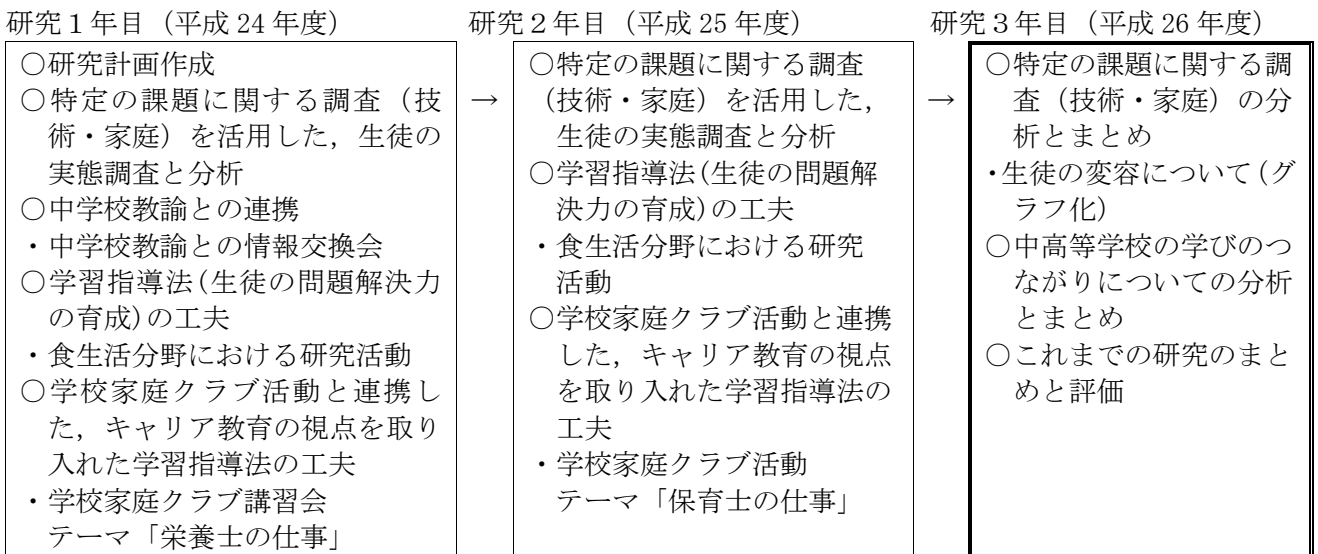
1 3年間の研究テーマ

中高等学校の学びのつながりを重視し、生徒の問題解決力の育成を中心とした学習指導法の研究 ～キャリア教育の視点を取り入れながら～

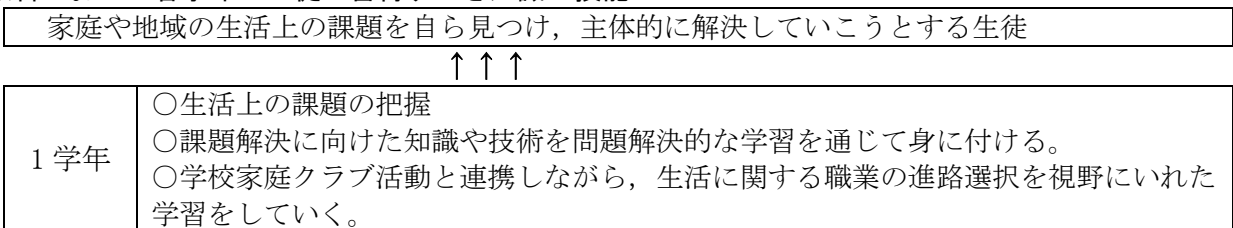
2 全体の研究概略

- ア 各教科(学科・コース)において各学年で生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能の明確化
- イ 基礎的・基本的な知識・技能の習得を確実にする繰り返し学習指導の検討
- ウ 習得した知識・技能の活用を促す学習指導の検討
- エ 教科や学年の特性を生かした学習教材やワークシートの開発
- オ 必要に応じて学習領域の関連付けや教科間の連携
- カ ア～オの各教科における検証、次年度への継続

3 本教科における3年間の研究の流れ



4 教科において各学年で生徒が習得すべき知識・技能



## 5 本年度の研究の具体策

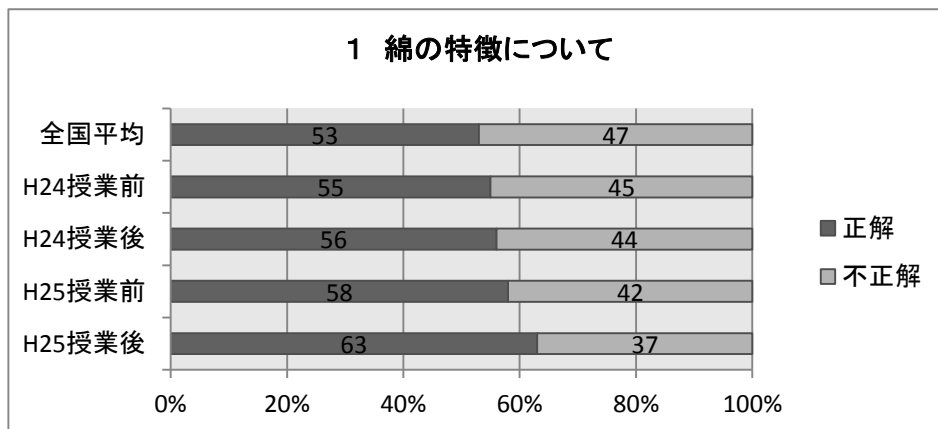
- 特定の課題に関する調査（技術・家庭）の分析とまとめ
  - ・生徒の変容について（グラフ化）
- 中高等学校の学びのつながりについての分析とまとめ
- これまでの研究のまとめと評価

## 6 本年度の研究内容

### (1) 特定の課題に関する調査（技術・家庭）の分析とまとめ

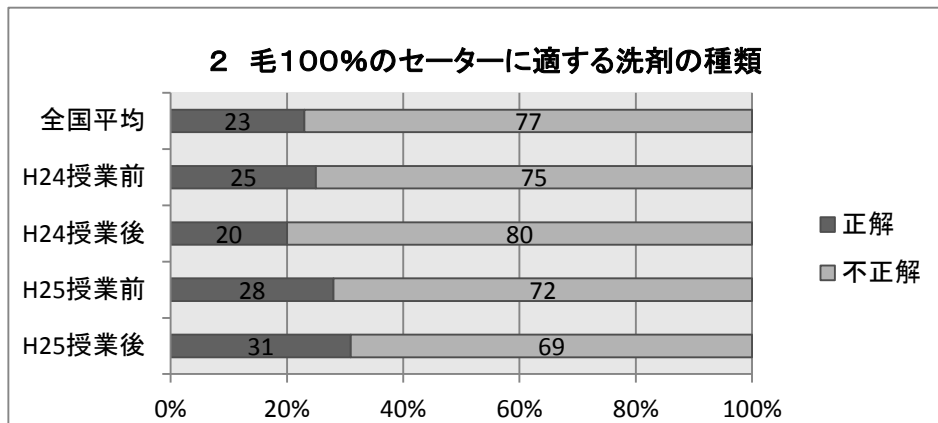
平成 24～25 年度入学生を対象に、国立教育政策研究所教育課程研究センターが実施した、特定の課題に関する調査中学校技術・家庭（特定課題調査）の家庭分野を活用し、中学校までの内容の基礎的・基本的な知識の定着を確認するためにアンケート調査を実施した。調査は、年度初めと年度終わりの 2 回実施し、生徒の変容を分析した。調査は食物分野・保育分野・被服分野・消費生活分野・住居分野について行ったが、被服分野のうち、3つのアンケート項目について、調査結果ならびに結果に対する分析と考察を示した。

〈アンケート項目と調査結果〉



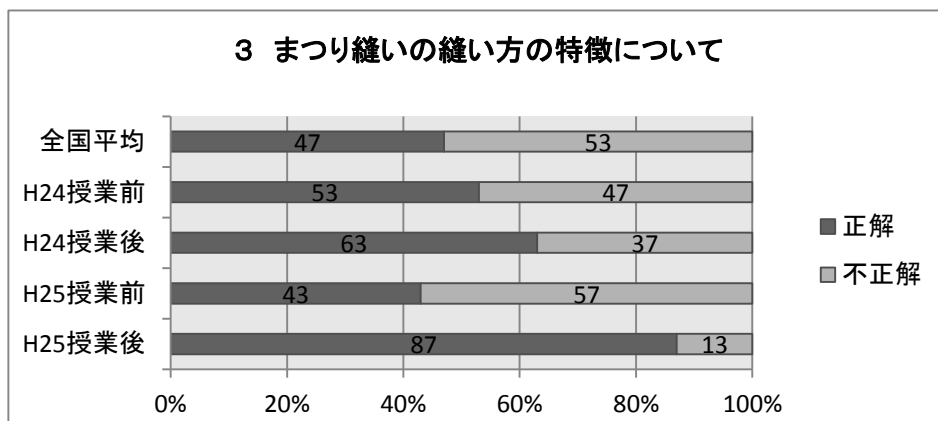
#### 【グラフ1 繊維の特徴について】

繊維の特徴について、授業後の正解率はわずかに上がったばかりであり、きちんと理解がなされていないことが分かった。繊維の特徴をきちんと理解させる指導法の工夫が必要である。



#### 【グラフ2 洗剤の種類について】

授業の中でセーター（毛）の洗濯に適する洗剤を取り扱ったにもかかわらず、授業後の正解率は低かった。毛の特徴が良く理解できていないのではないかと考える。



#### 【グラフ3 まつり縫いについて】

授業ではまつり縫いの基礎縫い練習を行った。縫い方や縫い目の特徴など体験的な学習を通じて理解できたため、授業後の正解率が上がったものと思われる。

被服分野のうち、3つのアンケート項目についての分析より、

- ・繊維の特徴が正しく理解できていない。
- ・繊維に応じた洗剤の種類が理解できていない。

- ・まつり縫いの縫い方やその特徴については、授業前は約4割の生徒しか正解できていないが、授業後は正解率が7～8割に増える。すなわち、体験することで学習内容の定着度が著しく向上する傾向がある。

ということが分かった。こうした結果を踏まえ、今年度は被服分野における学習内容の定着度の向上をめざして次のような授業内容を考えた。

### 授業計画案

(i) 題材名

一つの繊維から

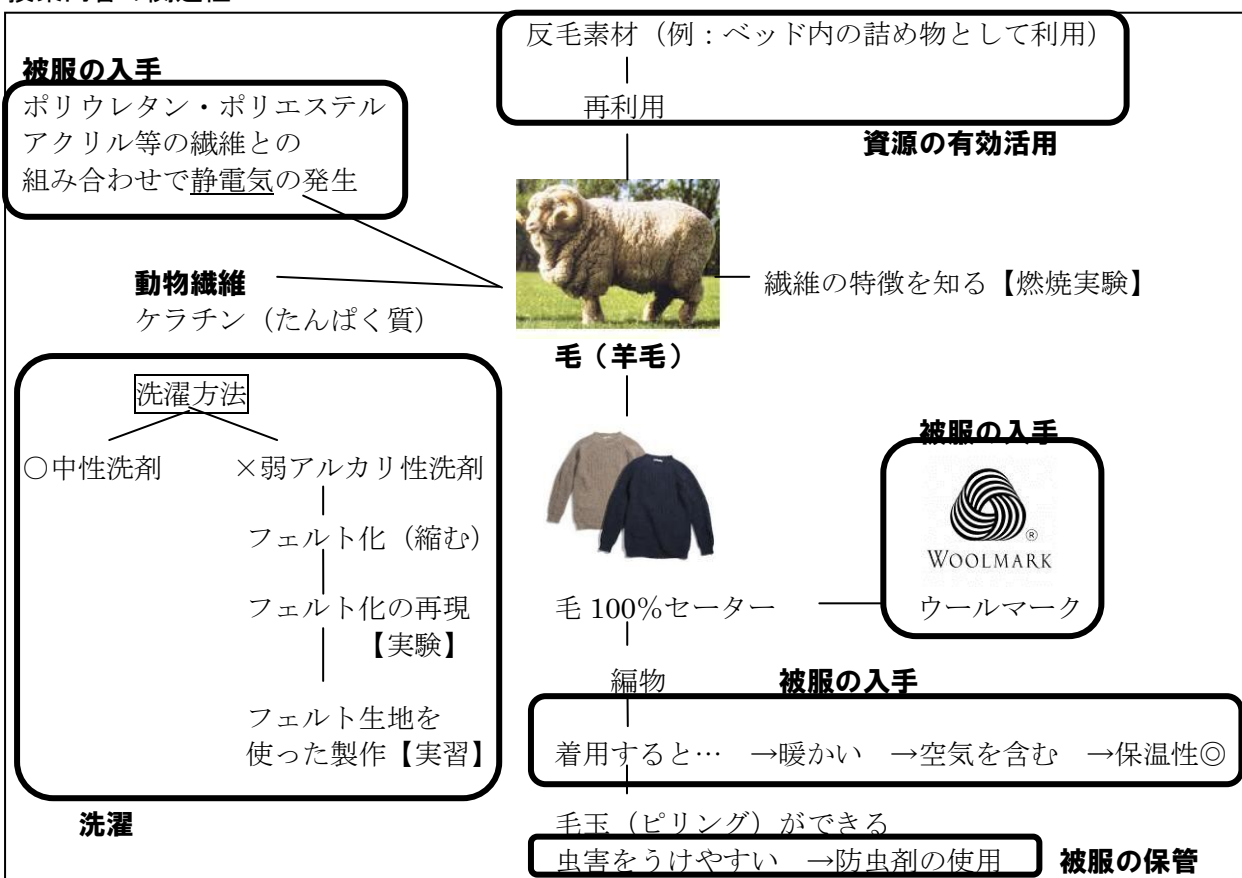
(ii) 題材の目標

中学校までの学習内容をふまえ、「毛」という一つの繊維を題材にして、被服材料の性能や洗濯や保管、取り扱いに関する知識や技術を体験的な学習を通じて習得させる。また「毛」が原料であるフェルト生地を用いた製作を行うことで、基礎縫いの技術を定着させるとともに、手入れや保管の仕方を理解させる。

(iii) 題材の指導計画 (全8時間)

内 容	時間数
「毛 (羊毛)」ってどんな繊維? 【カード合わせゲームで学ぼう】 ・繊維名のカードとその繊維の特徴に合うカードを選び、組み合わせる	1 時間
「毛」で作られている製品・衣類を調べよう ・セーターや制服のジャケットの表示を調べよう ・洗濯や手入れ、保管の方法 【実験】フェルトを作ろう ・登山に適した服装とは	2 時間
「毛」繊維で小物作り (製作) ・フェルト生地でティッシュケースを作ろう ・「毛」製品の再利用について ・基礎縫い練習	5 時間

(iv) 授業内容の関連性



(v) 「思考・判断・表現」力を高める発問の工夫

- Q1. なぜフェルトはほつれないのか? → A. 編物でも織物でもないから。(不織布)  
Q2. なぜ毛製品は綿製品と同じように洗えないのか?

→A. 毛はたんぱく質でできているから。(綿はセルロースでできている。)

Q3. 登山をする際、下着やインナーとして適しているのは「綿」「毛」どっち? →A. 「毛」素材  
理由: 綿は汗をかくと水分が蒸発する際に、体の熱をうばい、からだがかえってしまうから。

毛は保温性があり、あたたかい。※衣類は、条件が悪化した時に、生命を守る道具となる。

(vi) 題材の評価規準 ※省略

(2) 中高等学校の学びのつながりについての分析とまとめ

中学校での学びを知るために、中学校教諭と情報交換を行い、中学校で行われた研究授業や授業公開での授業を積極的に参観した。その結果、中学校の実態が分かり、高校家庭科で何を教えたらいいいのか、何を教えるべきかを理解することができた。今後も引き続き中学校での学習内容を把握することで、中高等学校の学びのつながりを意識した授業内容の研究に努めたい。

7 本研究のまとめ

中高等学校の学びのつながりを重視し、生徒の問題解決力の育成を中心とした学習指導法の研究ということで、実際に授業で実践した内容とその成果および課題を次のようにまとめた。

	実 践	成 果	課 題
食	<ul style="list-style-type: none"> <li>夏季休業中の課題として考えさせた弁当の献立を題材として、高校生の食事としてふさわしいバランスのとれた献立を立てさせる工夫を授業の中で考えさせた。(H25)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>栄養のバランスはもちろん、色合いや主食とおかずの量のバランスも大切であることを理解し、生徒自身が献立の問題点や課題を見つけ、改善する方法を考えることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>食品に含まれる栄養素やその働きを教える必要がある。</li> <li>生徒自身が学習したことを実生活の中で生かそうとする意欲付けが大切である。</li> </ul>
生	<ul style="list-style-type: none"> <li>夏季休業中の課題として、家族の誰かのための料理を考えさせた。家族の健康状態や生活習慣等を把握し、そこから問題点を見だし、解決できるような食事の献立を立てさせた。(H26)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ホームプロジェクト的な課題であり、この課題に取り組んだ生徒が、課題を見つけそれを解決するための方法を考えるという実践ができた。家族のことを考え、コミュニケーションを図る良い機会にもなったようだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が取り組みやすいように事前に課題の進め方の説明が必要である。</li> </ul>
活	<ul style="list-style-type: none"> <li>その日に食べた朝食の献立を再現し、実際に食べた献立から、食事として良い点、問題点を考えさせた。さらに栄養のバランスが良くなるように献立の追加・変更をグループで考えさせ、問題解決の過程を発表させた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>料理の実物写真を使用し、献立の組み合わせを考えたのは、大変分かりやすかったようで、積極的に問題点や課題を見つけ、改善する方法を考えていた。</li> <li>グループで活発に話し合いを行っていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>料理の品数が多すぎる場合があり、一食あたりの適切な食品摂取量を示す必要がある。</li> <li>食べたい料理や好きな料理を選んでしまう生徒もいた。</li> </ul>
住生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>高齢者の住まいの工夫や改善の必要性をサザエさん一家の成長や加齢に伴う身体の変化に合わせて考えさせた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>サザエさん一家をモデルにしたことで加齢の状態もイメージしやすく、問題点や課題の把握がしやすかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>高齢による身体の変化を高齢者疑似体験等を行い、体験的に理解させることができると、より効果的である。</li> </ul>

こうした生徒の問題解決力を育成するための実践は、今後、他の分野でも取り入れていきたい。

また、キャリア教育の視点を取り入れた学習指導法の工夫については、今後も学校家庭クラブでの活動と連携しながら行っていきたい。また、生徒が学習した内容がどのような職業に結びつくのか、授業の中で具体的に提示することで、生徒に職業の専門性に対する意識づけを行うことができるのではないかと考える。本研究を通じて、学習は小学校～中学校～高等学校へと積み重ねで成り立っていることを改めて認

識することができた。今後はこれまでの学びと新しい学びのつながりを生徒に意識させながら、基礎的・基本的な学習内容を体験的に身に付けさせることで、学習の定着がさらに図れるよう、指導法を改善・工夫していきたい。

## 情 報 科

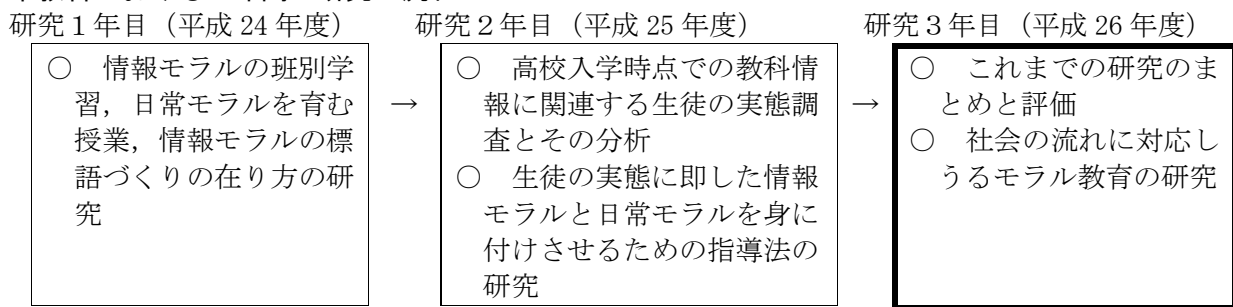
### 1 3年間の研究テーマ

情報モラルと日常モラルを身に付け、より良く生きる生徒の育成

### 2 研究テーマ設定の理由

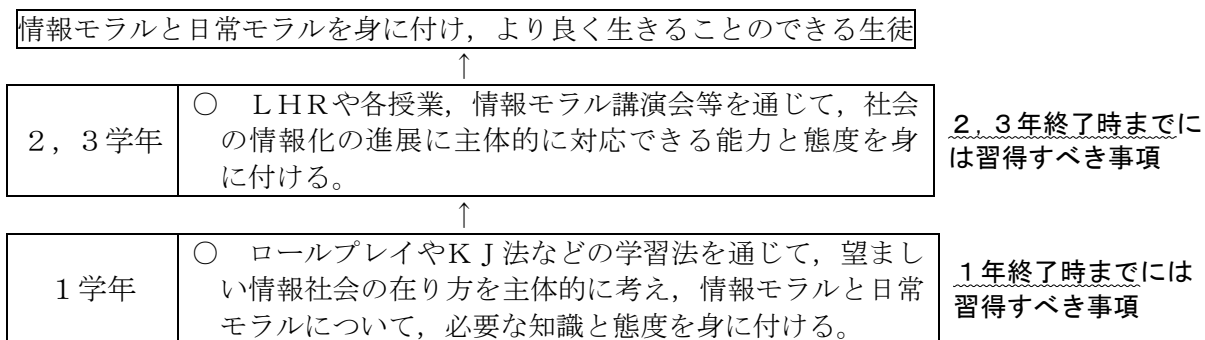
情報科では、6年前から情報モラルの班別学習などに取り組み、情報モラルを身に付けた、より良く生きる生徒の育成を図ってきた。スマートフォンやタブレット端末等の利用が常識となる中、中高生のネット依存の問題やSNSによるいじめやトラブルは学校現場においても問題となっている。大きな影響力をもつ情報機器を活用する上で、大切なマナーやルールをきちんと考えさせ、身に付けさせることがますます重要になってきている。一昨年度からは、情報モラルだけでなく日常モラルを身に付けさせることで、更により良く生きる生徒の育成が図られると考え、このテーマを設定し研究を進めている。

### 3 本教科における3年間の研究の流れ



### 4 本年度の研究の具体策

(1) 教科において各学年で生徒が習得すべき基礎的・基本的な知識・技能



(2) これまでの研究のまとめと評価

#### ア 情報モラルの標語づくり

単なる課題として扱われてしまい、学習内容の深化には及ばなかった。事前事後指導の在り方、テーマ設定、生徒会や生徒指導部との連携など多くの課題が残る。美術科の生徒の中には、ポスターを作成した者もあり、それを掲示することで他の生徒への注意喚起や情報モラルの意識高揚につながっていると思われる。

#### イ 高校入学時点での情報に関する生徒の実態調査とその分析

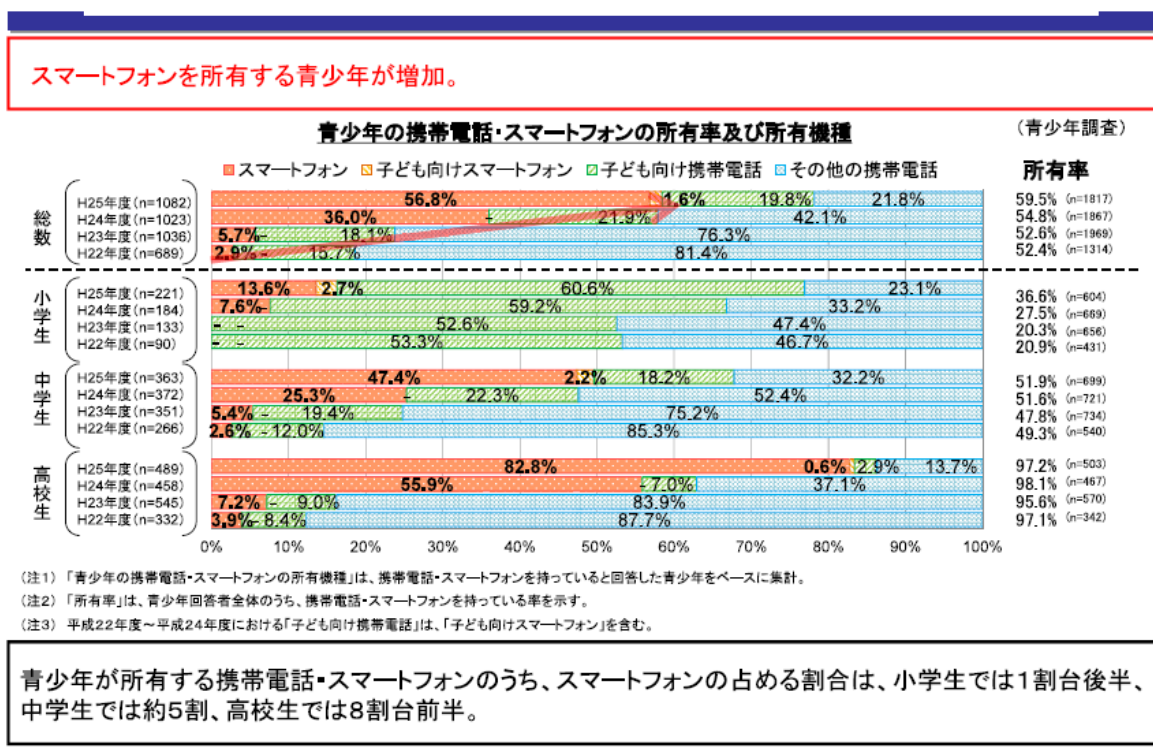


昨年度実施した実態調査において、多くの生徒は一定以上のスキルをもち合わせているように思われるが、技術や知識に個人差がある。新学習指導要領でも発達の段階に応じて小学校から情報教育、情報モラルについては総則で次のように記載されている。小学校では、各教科の指導に当たって、「児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け」とともに、情報手段を「適切に活用できるようにするための学習活動を充実する」こととしている。中学校では、各教科の指導に当たって、「生徒が情報モラルを身に付け」とともに、「コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切かつ主体的、積極的に活用できるようにするための学習活動を充実する」こととしている。

しかしながら、本校においては情報モラル教育に関しては十分に理解がなされていない生徒が多い。全国的にも高校入学前から携帯端末をもつ生徒も増えており（図1）、今一度情報モラル教育に取り組むことが重要であると思われる。

（図1）

### 青少年の携帯電話・スマートフォンの所有状況



平成 25 年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 調査結果（速報） 平成 26 年 2 月内閣府

#### ウ 生徒の実態に則した情報モラルとスキルアップのための授業

- 基本操作の実習

年間を通して、定期的に文章入力等の基本操作の実習を行い、スキルアップを図る。

- 視聴覚教材・ネット教材の活用

個人情報やサイバー犯罪を扱う授業において、警視庁の「サイバー犯罪防止教室用DVD」を活用した。携帯端末を使用する上での注意喚起や情報モラル高揚につなげたい。また、今後「WEB問題作成ツール」（フリーソフト）を用い、作問や解説・ヒントを自ら作成することで、学習内容を再確認し、より定着が促されることを期待している。

- ニュース・新聞記事の活用

情報モラルに関する新聞記事を切り抜き、定期的にパソコン室に掲示し、授業等で紹介している。記事を読み込む生徒もおり、情報モラルの意識高揚につながっていると思われる。

- 生徒によるグループ学習

次の(3)でもあるように、様々な場面でグループ学習を行っている。様々な意見に触れることで、多様で多角的な





考え方ができるようになればと期待している。

### (3) 社会の流れに対応しうるモラル教育の研究

#### 授業実践1 『情報セキュリティ』

IDやパスワードに関する授業において、『LINEの暗証番号義務化』の報道内容を使用した。暗証番号義務化への経緯などを説明することで、情報管理の重要さに気付かせるようにした。身近で時期的にも旬な話題であり、自分に置き換えて考えることができた。

#### 授業実践2 『スマホが与える生活への影響』

「スマートフォンや携帯電話を利用することによる自分自身の生活への影響について考えよう」というテーマを設定し、グループ内で意見を出し合わせた。この際、付箋紙を活用し一人幾つでも意見が出せるようにした。

様々な意見を出すことによって、生徒個人が不安や疑問に感じていた問題点を共通の問題として捉え、どうしたらより良い方向に改善できるかをみんなで考えさせた。

#### 授業実践3 『ことばの使い方について考える』

これまでに言われて、うれしかったことば・悲しかったことばを、“メールなどネットを通じた場合”と“直接言われた場合”に分けて、一つずつ付箋紙に書き出させた。その後、ペアを作り、それらのことばを用いて会話をさせることで、ネット上で使用することばも直接会話をするときと同様に相手の気持ちや様子を伺いながら、思いやりをもつことが大切であることを理解させた。



## 5 今後の課題

本年は、まとめの年度であることから、これまでの研究を総合的に実践し、授業内容に合わせて具体的な授業改善を行っている。年度末までには、こうした授業実践の成果について生徒からアンケートを取ったり、学校ネットパトロール事業における問題事案等を検証することが必要である。また、2, 3年次に情報モラルに関するLHRを行い、継続したモラル教育を推進することも必要と考える。引き続き教材研究を重ね、生徒に適切なモラル観を身に付けられるよう研究を継続していきたい。

## 国語科学習指導案

科目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
国語総合	1年4組（普通科）39名 （男子18名，女子21名）	1年4組	国語総合 （桐原書店）	朝倉 真吾

### 1 単元（題材）名

書き手の主張を的確に読み取り自分の考えを深める。

教材：評論Ⅱ 『サイボーグとクローン人間』

### 2 単元（題材）の目標

ア 論理的な文章の構成や展開を確かめながら書き手の主張を的確に読み取り自分の考えを深めようとしている。（関心・意欲・態度）

イ 論理的な文章の構成や展開を確かめながら書き手の主張を的確に読み取り自分の考えを深めている。（読む能力）

ウ 文や文章の構成，語句の意味，用法及び表記の仕方などを理解し，語彙を豊かにする。（知識・理解）

### 3 単元（題材）の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
① 文章の構成や展開を確かめ，書き手の意図を的確に捉えようとしている。 ② <u>書き手の主張に対する自分の考えを，他者との意見交換を通じて深めようとしている。</u>	① 文章の構成や展開を確かめ，書き手の意図を的確に捉えている。 ② <u>書き手の主張に対する自分の考えを，他者との意見交換を通じて深めている。</u>	① <u>文や文章の組み立て，語句の意味，用法及び表記の仕方などを理解している。</u>

### 4 単元（題材）の指導計画（全7時間）

時	主な学習内容	評価規準
第1時	サイボーグ・クローン人間・ロボットに関するアンケートをとる。 本文の範読 ・全体を範読しながら， <u>語句を確認する。</u> ・意味段落（第1～4段落）に分け，大意を把握する。	知識・理解① 読む能力①
第2～6時	〈第1段落〉 ・ロボット・サイボーグ・クローン人間の製作上の違いを本文や資料を通して理解し，それぞれの研究の現状を把握する。 ・サイボーグとクローン人間に対する人々の一般的な反応を読み取る。 〈第2段落〉 ・クローン人間は決して非人間的ではないという筆者の主張とその根拠を読み取る。 ・サイボーグが人間の心のあり方にも影響を及ぼしかねないことを読み取る。 〈第3段落〉 ・サイボーグが肯定される理由とその影響について理解する。 〈第4段落〉 ・文明の変化がどのように起こるかを考える。 ・クローン人間の誕生は非人間的ではないと捉え，むしろサイボーグ造りに危惧を抱く筆者の立場に対する賛否を自分なりに理由づけて考えてみる。	関心・意欲・態度① 読む能力①
第7時	<u>グループに分かれ各自の考えを発表し，他者の考えを聞いて自分の考えを深める。</u>	読む能力② 関心・意欲・態度②

## 5 教材（単元・題材）観（単元概要）

論理的な評論を正しく読解する作業は高校国語の現代文の授業の中心的な要素である。論理をもって説明される筆者の見解を的確に把握するという評論読解の力を身につけさせたい。

本教材は、20世紀から21世紀へと二つの世紀にわたり新聞・雑誌等に発表された文章を収録した評論集『世紀を読む』（平成13年・朝日新聞社発行）に収録されたものである。本文では、嫌悪感を示す人が多い「クローン人間」の研究は存外非人間的行為ではないが、肯定的に受け入れられている「サイボーグ」造りは人間の考え方や生き方にも影響を及ぼすという主張がなされている。こうした筆者の一般的な意見を覆す主張は、生徒にとって物事を一つの固定的な立場からではなく、その他の立場から多角的に捉え直す貴重な経験であり、現代的な事象を自らの力で読み解く力を養い自分の考えを深める契機となるであろう。また本文は、筆者により丁寧な論理展開がなされており、評論教材を学習する上で主要な目標となる論理性に着目しつつ文章を読み取る方法を習得するのに適した教材であるといえる。

生徒は「国語総合」の授業において既に一度、評論文を学習している。生徒には今回の教材で以前の学習経験を生かし論理展開を意識し筆者の主張を正確に読み取るとともに、筆者の主張に対して自分の考えを深める経験を積ませたいと考える。

## 6 生徒観（生徒の実際）

実施学級は普通科で、ほぼ全員が大学や短大等、上級学校への進学希望者である。クラスとしてはノート記入、プリント学習などは概ね意欲的に取り組む。しかし、全体に発問を投げかけると特定の生徒が答えがちで、自主的に発言しようとする者は少ないなど消極的な雰囲気もあり、特に午後の授業では集中力を保ちにくい状況にある。段階的思考を要する言語活動に対しては特に苦手意識をもち、「なぜ」「どのような」という発問では教室が静まりかえる。積極的に考える姿勢は見られるが、それを助ける語彙力が充分ではないため、発言には至っていない者が多い。理由として「答えに自信がないから」「あっているか不安だから」「間違っていたら恥ずかしいから」といったことが消極的な傾向にある原因と思われる。

## 7 指導観

本題材の指導に当たっては、導入において携帯電話やコンピュータなど情報通信機器を使いこなす現代人とサイボーグの違いは、機械を身体の外部に配置するか内部に組み込むかの違いに過ぎないということを提示することにより、身近な問題であると認識させ興味・関心を喚起する。展開においては、「ロボット」・「サイボーグ」・「クローン人間」の違いについて参考資料を用いて明確に理解させた上で、論理展開を丁寧に追うことにより筆者の主張を正しく把握させる。まとめにおいては、筆者の主張に対する自分の考えをまとめさせ、グループで紹介しあう活動を通して他者の考えに触れ、更に自らの考えを深めさせる。なお、本文は倫理性の高い内容であるため、道徳的な内容に流れてしまわないように注意することが必要である。生徒には自分の考えをまとめる際に、自分の主張の根拠が感情的なものにならないように注意を喚起したい。

## 8 本時の実際

### （1） 本時の目標

筆者の主張を改めて確認した上で、前時にまとめた自分の意見をグループ内で紹介し合い、他者の意見を聞いて自分の意見を更に深める。

### （2） 本時の評価規準

- ・自分の考えを深めるために、相手の立場や考えを尊重して意見を聞き取ろうとしている。  
(関心・意欲・態度②)
- ・書き手の主張を正確に理解し、主張に対する自分の考えを他者との意見交換を通じて深めている。  
(読む能力②)

(3) 本時(第7時)の展開

過程	時間	学 習 活 動	指導上の留意点	評価方法
導入	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶</li> <li>前時の学習内容を振り返る。</li> <li>本時の学習内容と学習課題を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>前時に記入したワークシートを配布し、前時の学習内容を確認する。</li> </ul>	行動の観察
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;">           本時の学習課題            「筆者の考えに対する各自の考えを聞き、自分の考えを深める」         </div>				
展開	2	<b>【展開①】</b> ・発表の仕方、発表の聞き方を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表者は聞き取りやすい声量や目配りなど聞き手を意識して発表することを指示する。</li> </ul>	発表内容の確認 (知識・技能)
	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>4人1組のグループを作る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>聞き手は共感的な姿勢で発表を聞くよう指示する。</li> </ul>	
	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>各グループで個々の考えを順次発表する。</li> </ul>		
	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>すべてのグループの発表終了を確認して、机を元の状態に戻す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表が早く終了したグループに対しては発表を聞いて自分の考えを改めて考えておくように指示する。</li> </ul>	
	10	<b>【展開②】</b> ・それぞれの発表を聞いたうえで、 <u>自分の意見を見直し、再度ワークシートに自分の考えをまとめ直す。</u>	<ul style="list-style-type: none"> <li>筆者の考えに対して自分が賛否いずれの立場をとるのか、理由を含めて明確に記述するよう支持する。</li> </ul>	ワークシートへの記述の確認 (読む能力②)
	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>数名の生徒に発表を求める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>聞き手を意識して発表するよう指示する。</li> </ul>	発表内容の確認 (知識・技能)
	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>筆者の考えに対する賛否を、黒板にカードを貼らせて確認する。</li> </ul>		
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>この単元の1時間目にとったアンケート結果と比較し、サイボーグに関する学級全体の捉え方の変化を全員で確認する。</li> </ul>			
終末	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業内容とこの単元の総括をする。</li> <li>次時は古典の授業であることを確認する。</li> <li>挨拶</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習を通して自分の考えを深められたかを確認する。</li> <li>評論文の読み方や一つの事柄を異なった視点で捉えることの大切さについて確認する。</li> </ul>	振り返りシートへの記述の確認 (関心・意欲・態度②)

## 地歴公民科学習指導案

科目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
日本史B	2年文系（普通科）39名 （男子16名，女子23名）	2年2組	詳説日本史B	二宮勇貴

### 1 単元名

第2章 律令国家の形成 第3節 「平城京の時代」

### 2 単元の目標

我が国において国家が形成され律令体制が確立する過程，隋・唐など東アジア世界との関係，古墳文化・天平文化に着目し，古代国家の形成と展開，文化の特色とその成立の背景について考察させる。

### 3 単元（題材）の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・律令国家期の社会や文化の特色について意欲的に追究している。	・律令国家の形成・確立について， <u>当時の東アジア世界の動向と関連づけながら，多面的・多角的に考察し，表現している。</u>	・律令国家が形成される頃の <u>地図を活用し，社会や国際関係の変化を読み取っている。</u>	・律令国家期の政治の展開や文化の特色について， <u>当時の東アジア世界と関連づけて理解し，その知識を身に付けている。</u>

### 4 単元の指導計画（全4時間）

第3節 平城京の時代

	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
8世紀の東アジアと日本（本時）		○	○	
藤原氏の進出と政界の動揺	○			○
民衆と土地政策			○	○

### 5 教材観

当時の日本は，東アジア情勢の大きな変化の中で，律令国家を確立させ，中央集権化が達成された時代である。天皇を中心とする国家体制が成立したことで，外交においても，これまでの中国を中心とする東アジアの国際秩序とは異なる，独自の外交関係の構築を目指す様子が顕著に見られるようになる時代である。日本史を学習する上で，東アジアとの関連性や，日本の外交姿勢の変化を通して通史的な古代史の内容の理解にもつながる単元である。

## 6 生徒観

普通科の文系選択者のクラスである。授業態度は概ね良好だが、受動的な態度の生徒が多く、自ら地図や資・史料、また既習事項等を用いて、歴史に対する考察を行うような生徒は少ないのが現状である。また、学習する上で、日本史全体を概観して理解することができていない生徒が多く、定期考査においても、人名や出来事そのものの知識を問う問題の正答率が高いが、出来事についての年代順の並び替えなどの問題は正答率が低い傾向がある。

## 7 指導観

上記の分析結果を踏まえ、地図や資・史料、これまでの既習事項を用いて、個別の時代に留まらない日本史の内容を概観しながら、考察させたり、考察した内容をまとめたりする授業を行う必要があると考えた。

本時は、導入時に大きな学習課題を与え、地図を中心とする資料をもとに、1時間を通して課題の考察を行いながら、古代史全体の大まかな内容の理解を深め、歴史を概観し、それを表現する技能を身につけることを目指した。

## 8 本時の実際

### (1) 本時の目標

8世紀の日本が東アジア各国と、日本を中心とする独自の国際関係を築こうとしたことを、既習事項をもとにした資料や地図から、歴史的な背景を踏まえた上で考察し、その結果を適切に表現する。

【思考・判断・表現】

### (2) 本時の評価基準

8世紀の日本が東アジア各国と、日本を中心とする独自の国際関係を築こうとしたことを、歴史的な背景を踏まえた上で考察し、適切に表現している。【思考・判断・表現】

(3) 本時の展開

	学習内容	学習活動	指導上の留意点 及び評価の観点	備考
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習課題の設定</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〈学習課題〉8世紀の日本は東アジアでどのような国際関係を築こうとしたと考えられるか。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>歴代中国王朝との関係を振り返り、それぞれの時代で日本と中国の関係が異なることに視点を当てる。</li> <li>上記の点を踏まえて、学習課題を設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>前単元の既習事項（日本と東アジアの関係）と本時の学習課題を比較することによって、律令国家が形成される過程で日本の外交姿勢が転換していったことを強調する。</li> </ul>	
展開 I 15分	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本と歴代中国王朝</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>弥生時代～飛鳥時代まで、それぞれの時代の日本と歴代中国王朝との関係を、資料や地図から考察し文章として表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>提示した地図・資料を活用したり、教科書等の記述を復習させたりしながら、日本と中国王朝の関わりを文章として表現させる。</li> </ul>	補助プリント(1)～(3)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本と歴代中国王朝との関係の変化の過程</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料を見て、日本と歴代中国王朝との関係がどのように変化していったかについて考察し、グループで話し合った後、文章として表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本が中国に臣従する形式から徐々にそれとは異なる形式の外交を目指すように変化していていることに気付かせる。</li> </ul>	補助プリント問1
	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本国内の変化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>弥生時代から飛鳥時代にかけての日本国内の政治体制がどのように変化したかについて考察し、グループで話し合った後、文章として表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地図から日本（ヤマト政権）の勢力の伸長を読み取らせ、中央集権体制の国家が形成されつつあることに気付かせる。</li> </ul>	補助プリント問2
展開 II 20分	<ul style="list-style-type: none"> <li>8世紀の日本と東アジア</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>展開Iと展開IIを通して、8世紀の日本は唐や新羅・渤海などどのような外交関係を構築しようとしたのか、考察し、話し合う。</li> <li>話し合ったことを文章化し、各班の代表者が発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>細かい用語にはこだわらず、個々の意見を重要視するように指導する。</li> <li>発表の中で、重要な概念に触れた場合は教員が、板書等で補足する。</li> </ul>	補助プリント問3
終末 10分	<p>まとめ</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〈まとめ〉8世紀の日本は、ヤマト政権による国内統一・中央集権化の結果、律令国家を確立し、中国を中心とする東アジアの秩序を離れ、日本を中心とする独自の外交関係の構築を目指した。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他の生徒の発表を聞き、自己の意見と異なる部分を把握し、より良い表現に修正する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>8世紀の日本と東アジアの国際関係について発表させ、グループの意見を尊重しながら、修正すべき語句を指摘し、よりよい表現を目指す。</li> </ul>	

## 数学科学習指導案

科 目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
数学Ⅱ	2年4組（普通科）40名 （男子19名，女子21名）	2年4組	新編 数学Ⅱ（東京書籍）	小宮路浩章

### 1 単元（題材）名：第5章 「微分と積分」

### 2 単元の目標

導関数を用いて，関数の極大・極小を調べ，グラフがかけるようにする。関数の最大値・最小値を求められるようにする。さらに微分法を用いて，方程式の解の個数を調べたり，不等式を証明したりすることが出来るようにする。

### 3 単元（題材）の評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	数学的な技能	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 関数の増減やグラフに関心を持ち，具体的な事象の考察に活用しようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 関数の増減を，導関数の符号として捉えることができる。</li> <li>・ 関数の増減から関数の極値について考察することができる。</li> <li>・ 関数の実数解が，グラフと <math>x</math> 軸の共有点の座標であることが理解できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 微分係数の考えを用いて，グラフの接線の方程式を求めることができる。</li> <li>・ 関数の極値を調べたり，グラフをかくことができる。</li> <li>・ 関数の増減やグラフを用いて最大値・最小値を求めることができる。</li> <li>・ 関数の増減やグラフを調べることを基にして，方程式や不等式を処理することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ グラフの接線の方程式を求めるための基礎的な知識を身につけている。</li> <li>・ 関数の増減やグラフを調べることを，方程式の実数解の個数や不等式の証明と関連付けて理解している。</li> </ul>

### 4 単元（題材）の指導計画（全9時間）

	内 容	時間数
第2節	① 接線の方程式	1時間
	② 関数の増減	1時間
	③ 関数の極大・極小	2時間
	④ 関数の最大・最小	2時間
	⑤ 方程式・不等式への応用	2時間
	方程式の解の個数	1時間（本時）

### 5 教材（単元・題材）観

微分法は，もともとは物理的な運動や自然現象を記述するために考えられたものである。関数の最大・最小の求め方を扱い，容積や体積の最大・最小など，具体的な事象に応用できることも学ぶ。また微分法は，3次方程式の解の個数や3次不等式の証明など，数学の他分野への問題解決にも役立つ。

### 6 生徒観

2年普通科の理系習熟度クラスである。学級役員や清掃など真面目に取り組む生徒が多く，周囲に対して優しく配慮することが出来る。学習量を確保している生徒が，力を伸ばしてきている。高校生



活の後半戦に入り進路への意識が高まりつつある。反面、部活動との両立でやや苦勞している生徒もいる。数学に関しては意欲が高い。問題演習のときは難しい問題であっても計算を進めようと試行錯誤する生徒が増えてきた。

## 7 指導観

導関数を用いて関数の増減や極値を調べ、グラフを作成し、方程式の実数解がグラフと  $x$  軸との共有点の  $x$  座標であることを学んできた。これらを利用して、定数を含む 3 次方程式の実数解の個数が、3 次曲線のグラフと  $x$  軸に平行な直線の共有点の個数と一致していることを理解し、定数の値によりどのように変化するかということを視覚的に捉えさせたい。

## 8 本時の実際

### (1) 本時の目標

- ① 定数分離する意味を理解する。
- ② 増減表をもとに、グラフを作成し、曲線と直線の共有点の個数を視覚的に理解する。
- ③ 3 次方程式  $x^3 - 3x^2 - a = 0$  の異なる実数解の個数が、曲線  $y = x^3 - 3x^2$  と直線  $y = a$  との共有点の個数であることを理解する。

### (2) 本時の評価基準

数学的な見方・考え方	図を利用して、固定された 3 次関数の曲線に対して、直線 $y = a$ を動かすことにより、共有点の個数がどのように変化するかを理解することが出来たか。
------------	---

### (3) 本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点 評価の観点等
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・方程式の実数解の個数は、<u>グラフと <math>x</math> 軸の共有点の個数により求めることができることを確認する。</u></li> </ul>	
展開 40分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p><b>例題</b> 3 次方程式 <math>x^3 - 3x^2 - a = 0</math> の異なる実数解の個数は、定数 <math>a</math> の値によってどのように変わるか調べよ。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・例題をどのようにして解くか考える。 (想定される意見) <math>y = x^3 - 3x^2 - a</math> のグラフをかいて、<math>x</math> 軸との共有点を調べる。</li> <li>・例題の説明を聞く。</li> <li>・定数 <math>a</math> を移項することにより、<math>x</math> の 3 次式と定数 <math>a</math> が分離された (定数分離) ことを確認する。</li> <li>・3 次関数のグラフと直線 <math>y = a</math> の共有点が、与えられた 3 次方程式の実数解であることを理解する。</li> <li>・増減表をもとに、3 次関数のグラフをかく。</li> <li>・<math>x</math> 軸に平行な直線 <math>y = a</math> を動かしてみるにより、共有点の個数がどのように変化するかを生徒同士話し合い考えてみる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例題を解くために、どのようにしていくとよいかを考えさせる。</li> <li>・関数 <math>y = x^3 - 3x^2 - a</math> の増減表を作成して、グラフを考えてもよいが、曲線を上下に動かして、<math>x</math> 軸との共有点を調べなければならないことを説明する。</li> <li>・別の方法として、定数分離により、3 次関数のグラフと <math>x</math> 軸に平行な直線の共有点に注目することを説明する。</li> <li>・発問しながら、生徒への説明をしていく。</li> <li>・共有点の個数が、定数 <math>a</math> の値によりどのように変化するかを説明する。</li> </ul>

	<p><b>問</b> 3 次方程式 <math>x^3 - 3x - 2 - a = 0</math> の異なる実数解の個数は、定数 <math>a</math> の値によってどのように変わるか調べよ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・例題を参考にして、問 1 を解く。</li> <li>・指名された生徒は、板書をする。</li> </ul> <p><b>評価問題</b> 3 次方程式 <math>2x^3 - 3x^2 - a = 0</math> の異なる実数解の個数は、定数 <math>a</math> の値によってどのように変わるか調べよ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・例題や問で学んでことを活用して、評価問題を解く。</li> </ul>	<p>図を利用して、固定された 3 次関数の曲線に対して、直線 <math>y = a</math> を動かすことにより、共有点の個数がどのように変化するかを理解することが出来たか。 《数学的な見方や考え方》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・例題を参考にして、進めるように指示する。</li> <li>・机間指導を行いながら・解けていない生徒に対して、ヒントを与える。</li> <li>・板書を基に解説をする。</li> <li>・時間があれば、グラフを利用して、<math>x</math> 座標が正の共有点を 2 個、<math>x</math> 座標が負の共有点を 1 個もつような範囲を質問する。</li> <li>・プリントを配布する。</li> <li>・正しく解答できているか確認する。</li> <li>・プリントを回収する。</li> </ul>
<p>まとめ 5分</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のまとめを聞く。</li> <li>・定数分離を行い、グラフと直線の共有点の個数を求めることによって、方程式の実数解の個数を求められることを再確認する。</li> </ul>	

#### (4) 本時の評価

- ① 定数分離する意味を理解できたか。
- ② 増減表をもとに、グラフを作成し、曲線と直線の共有点の個数を視覚的に理解できたか。
- ③ 3 次方程式  $x^3 - 3x^2 - a = 0$  の異なる実数解の個数が、曲線  $y = x^3 - 3x^2$  と直線  $y = a$  との共有点の個数であることを理解できたか。

## 理科学習指導案

科 目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
化学基礎	1年5組（普通科）37名 （男子18名，女子19名）	化学実験室	高等学校 化学基礎 （第一学習社）	永田 裕子

### 1 単元（題材）名

第Ⅱ章 物質の変化 第2節 酸と塩基の反応 ① 酸と塩基

### 2 単元（題材）の目標

いろいろな酸や塩基の示す性質，水溶液の水素イオン濃度，pH について理解する。また，それらの塩と塩基の中和反応に関する量的な関係や反応の様子について理解する。

### 3 単元（題材）の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	観察・実験の技能	知識・理解
酸と塩基や中和について関心をもち，意欲的に探究しようとしている。	酸と塩基の性質や水素イオン濃度，中和反応の量的関係について考察し，導き出した考えを表現している。	酸と塩基の性質や中和反応におけるこれらの量的関係について，観察，実験を行い，基本操作を習得するとともに，それらの過程や結果を的確に記録，整理している。	酸と塩基の性質及び中和反応に関与する物質の量的関係を理解し，知識を身につけている。

### 4 単元（題材）の指導計画（全 10 時間）

- ① 酸と塩基                   （3時間）※本時 1 / 3時間
- ② 水素イオン濃度       （2時間）
- ③ 中和と塩               （3時間）
- ④ 中和滴定               （2時間）

### 5 教材（単元・題材）観（単元概要）

中学校では酸・アルカリ・中和を扱っており，酸とアルカリの性質や中和により水と塩が生成すること，pH は 7 を中性として酸性やアルカリ性の強さを表していることについて学習している。ここではまず，酸・塩基について，水素イオンの授受による定義やその強弱と電離度，水素イオン濃度，pH などについて理解させる。中和反応では，反応を化学反応式で表したり，反応に関与する物質の量的関係を理解させ，実験を通して未知の酸や塩基を求めることができるようにする。

### 6 生徒観（生徒の実際）

1 学年の普通科クラスであり，現在，2 学年に向けて文理選択を考える時期である。授業中はおとなしく，発表に自信のなさが表れる生徒も見られるが，全体的には化学に対する興味・関心があると思われる。生徒の理解度に大きく差があるため，工夫した授業を展開することで，クラス全員が積極的に授業に参加する雰囲気をつくる必要がある。

## 7 指導観

酸・塩基の定義，その価数や強弱，水素イオン濃度，pH，中和，塩とその水溶液，中和滴定と  
 いうように，内容が多岐にわたり，生徒にとって「難しい」という印象を与えやすい単元である。  
 そのため，一つ一つの内容を丁寧に理解させながら，それらの学習内容の関連性についても理解さ  
 せるように指導する必要がある。

## 8 本時の実際

### (1) 本時の目標

ア 実験を正しく安全に行うことができる。 【観察・実験の技能】

イ 酸・塩基の定義について理解し，電離式を書くことができる。 【知識・理解】

### (2) 本時の評価規準

観察・実験の技能	基本的な操作ができ，実験結果をまとめることができる。
知識・理解	酸には水素イオンが，塩基には水酸化物イオンが含まれていることを理解する。また，その電離の様子を電離を示すイオン反応式を用いて表すことができる。

### (3) 本時の展開

	学習内容	指導上の留意点	評価
導 入 10 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>酸性，アルカリ性とはどのような性質だったか，具体例を挙げ学びなおす。</li> </ul> <p><b>酸性</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>すっぱい</li> <li>青色リトマス紙が赤色に変化</li> <li>BTB 溶液が黄色</li> <li>金属を溶かす（小学校 6 年）</li> </ul> <p><b>アルカリ性</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>苦い</li> <li>赤色リトマス紙が青色に変化</li> <li>BTB 溶液が青色</li> <li>ぬるぬるする</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>アルカリと塩基の違いを学ぶ。 「アルカリは水に溶ける塩基の総称」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>スライドを用いて，中学校での既習事項を思い出させる。</li> <li>生徒に発問する。答えた内容を板書する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>図でイメージさせる。</li> </ul>	

<p>展開① 20分</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>青色, 赤色リトマス紙に塩酸, 水酸化ナトリウム水溶液をそれぞれつけると色はどのように変わるか予想する。</li> <li>塩酸と水酸化ナトリウム水溶液で中央が変色したリトマス紙の両端に電圧をかけると, 変色部分はどうか予想する。</li> <li>青色リトマス紙の赤色部分は陰極側へ, 赤色リトマス紙の青色部分は陽極側へ移動することを確認する。</li> <li>酢酸の場合はどうか予想する。</li> <li>実際に酢酸で同様の実験を行う。             <ol style="list-style-type: none"> <li>ろ紙をスライドガラスの上に乗せ, 両端を目玉クリップではさみ, ろ紙に硝酸カリウム水溶液を滴下しぬらす。</li> <li>ぬらしたろ紙の上に青色, 赤色リトマス紙を並べて置く。</li> <li>リトマス紙の中央に酢酸でぬらした細く切ったろ紙を置く。</li> <li>手回し発電機と目玉クリップをつなぎ, 発電して電圧をかける。</li> <li>どのように変色したか, その部分がどう移動するかを観察し, 記録する。</li> <li>酢酸は酸・塩基のどちらか確認する。</li> </ol> </li> <li>実験の結果から, 酢酸には水素イオンが含まれており, 酢酸が酸性の物質であることを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>スライドで写真を見て確認する。</li> <li><u>中学校の教科書の図を用いて, 今回の実験との中学校での既習事項との関連付けをする。</u></li> <li>陽イオンは陰極に, 陰イオンは陽極に引かれることを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>酸は水素イオンを, 塩基は水酸化物イオンを生じる物質であることを理解する。 【知識・理解】</li> <li>安全に操作を行うことが出来る。 【観察・実験の技能】</li> <li>実験結果を正確に記録し, 考察する。 【観察・実験の技能】</li> </ul>
<p>展開② 15分</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実験で用いた塩酸, 水酸化ナトリウムの電離を示すイオン反応式をもとに, 酢酸の電離の様子を電離式で表す。</li> <li>それ以外の酸や塩基の電離の様子を電離を示すイオン反応式で表す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>酢酸の化学式 <math>\text{CH}_3\text{COOH}</math> は示す。</li> <li>酢酸は H が 2 ヶ所あるが, 左側は電離しないことを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>酸や塩基の電離の様子を電離を示すイオン反応式で表す。 【知識・理解】</li> </ul>
<p>まとめ 5分</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>酸と塩基には, それぞれ水素イオンや水酸化物イオンが含まれていることを理解する。</li> <li>酸と塩基の電離の様子は電離を示すイオン反応式で表されることを理解する。</li> </ul>		

## 音楽科学習指導案

科 目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
音楽理論	2年7組（音楽科）38名 （男子3名，女子35名）	音楽室2	明解 新楽典	濱田淳一

### 1 題材

「移調・移調楽器について知ろう」

### 2 題材の指導目標

- (1) 移調・移調楽器について正しく理解させ、既知の楽曲等を用いた演習に主体的に取り組ませる。
- (2) 演習を通して移調・移調楽器の知識を定着させ、音楽性豊かな表現をするための基礎的な能力を養う。
- (3) 音楽を形づくっている要素を知覚させ、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、楽器の音色の特徴と表現上の効果との関わりを聴き取らせる。

### 3 題材の評価規準

観点1 音楽への関心・意欲・態度	観点2 音楽表現の技能	観点3 鑑賞の能力
移調・移調楽器の理論に興味・関心を持ち、主体的に学習に取り組もうとしている。	移調・移調楽器の知識を生かして、アンサンブルや吹奏楽曲・管弦楽曲等の演奏技能を身に付け、創造的に演奏できる。	移調・移調楽器の知識を正しく理解し、音楽に対する理解を深め、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。

### 4 題材の指導計画（全5時間）

次	時	目 標	題材の評価規準との関連	指導上の留意点
1次	1	○ 移調の目的について理解する。 ・ 声域との関係について ・ 原曲と異なる楽器で演奏する場合について ・ 演奏技術の向上 ・ 作曲の技術の向上 ○ 移調の実習	観点1・2・3	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
	2	○ 移調の実習 ・ 前時の学習内容を復習する。 ・ 既知の楽曲を用いて、演習を実践する。	観点1・2・3	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。

2次	3 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 移調楽器について理解する。</li> <li>・ 1次の学習内容を復習する。</li> <li>・ 移調楽器について理解する。</li> <li>・ 既知の楽曲を用いて、演習を実践する。</li> </ul>	観点1・2・3	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
3次	4  5	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教科書の演習問題を実践する。</li> <li>○ 主科の練習曲や既知の曲を用いて、移調の仕組みを理解しているか復習する。</li> <li>○ 教科書の総合問題や過去の入試問題等で演習を実践する。</li> </ul>	観点1・2・3	過去の入試問題等の準備

## 5 教材観

教材は、「V 移調, 移調楽器」～後編：4章 音階と調～ を使用する。

移調・移調楽器の理論を学習することは、アンサンブルや管弦楽・吹奏楽といった大規模な演奏形態の楽曲演奏や鑑賞の際に不可欠な知識であるとともに、大学入試においても配点・難易度ともに高く、生徒に確実に身に付けさせなくてはならない理論である。

## 6 生徒観

明るく活発な生徒が多いが、授業中は比較的小となしいクラスである。専攻の内訳はピアノ7人、管打楽器28人、声楽3人で、管楽器専攻の生徒が多い。移調・移調楽器の理論については、管楽器専攻の生徒であっても、知識や理解が十分とは言えない。また、ピアノや声楽専攻の生徒にとっては、これまでの演奏活動で体験する機会が少ない理論でもあるため、概念自体が理解できていない生徒も多い。

## 7 指導観

楽曲の中で、アンサンブルや管弦楽・吹奏楽などの大規模な演奏形態が占める割合は非常に大きい。それらの中では様々な移調楽器が用いられているが、音楽理論の分野の中でも最も理解しづらい分野の一つが、この移調・移調楽器についてである。

本題材の学習を通して移調・移調楽器の理論を学ぶことで、スコアリーディングや楽曲分析の基礎を理解できるよう指導する。

## 8 本時の実際

### (1) 本時の目標

- ア 楽曲の旋律を用いた移調の実習を通して、移調・移調楽器について理解する。
- イ 音楽を形づくっている要素を正しく捉え、演奏技能の基礎的な能力を養う。
- ウ 移調・移調楽器の特徴を理解しながら、演奏を聴くことができる。

### (2) 本時の評価規準

- ア 移調・移調楽器について理解するために、実習に主体的に取り組んでいる。
- イ 創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な基礎的な技能を身に付けようとしている。

ウ 移調楽器の特徴と実音との違いを聴き取っている。

(3) 本時の展開

過程	学習内容	時間	指導上の留意点(・は評価の観点)	備考
導入	1 本時の学習の目的を知る。	2	○ 音楽における移調・移調楽器の理解の重要性を伝える。 ・観点1	
展開	2 <u>移調楽器について知る。</u> <u>・楽器の演奏を聴き記譜と実音の違いを聴きとる。</u>	5	○ 譜例を示し、ピアノ、クラリネット、ホルン、アルトサクソフォン、トロンボーンで演奏させ、実音との違いを聴き取らせる。 ・観点3	ホワイトボード等
	3 問題演習を解答する。	20	○ スコアを用いて記譜と実音の違いを理解させる。 ・観点2	楽譜・視聴覚機器の準備
	4 <u>移調及び移調楽器が楽曲の中で、どのように用いられているかを知る。</u>	20	○ 楽曲の中で、移調及び移調楽器が、どのように用いられているかを理解させる。 ・観点2	楽譜・視聴覚機器の準備
終末	5 本時のまとめを行い、次時の予告を聞く。	3	○ 本時の学習内容のまとめと、次時に向けての課題を確認させる。 ・観点1	



## 美術科学習指導案

科 目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
西洋美術史	2年8組（美術科）34名 （男子9名，女子25名）	芸術棟 デザイン室	時代別 日本・西洋 美術鑑賞	前村卓巨

### 1 題 材 名 黒田清輝に影響を与えたパリの画家たち（西洋美術史）

### 2 題材の目標

- (1) 西洋美術史に関心をもつ課題を見つけ積極的に調べ、発表することができる。
- (2) 研究調査を生かして、より西洋美術史への関心と理解を深める。
- (3) 他人の発表を聞いて理解し、発展的に捉えることができる。
- (4) 美術史用語について意味を理解し、使い分けることができる。作品の良さを理解し説明できる。

### 3 題材の評価規準

関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化について知識・理解
西洋美術史に関心をもつ課題を見つけ、積極的に調べる。また、他者の発表に関心を持って真剣に聞き、必要に応じて記録をとることができる。	調べたことを、映像メディア機器等を用い効果的に発表することができる。	他者の発表を聞いて理解し、発展的に捉えることができる。	美術史用語について意味を理解して使い分けることができる。作品のよさについて理解し説明できる。

### 4 題材の指導計画（全18時間）

これまで学んだ西洋美術史について、鹿児島県出身の黒田清輝の留学に照らしながら、研究課題を見つけ、同時代の画家や、影響を受けた画家などについて調査研究し発表する。

### 5 題 材 感

- (1) 松陽高校では、毎年2年生のこの時期に、海外研修旅行でフランスを訪れており、美術史の授業などで学んだ本物の作品を見る機会を得ることでより深い鑑賞の学習ができています。
- (2) 黒田清輝の生涯や作品を通し、同時代に活躍した芸術家について調べることで、海外研修旅で訪れるフランスの芸術や文化により深く触れる機会とする。

### 6 生徒観

特に、美術への興味感心の高い生徒たちであるが、本校への進学を希望したきっかけはアニメや漫画に興味があったという生徒が多い。専門的美術への目的意識の高い生徒と、そうでない生徒の意識の差が大きく、制作活動への意欲や完成作品のレベルにも差が出ている。

西洋美術史については、生徒の中に特に興味深い者がおり、その生徒に引っ張られるようにクラス全体の関心も高くなっている。特に、海外研修旅行があるため、実践的学習に生かせるということで積極的に取り組んでいる様子がみられる。

調査・研究においては、パソコンやインターネットなどを効果的に使いこなしている。パワ

ーポイントは全ての生徒が操作できる。中には映像として研究をまとめる生徒もいる。また、書物・文献・資料などから読み取ろうとする努力が見られる。調査能力は高い。

## 7 指導観

黒田清輝が留学していた当時のフランスの状況を調べることで美術史で学んだバルビゾン派や後期印象派などについてより深く学ばせる。

海外研修旅行でパリの美術館を見学するほか、バルビゾン村のミレーのアトリエを見学することにより理解を深め、鑑賞の能力を高めていきたい。

## 8 本時の実際

### (1) 本時の目標

- ア 研修旅行の事前学習についてメディア機器等を用い効果的に発表する。
- イ 他者の発表をしっかりと聞き理解することができる。
- ウ 美術史や鑑賞研究などについての関心や知識を高める。

### (2) 本時の評価基準

関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化について知識・理解
西洋美術史に関心を持つ課題を見つけ、積極的に調べる。また、機器等を用い効果的に発表する。他者の発表に関心を持って真剣に聞く。	調べたことを、映像メディア機器等を用い効果的に発表することができる。	他者の発表を聞いて理解し、発展的に捉えることができる。	美術史で出てくる言葉の意味を理解して使い分けることができる。作品の良さについて理解し、他者に対して説明できる。

### (3) 本時の展開 学習プリントは事前に配布しておく

過程	生徒の活動	指導上の留意点(※)と評価方法(◇)
導入 (5)	1 映像を見る  2 既習内容の確認をするとともに、本時の学習の目的を知る。	○ 映像視聴から入り、本時の内容について説明する。 ※ 「黒田清輝に影響を与えたパリの画家たち」について研究調査していることを押さえる。 ◇ 他者の発表をしっかりと聞き、理解を深める。[関心意欲]
	本時の研究テーマ 「バルビゾン派の画家たちと黒田清輝」	※ テーマを確認し、本時の目標について説明する。

<p>展開 1 (30)</p>	<p>1 研究発表</p> <p>(1) 発表 1 「バルビゾンの位置, 及びバルビゾンで活躍した画家達 (バルビゾン派とは) について」(今村, 川井田鮎, 宮原)</p> <p>(2) 発表 2 「ミレーとカラーについて (年譜, 作品)」(下西, 堀之内)</p> <p>(3) 発表 3 「黒田清輝とバルビゾンの関わりと現在のバルビゾン」(荒田, 川井田健)</p>	<p>※ 研究班ごとに発表させる。</p> <p>◇ <u>効果的発表の態度</u> [表現]</p> <p>◇ <u>他者の意見を聞く姿勢</u> [関心, 思考]</p> <p>※ 適宜, 補足説明等を行う。</p> <p>※ 既習事項の確認をさせることでより深く認識させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バルビゾン派</li> <li>・ミレーの作品と生涯について</li> </ul>
<p>展開 2 (10)</p>	<p>2 鑑賞活動</p> <p>(1) <u>教科書の《落ち穂拾い》の作品を見て気づいたこと, 感じたことを学習プリントに記入する。</u></p> <p>(2) <u>意見を出し合う。</u></p> <p>(3) <u>《晩鐘》について, 感じたことを学習プリントに記入する。</u></p> <p>(4) <u>意見を出し合う。</u></p> <p>(5) 先生の説明を聞く。</p> <p>3 本時で学んだことを学習プリントにまとめる。</p>	<p>※ 教科書を開かせる。</p> <p>◇ <u>思考を文章で表現</u> [思考, 表現]</p> <p>※ 回答予想</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人物のポーズについて</li> <li>・帽子の色について</li> <li>・画題について</li> <li>・色彩, 構図について</li> </ul> <p>◇ 感性的見方や論理的分析 [思考]</p> <p>◇ 積極的に発表する姿勢 [関心, 表現]</p> <p>※ 同時代の作家, 黒田清輝との関わりについて説明する。</p> <p>※ 現代開催されている「オルセー美術館展」についても説明する。</p> <p>◇ 意欲的に意見を聞く姿勢 [関心, 思考]</p> <p>◇ 学んだことを整理し, 文章で表現 [思考, 表現]</p>
<p>まとめ (5)</p>	<p>次時の予告を聞く。</p>	<p>※ 「フォンテーヌ・ブローについて」</p> <p>◇ 西洋美術史の基礎的な知識 [知識]</p> <p>◇ 海外研修旅行につなげる意欲 [関心]</p>

## 英語科学習指導案

科 目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
英語表現Ⅱ	2年5組(普通科) 35人 (男子26人, 女子9人)	2年5組 教室	BIG DIPPER English Expression II	船迫 千鶴

### 1 単元(題材)名 Lesson 18 Dreaming of Space

### 2 単元(題材)の目標

- (1)・「現在や過去の仮定」の話をする場合, どのような表現を用いるのかを考え, 実際に自分の立場で意見文を作り, クラスメイトに伝えようとする。  
 ・クラスメイトの意見や発表を積極的に理解しようとしている。  
【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
- (2)・自分の意見や考えを英語でわかりやすく相手に伝える。  
【外国語表現の能力】
- (3)・仮定法過去, 仮定法過去完了の文の構造と意味を理解する。  
 ・新出の単語や表現の意味を理解する。  
【言語や文化についての知識・理解】

### 3 単元(題材)の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
① 「現在や過去の仮定」の話をする場合, どのような表現を用いるのかを考え, 実際に自分の立場で意見文を作り, 相手に伝えようとしている。 ② クラスメイトの意見や発表を積極的に理解しようとしている。	① 自分の意見や考えを英語でわかりやすく相手に伝えることができる。	/	① 仮定法過去, 仮定法過去完了の文の構造と意味を理解している。 ② 新出の単語や表現の意味を理解している。

### 4 教材(単元・題材)観

本課は, 仮定法過去の用法, および仮定法過去完了の用法を取り扱っている。小学生の時の宇宙探査についての講演を聞いた時のエピソードを扱ったモデル文や, 様々な例文を生徒に触れさせていく。仮定法の表現の知識を身につけ, その知識を活用して自分の願望や望みをお互いに伝え合うような言語活動を設定することによって, 生徒の表現力の育成を図っていきたい。

### 5 生徒観

2年5組は普通科理系クラスである。明るく, 活気のある雰囲気です。ほとんどの生徒が進学を希望しているが, 部活動にも積極的に参加し, 学業との両立を図るべく, 目標を持って日々学習に取り組んでいる。しかし英語に対して苦手意識を強く持ち, 表現活動に不安を持っている生徒が多い。ペアワークやグループワークを通して, お互いに学び合う機会, コミュニケーションを図る機会をできるだけ多く作ってきたい。

## 6 指導観

本年度も昨年度に引き続き、語彙力、文法力の定着に重点を置いて指導している。特に英語表現Ⅱの授業では生徒の文法力の蓄積が不十分であるため、まずは多くの問題演習を通して文法力育成に重点を置きたい。さらに、ペアやグループでの表現活動を活発に行うことで、生徒たちの英語の苦手意識を払拭し、英語を使う楽しさや英語で自分の考えを伝えることの大切さを実感させながら、「話す」、「書く」力を伸ばしていきたい。

## 7 単元（題材）の指導計画（全2時間）

時	主な学習内容	評価
第1時(本時)	<u>仮定法過去を用いて自分の考えを表現する</u> <u>仮定法過去、過去完了の用法を理解する</u>	ア①②, イ① エ①②
第2時	<u>仮定法過去、仮定法過去完了を用いて自分の考えを表現し、お互いに伝え合う</u>	ア①②, イ①

## 8 本時の実際

### (1) 本時の目標

- ① 英語で「現在や過去の仮定」の話をする場合、どのような表現を用いるのか考え、実際に文を作り、それを使ってみようとする。クラスメイトの意見を積極的に聞こうとしたり、自分の意見を述べようとする。  
【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
- ② 仮定法過去や仮定法過去完了を用いて自分の意見や考えを英語でわかりやすく伝える。  
【外国語表現の能力】
- ③ 仮定法過去や仮定法過去完了の構造や意味、新出の単語の発音や意味を理解する。  
【言語や文化についての知識・理解】

(2) 本時の展開

時間	学習内容	生徒の活動	教師の活動	活動の目的, 備考	評価基準	技能
1	あいさつ	・ あいさつをする	・ あいさつをする	・ 英語学習の雰囲気作り		L S
5	Warm-up -Small Talk	・ ペアになり, テーマ “the person I like the best” に即して会話する ・ 代表の生徒が全体で発表する	・ Small Talk のテーマと モデルを示した後, 活動させる ・ 生徒を指名し, クラス全体で共有する	・ 英語学習の雰囲気作り	ア② イ①	L S
15	モデル文の内容把握とターゲットセンテンスの確認	・ 質問の答えを考えながら CD を聞く ・ モデル文に目を通しながら質問の答えを考える ・ 質問に答えながら, 内容を把握する ・ <u>仮定法過去, 過去完了の用法を確認する</u> ・ 教師に続けてモデル文を読む練習をする ・ <u>EXERCISES 2, 3 の指示された練習問題に取り組む</u> ・ 正答の確認をする	・ 質問を確認した後, CD を流す。 Q1. What kind of lecture did the writer listen to? Q2. What did he think afterward? ・ 質問に対する答えを聞き, 内容を把握させる ・ 仮定法過去, 仮定法過去完了の用法を説明する ・ モデル文を読む ・ EXERCISES 2, 3 のうち, 取り組ませる練習問題を指示する ・ 正答を確認させ, 補足説明する	・ <u>仮定法の基本的用法を理解する</u>  ・ <u>反復練習を通して仮定法の基本的用法を身につける</u>	エ① ②	L R
27	Activity	・ <u>グループになり, 下から選んだトピックについて, 仮定法過去の表現を用いて, 自分の考えを表現し, グループ内で共有し, お互いに感想を述べ合う</u>  If you met Doraemon, what would you do?  If you had much money, what would you do?  If you had no homework every day, what would you do?  If you had a dokodemo-door, where would you go?  If you had a two-month winter vacation, what would you do?  If today were the earth's last day, what would you do?  ・ <u>グループ内で意見をまとめ, 全体に発表する</u>	・ いくつかの題を提示し, それを選ばせて, 活動させる ・ 生徒の意見が活発に出るよう, ヒントを与えたり, 理由なども伝えるよう指示する  ・ 各グループから生徒を指名し, クラス全体で共有する	・ <u>仮定法過去の表現を使い, 積極的に自分の考えを表現したり, 他者の意見を聞こうとしたりする</u>	ア① ② イ①	W S L
2	連絡, あいさつ	・ 指示内容を確認する ・ あいさつをする	・ 宿題, 次の時間の連絡			

## 情報科学習指導案

科 目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
社会と情報	1年3組（普通科）36名 （男子18名，女子18名）	1年3組	高校社会と情報 （実教出版）	川畑 勉

### 1 単元名

第3章 情報安全

### 2 単元の目標

- (1) 情報の特徴と情報化が社会に及ぼす影響を理解させる。
- (2) 情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して、情報を収集、処理、表現させる。
- (3) 効果的にコミュニケーションを行う能力を養い、情報社会に積極的に参画する態度を育てる。個人の責任やネチケットについて理解させ、実践する態度を養う。

### 3 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
情報や情報社会に関心を持ち、身のまわりの問題を解決するために、自ら進んで情報及び情報技術を活用し、社会の情報化の進展に主体的に対応しようとする。	情報や情報社会における身のまわりの問題を解決するために、情報に関する科学的な見方や考え方を活かすとともに情報モラルを踏まえて、思考を深め、適切に判断し表現している。	情報及び情報技術を活用するための基礎的・基本的な技術を身に付け、目的に応じて情報及び情報技術を適切に扱っている。	情報及び情報技術を活用するための基礎的・基本的な知識を身に付け、社会における情報及び情報技術の意義や役割を理解している。

### 4 単元の指導計画（全8時間）

6 時 間	・個人による安全対策 ・暗号化 ・著作権	暗号化やフィルタリングなどの安全対策について、個人・組織・法規それぞれの面から理解させる。また、著作権の概要や例外規定などに触れ、今後の著作物との関わり方について考えさせる。
2 時 間	・総合演習 【本時 1/2】	実際の事例から、その原因や背景あるいは今後の対応について考察をさせる。また、自分の生活に照らし合わせることで、情報の扱いについて主体的に参画する態度を養う。

### 5 生徒観

明るく元気のあるクラスである。集中力はあるが、もっと持続すればより高いレベルに達すると思われる。男子より女子の方が、地道に努力するまじめな生徒が多い。

### 6 指導観

社会においては、ネットに関連したトラブルや事件が後を絶たない。県のネットパトロール事業も昨年同様行われる中、本校においてもトラブルの未然防止や情報モラル育成は、継続して取り組むべき事項といえる。外部講師による情報モラル講座とともに各授業でも情報モラル指導が必要であり、「情報」の授業においては、5年前から情報モラルの班別学習などに取り組み、情報モラルを身に付けた、より良く生きる生徒の育成を図ってきた。常に社会との関わりを意識させながら、更により良く生きる生徒の育成が図られると考えている。

## 7 本時の実際

### (1) 本時の目標

実際の事例から、その原因や背景あるいは今後の対応について考察することができる。また、自分の生活に照らし合わせることで、情報を主体的に扱う態度を養うことができる。

### (2) 本時の展開

過程	生徒の活動	指導上の留意点(※)と評価方法(◇)
導入 (5)	・既習内容の確認をするとともに、本時の学習の目的を知る。	※個人情報、安全対策、著作権など既習事項を再確認させる。 ・授業プリント配布 (授業プリント①)
展開1 (20)	テーマ <sup>1</sup> 「勉強にネットやアプリを活用しよう」 ①今まで活用した例を挙げよう。 付箋(2分) → 台紙 → 意見交換 → 発表 ②どんなことに注意すべき？ 意見交換 → 台紙 → 発表 ③まとめ ・発表班以外の意見を取り上げるとともに、 <u>著作権に触れないか、ネットの信頼度などについて考える。</u>	※3～5人の班を作る。 ※リーダー、発表係を決定させる。 ※班ごとに台紙 (授業プリント②)・付箋紙を配布する。 ※テーマを板書する。 ※意見交換の際は、机間指導を行い、適宜、意見交換活性化の助言を行う。 ◇他の意見を聞く姿勢 [関心, 思考]
展開2 (20)	テーマ <sup>2</sup> 「バカッターはなぜ絶えないか」 ①このようなことはなぜ起こる？ ②どんなことに注意すべき？ 付箋(2分) → 台紙 → 意見交換 → 発表 ③まとめ ・発表班以外の意見を取り上げるとともに、 <u>「仲間同士」と「世間」とのギャップや「聞く言葉」と「視覚的な言葉」のちがいについて考える。</u>	※再度、既習事項の確認をさせることでより深く認識させる。 ◇科学的な見方 [思考] ◇文字としてのまとめ [表現]
まとめ (5)	・台紙の提出。 ・班の解消と後始末をする。	※再度、既習事項の確認をさせることでより深く認識させる。 ◇科学的な見方 [思考] ◇情報を扱うための基礎的な知識 [知識] ◇文字としてのまとめ [表現]
		※本時のまとめと次時の予告をする。 ◇情報を扱うための基礎的な知識 [知識] ◇意欲的に意見を聞く姿勢 [関心, 思考]



# 数 学 科 学 習 指 導 案

日 時：平成 26 年 6 月 19 日（木） 第 4 校時  
学 校 名：鹿児島県立松陽高等学校  
対象学級：普通科 1 年 5 組 37 人  
教 科 書：新編 数学 I（啓林館）  
授 業 者：福山 健太郎

## 1 単元名 第 2 章 「2 次関数」

### 2 単元設定の理由

#### (1) 生徒観

中学校では、具体的な事象の考察を通して比例、反比例、一次関数および関数  $y = ax^2$  を学習してきた。しかし、これらに対して苦手意識がある生徒が多く、グラフをかくことができなかつたり、2 次関数とグラフの関係が分からなかつたりする生徒もいる。

#### (2) 教材観

物体の落下速度はその重さによらず時間に比例し、落下距離は時間の 2 乗に比例する「自由落下の法則」に代表されるように、関数は具体的な自然現象を表すことができ、生徒にとって興味深い単元である。2 次関数は、高等学校で学習する関数概念の基礎となるものであり、数量の関係や変化を表現することの有用性を認識するとともに、それらを事象の考察に活用できるようにすることが、この単元の主な目標であるといえる。

#### (3) 指導観

2 次関数の最大値・最小値を求める場合に、グラフを用いて視覚的に考察することの有用性を改めて理解させる。また、既習内容である平方完成の式変形や基本となるグラフのかき方についても丁寧に指導し、生徒が十分理解するよう努める。

### 3 生徒の実態

1 年普通科のクラスである。4 月の進路希望調査では、国公立 4 年制大学への進学希望者は 21 人であったが、そのうち文系学部希望者は 3 人、理系学部希望者は 5 人であり、残りの 13 人は未定であった。普通科全体で見ると、数学を得意あるいは苦手とする生徒が共に少なく、どちらともいえない中位層の生徒が多い。数学的な学力が高いとは言い難く、やや消極的な部分もあるが、授業への取り組みや姿勢は良く、何とか理解しようとする気持ちはある。

### 4 単元の目標

- (1) 中学校での具体的な知識をもとにして関数についての基本的な概念を導入し、さらに、一般的な関数の概念を与える。
- (2) 平行移動の考えを利用して、2 次関数  $y = ax^2$  のグラフから 2 次関数  $y = a(x - p)^2 + q$  のグラフがかけられることを理解させる。
- (3) 2 次関数  $y = ax^2 + bx + c$  のグラフの頂点の座標や軸の方程式を理解させる。
- (4) 2 次関数のグラフを利用して、2 次関数の最大値、最小値を求める。定義域を制限した場合の最大値、最小値の求め方を考察し、図形の面積等への応用をはかる。
- (5) 2 次関数のグラフと  $x$  軸との位置関係が  $D = b^2 - 4ac$  の符号で定まることを理解させる。
- (6) 2 次関数のグラフと 2 次不等式の解との関係について調べる。

## 5 単元の指導計画 (全 24 時間)

節	項	時間
§ 1 関数とグラフ	① 関数	2
	② 2次関数のグラフ	7
	③ 2次関数の決定	3
§ 2 2次関数の最大・最小	① 2次関数の最大・最小	4 【本時 (2/4)】
	② 最大・最小の応用	2
§ 3 2次関数と方程式・不等式	① 2次関数のグラフとx軸との共有点	2
	② 2次不等式とその解	4

## 6 本時の実際

(1) 題材： 第2節 ① 2次関数の最大・最小

(2) 目標

① 2次関数の最大・最小を，グラフをかいて考察しようとする。【関心・意欲・態度】

② 2次関数の定義域に制限がある場合に，最大値，最小値が求められる。【知識・理解】

(3) 指導の実際

過程	時間	学 習 活 動	指導上の留意点及び評価の観点等
導 入	10 分	<p>・小テストを解く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>問題</p> <p>① 2次関数 <math>y = x^2 - 2x - 1</math> を平方完成せよ。</p> <p>② 2次関数 <math>y = 2x^2 + 8x</math> を平方完成せよ。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5分後，黒板に解答をかき，自己採点させる。</li> <li>平方完成を利用して2次関数のグラフの軸と頂点を調べ，グラフをかくことができることを再度確認する。</li> </ul>
展 開 I	20 分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【本時の目標】 定義域が与えられた場合の2次関数の最大値・最小値を求めよう。</p> </div> <p>・ p. 104 例13 を考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>例13</p> <p>関数 <math>y = x^2 - 2x - 1</math> (<math>-1 \leq x \leq 4</math>) の最大値と最小値を求めよ。</p> </div> <p>・ p. 105 例14 を考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>例14</p> <p>関数 <math>y = 2x^2 + 8x</math> (<math>0 \leq x \leq 4</math>) の最大値と最小値を求めよ。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>黒板左上に掲示する。</li> <li>本時は，下に凸な放物線の場合で考えることを伝える。</li> <li>グラフより，頂点が定義域内にあるから，頂点で最小，右端で最大となることを理解させる。</li> <li>軸（頂点）から最も離れた点で最大となることを指導する。</li> <li>グラフより，頂点が定義域内がないから，左端で最小，右端で最大となることを理解させる。</li> <li>軸（頂点）に最も近い点で最小，最も遠い点で最大となることを指導する。</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>例 13 , 例 14 の相違点について話し合う。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>予想される生徒の意見</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><math>x^2</math> の係数が 1 か 1 以外か。</li> <li>頂点が定義域に含まれるかどうか。</li> </ul> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>周囲の生徒と話し合う時間を設定する。</li> <li>数名の生徒に発表させ、意見をまとめる。</li> <li>P.105 の誤答例について確認し、2 次関数の最大値・最小値を求める場合は必ずグラフをかいて考察するように指導する。</li> </ul>
展開 II	17 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>p.104 問 20 (1), p.105 問 21 (1) を解く。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>問 20 次の関数の最大値と最小値を求めよ。また、そのときの <math>x</math> の値を求めよ。</p> <p>(1) <math>y = 3x^2 - 6x + 1 (-1 \leq x \leq 2)</math></p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>問 21 次の関数の最大値と最小値を求めよ。また、そのときの <math>x</math> の値を求めよ。</p> <p>(1) <math>y = 4x^2 - 4x - 1 (-2 \leq x \leq 0)</math></p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>頂点が定義域に含まれるか否かにより、最大・最小が決まることを理解させる。</li> <li>机間指導を行いながら板書する生徒を指名し、黒板に書かせる。</li> <li>早く解き終えた生徒は、問 20 (2) および問 21 (2) を解くように指示する。</li> <li>問題を解く際に、グラフをかいて考察しているか。 【関心・意欲・態度】</li> <li>定義域が制限されていることを考慮して、最大値、最小値を求めているか。【知識・理解】</li> </ul>
まとめ	3 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時のまとめ</li> <li>次時の予告</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習内容のまとめを生徒に発表させる。</li> <li>上に凸の放物線の場合 ( 問 20 (2) および問 21 (2) ) については次回の授業で扱うことを予告し、各自解いておくように指示する。</li> </ul>

## 7 評価

(1) 2 次関数の最大・最小問題を、グラフをかいて考察しようとしたか。【関心・意欲・態度】

(2) 2 次関数の定義域に制限がある場合に、最大値、最小値が求められたか。【知識・理解】

# 数 学 科 学 習 指 導 案

日 時：平成 26 年 10 月 28 日（火）第 5 校時  
学 校 名：鹿児島県立松陽高等学校  
対象学級：普通科 1 年 2 組 37 名  
教 科 書：新編 数学 A（啓林館）  
授 業 者：福山 健太郎

## 1 単元名 第 1 章 「場合の数と確率」

### 2 生徒の実態

1 年普通科のクラスである。高校入学時のアンケートでは数学を苦手とする生徒が半数近くおり、1 学期の校内試験等の成績は他のクラスと比べて低かったが、2 学期以降少しずつではあるが向上してきている。授業に関しては、やや消極的な部分はあるものの、落ち着いた雰囲気の中で集中して臨んでいる。

### 3 単元の目標

- (1) 集合の表し方、部分集合、共通部分と和集合、補集合などについて、基本的な考え方を理解させる。
- (2) 場合の数を求めるときの基本として、和の法則、積の法則を適用する。その際、樹形図の有用性を知らせる。
- (3) 順列・組合せの意味を知り、それらの総数を求められるようにする。
- (4) いろいろな場合の数を求めるとき、順列・組合せの考え方や計算が適切に用いられるようにする。
- (5) 同様に確からしいことをもとに確率の定義を与え、簡単な例について確率を求めることができるようにする。
- (6) 加法定理などの確率の基本性質、余事象の確率を理解し、これらを利用して確率の計算ができるようにする。
- (7) 独立な試行の概念を導入し、独立な試行における事象の確率が求められるようにする。
- (8) 反復試行を理解して、これを用いた確率の計算ができるようにする。
- (9) 条件付き確率と乗法定理について理解し、これにもとづいて確率を求めることができるようにする。

### 4 単元の指導計画（全 32 時間）

節	項	時間
§ 1 場合の数	① 集合の要素の個数	3
	② 場合の数	2
§ 2 順列・組合せ	① 順列	2
	② いろいろな順列	2
	③ 組合せ	4
§ 3 確率とその基本性質	① 事象と確率	4
	② 確率の基本性質	5
§ 4 独立な試行の確率	① 独立な試行	2
	② 反復試行	3
§ 5 条件付き確率	① 条件付き確率	3
	② 確率の計算	2

## 5 本時の実際

(1) 題材： 第2節 ② いろいろな順列

(2) 目標

① 円順列の公式を理解し、利用することができる。【知識・理解】

② 場合の数を、順列、円順列に帰着させて求めることができる。【表現・処理】

(3) 指導の実際

過程	時間	学 習 活 動	指導上の留意点及び評価の観点等
導 入	3 分	<p><b>復習問題</b></p> <p>A, B, C, D の4人が1列に並ぶとき、並び方は何通りあるか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の学習内容を復習する。</li> </ul>
展 開 I	30 分	<p><b>本時の目標</b></p> <p>円順列の総数を求められるようになる。</p> <p><b>例題</b></p> <p>A, B, C, D の4人が円形に並ぶとき、並び方は何通りあるか。</p> <p>(1) 考えつく並び方をすべて挙げてみる。</p> <p>(2) 適当に回転して並びが同じになるものは同じ並び方であるとする、並び方は何通りかを求める。</p> <p>(3) (1), (2)からわかることを書く。</p> <p>・考察の結果を一般化する。</p> <p>異なる <math>n</math> 個のものの円順列の総数は</p> $\frac{{}_n P_n}{n} = \frac{n!}{n} = (n-1)!$ <p>・教科書 p.29 <b>問 23</b> を解く。</p> <p>6人の人が円卓につくとき、何通りの座り方があるか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒板左上に示す。</li> <li>・この例題を用いて、円順列の公式を導出する。</li> <li>・ワークシートを配布し、考え付く並び方を書き出させる。</li> <li>・グループに分かれて話し合いをさせる。</li> <li>・どのように答えを導き出したのかを生徒に発表させる。</li> <li>・(1)の場合の数を重複度で割れば(2)の場合の数になることを確認する。</li> <li>・グループを解体して、各自ノートにまとめさせる。</li> <li>・机間指導をして、早く解けた生徒の中から1名指名し、板書および説明をさせる。</li> <li>・円順列の公式を理解し、利用することができるか。【知識・理解】</li> </ul>

展開Ⅱ	15分	<p>・応用問題を解く。</p> <p><b>問題1</b></p> <p>A, B, C, Dの4人が手をつないで輪を作るとき、AとBが隣り合う並び方は何通りあるか。</p> <p><b>問題2</b></p> <p>異なる6個の宝石で首飾りを作るとき、何種類の首飾りができるか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・隣り合うA, Bを1つのものとみなすことを確認する。</li> <li>・教科書 p.28での学習内容を応用できているかどうかを見る。</li> <li>・数珠順列の考え方を、生徒から引き出す(回転または裏返して一致するものは同じものとみる)。</li> <li>・机間指導をして、早く解けた生徒の中から2名指名し、板書および説明をさせる。</li> <li>・場合の数を、順列、円順列に帰着させて求めることができるか。【表現・処理】</li> </ul>
まとめ	2分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・円順列の公式とその利用法について確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書 p.29で用語および公式の確認をする。</li> <li>・次時は教科書 p.30の重複順列について学習することを伝える。</li> </ul>

## 6 評価

- (1) 円順列の公式を理解し、利用することができたか。【知識・理解】
- (2) 場合の数を、順列、円順列に帰着させて求めることができたか。【表現・処理】

# 保健体育科学習指導案

期 日	平成26年6月19日（木曜日）4校時
場 所	鹿児島県立松陽高等学校 グラウンド （雨天時 体育館）
対 象	2年1組・4組 陸上競技選択者 （男子19名 女子5名 計24名）
指導教諭	吉 浦 知 子
授 業 者	須 貝 佳 奈 子

## 1 単元名 陸上競技（ハードル走）

## 2 単元について

### （1）系統性について

陸上競技は「走る」「跳ぶ」「投げる」の運動で構成されている。競走に属するハードル走は、小学校段階では、低学年で「走・跳の運動遊び」、中学年で「走・跳の運動」、高学年で「陸上運動」を領域とし、それぞれ「走の運動遊び」「小型ハードル」「ハードル走」という内容で扱われている。そして、小・中学校の内容を踏まえて、高等学校においては、ハードル特有の技能を身に付け、スピードを維持した走りから低くリズムカルに越えることで記録の向上や競争の楽しさや喜びを味わい、生涯にわたって継続して取り組める系統性をもって取り扱われている。

### （2）教材について

陸上競技は「走る」「跳ぶ」「投げる」などの運動で構成され、記録に挑戦したり、相手と競争したりする楽しさや喜びを味わうことをねらいとしている。中学校では陸上競技に求められる基本的な動きや効率のよい動きを発展させて、各種特有の技能を身に付けることができるようにすることをねらいとして、第1学年及び第2学年は、「基本的な動きや効率のよい動きを身に付けること」を、第3学年は「各種特有の技能を身に付ける」ことを学習している。高等学校ではこれまでの学習を踏まえて「各種特有の技能を高める」ことが求められている。

したがって、記録の向上や競争の楽しさや喜びを深く味わい、陸上競技の学習に主体的に取り組む、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たすことなどに意欲を持ち、健康安全を確保するとともに、技術の名称や行い方、課題解決の方法等を理解し、自己や仲間の課題に応じた取り組み方を工夫できるようにする。

ハードル走は、スピードに乗って走りながら一定の距離に置かれたハードルをリズムカルに走り越えていく速さを競う種目である。短距離走の能力によって記録が左右されるほか、スピードを維持した素早いハードリングや3歩のリズムを維持したインターバルを身に付けることで記録が短縮できる種目である。また、ハードルをリズムカルに連続的に走り越えるところに楽しさがある。

### (3) 生徒の実態

2年1組・4組の陸上選択者は、体育コース生2名（うち1名陸上部）を中心に、その他の生徒も活発で元気があり、体育の授業に積極的に取り組む生徒が多い。また、事前に実態調査を行った結果、小・中学校でハードル走を経験している生徒が66%、高校1年で経験している生徒が16%おり、「跳べたら楽しい」、「スピードがあると格好いい」等のイメージを持っている。一方で「ひっかかると痛い」「怖い」「難しい」等のマイナスのイメージも同時に抱いている生徒が8割以上いる。また、授業を通して学びたいこととして、「ハードル間を3歩のリズムで走れるようになりたい」、「友達と協力して教え合ったりしたい」、「自分の目標記録に挑戦したい」など、高い意識や目標をもって授業に取り組もうとする姿勢がみられる。

### (4) 指導にあたって

本単元では、互いの動きを確認しあったり教え合ったりしながら、個々の目標タイムを目指して運動に取り組み、その中でリズムカルにハードルを走り越える楽しさを味わえるようにする。

ア ハードリングの基本動作を毎時間繰り返し行うことで基礎的な技能を確実に身に付けることができるようにする

イ 能力に応じたハードルの高さやインターバルを設定し、個々にあった場を選択して練習できるようにして、3歩のリズムで走れる楽しさを味わえるようにする。

## 3 単元の目標

- (1) 記録の向上や競争の楽しさや喜びを味わい、スピードを維持した走りからハードルを低くリズムカルに越すことができるようにする。
- (2) 主体的に取り組むとともに、勝敗を冷静に受け止め、ルールやマナーを大切にしようとする事と、健康・安全を確保することができるようにする。
- (3) ハードリングのポイントや課題解決の方法、競技会の仕方などを理解し、自己や仲間の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

## 4 単元の評価規準

### (1) 内容のまとめりごとの評価規準

運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
陸上競技の楽しさや喜びを味わうことができるよう、勝敗等を冷静に受け止め、ルールやマナーを大切にしようとする事、自己の責任を果たそうとする事などや、健康・安全を確保して学習に主体的に取り組もうとしている。	生涯にわたって陸上競技を豊かに実践するための自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫している。	陸上競技の特性に応じた、各種特有の技能を身に付けている。	技術の名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、競技会の仕方等を理解している。



(2) 単元の評価規準

運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>・陸上競技の学習に主体的に取り組もうとしている。</li> <li>・勝敗などを冷静に受け止め、ルールやマナーを大切にしようとしている。</li> <li>・自己の責任を果たそうとしている。</li> <li>・互いに助け合い高め合おうとしている</li> <li>・健康安全を確保している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己の課題に応じた運動の行い方の改善すべきポイントを見つけている。</li> <li>・自己の課題に応じて適切な練習方法を選んでいる。</li> <li>・仲間に技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。</li> <li>・健康安全を確保するために体調に応じて適切な練習方法を選んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スピードを維持した走りからハードルを低くリズムカルに越すことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術の名称や行い方について学習した具体例を挙げている。</li> <li>・陸上競技に関連した体力の高め方について学習した具体例を挙げている。</li> <li>・課題解決の方法について理解したことを言ったり書き出したりしている。</li> <li>・競技会の仕方について、学習した具体例を挙げている。</li> </ul>

(3) 学習活動に即した評価規準

運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>①ハードル走の学習に主体的に取り組もうとしている。</li> <li>②勝敗等を冷静に受け止めルールやマナーを大切にしようとしている。</li> <li>③練習や記録会で自己の責任を果たそうとしている。</li> <li>④課題解決に向けてお互いに助け合い高め合おうとしている。</li> <li>⑤けがを防ぐために健康・安全を確保しようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①自己の課題に応じたハードル走の行い方の改善すべきポイントを見つけている。</li> <li>②自己の課題に応じて適切な練習方法を選んでいる。</li> <li>③仲間に技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。</li> <li>④健康安全を確保するために体調に応じて適切な練習方法を選んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①なるべく遠くから踏み切りハードルの近くに着地することができる。</li> <li>②スピードを維持したまま1台目のハードルを走り越えることができる。</li> <li>③3歩のリズムでハードル間をリズムよく走ることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①技術の名称や記録の向上につながる動きのポイントについて学習した具体例を挙げている。</li> <li>②運動観察の方法について理解したことを言ったり書きだしたりしている。</li> <li>③記録会の行い方について学習した具体例を挙げている。</li> </ul>

## 5 単元の指導計画と評価計画（全10時間）

時間	ねらい ・ 学習活動	学習活動に即した 評価規準			
		関 心 意 欲 態 度	思 考 判 断	技 能	知 識 理 解
はじめ	1 ・ 2 ○オリエンテーション ・学習のねらいを理解し、学習の進め方について知る ・50mハードル走を計測し、自分の現在の力を知る	③			
なか か ー	ねらい1 ハードル走の基礎的な技能を身に付け,互いに協力しながら練習に取り組もう  ・ハードリングの基本動作を練習する ・自分にあったインターバルを見つける				①
			③		②
		⑤	②		
なか か ー 本 時 ・ 9	ねらい2 自己の記録の伸びを目指しながら、ハードルをリズムカルに走り越えることができるようにしよう  ・スピードによって1台目のハードルを越える ・遠くから踏み切る ・インターバルを3歩のリズムで走る		①	①	
			④	②	
		④		③	
		①		③	
まとめ	10 ○学習のまとめ・記録会 自分にあった場で記録に挑戦したり,仲間と競争したりする	②			③

## 6 本時について (8時間目)

### (1) 本時の目標

- ア 互いに教え合ったりしながら、課題解決に取り組むことができる
- イ インターバルを3歩でリズムカルに走ることができる
- ウ 場や用具の安全に留意して運動することができる

### (2) 教材 フレキハードル、青ハードル、黄ハードル、マーカー、学習カード

### (3) 本時の実際 (8時間目/10時間)

段階	時間	学習活動と内容	教師の支援・指導	評価の観点
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇挨拶, 出席確認</li> <li>◇ラジオ体操, ストレッチ</li> <li>◇本時の学習内容を理解する &lt;学習カード配布 → 回収&gt;</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇学習カードを使い本時の授業の流れを確認させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○服装や姿勢がしっかりできていたか</li> </ul>
展開	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇基本動作ドリルを行う 黄ハードル5台使用(距離3足長)  <ul style="list-style-type: none"> <li>・横向きもも上げ</li> <li>・ツースキップで横向きもも上げ</li> <li>・抜き足歩行</li> <li>・リード足歩行</li> <li>・抜き足+リード足 (ゆっくり, スピード)</li> </ul> </li> <li>各種片道1本ずつ → 走り抜ける</li> <li>◇その場リズムドリルを行う  <ul style="list-style-type: none"> <li>・着地も含めた4歩のリズムドリルをその場で行い, 次に歩行で行う  <ul style="list-style-type: none"> <li>・もも上げ+腕振り</li> <li>・リード足にタッチ</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>◇模範演技 陸上部員に模範演技をしてもらう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇正しい姿勢で行えるよう助言する</li> <li>◇上手くいかない生徒へ適切な支援を行う &lt;ポイント&gt;  <ul style="list-style-type: none"> <li>・腰を高く, 視線は前にする</li> <li>・抜き足は膝を高く, つま先を上げる</li> <li>・ハードルを越えた後も走り抜ける</li> </ul> </li> <li>◇記録の向上には, ハードリングだけでなくインターバルのリズムカルな走りが大切なことを理解させる &lt;助言1&gt;  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">「タン・タン・タ・ターン」のリズムを覚えよう</div> &lt;助言2&gt;  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">「ターン」でリード足にタッチしよう</div> <li>◇集団の場所を移動し横から陸上部員の模範演技を見せ, 演技後は賞賛を促す &lt;助言1&gt;  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">インターバルのリズムに注目しよう</div> </li></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○正しい姿勢でできていたか</li> <li>○リズムを意識しながらきちんと跳べていたか</li> <li>○走者のリズムがどういったリズムになっているか関心をもちながらみるできているか</li> </ul>

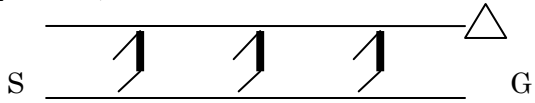
10分	<p>◇スタンディングスタートから2台目まで練習する        &lt;場の設定は下図参照&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時までの確認</li> <li>・踏み切り足の位置にマーカを置く（振り上げ足の長さ基準）</li> <li>・3台目のハードルは倒しておく</li> <li>・リズムカルに跳べる場合は、3台目も跳ぶ</li> </ul>	<p>◇踏み切りが近い→高く跳び上がる（「ターン」の音が長い）→ドスンと落ちてスムーズに走れない→タイムが遅くなることを理解させる</p> <p>&lt;助言&gt;</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最後の「タ・ターン」のリズムをテンポアップしよう</li> <li>・少し上体を前傾させてみよう</li> </ul> </div> <p>&lt;予想されるつまずき&gt;        恐怖心がある生徒</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハードルの高さを変えてみよう</li> <li>・フレキハードルを使ってみよう</li> </ul> </div> <p>&lt;リズムカルに跳べている場合&gt;</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インターバルや高さを変えたり、ハードルを1台増やす</p> </div>	<p>○自分がリズムよく跳べるインターバルや高さを調整したりして場を工夫しながら練習できているか</p>
10分	<p>◇学習カード配布</p> <p>◇ハードル3台に挑戦する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コースの説明</li> <li>・2本ずつで走者と観察者を交代（観察側がカード持つ）</li> <li>・パートナーは走者の支援をする           <ul style="list-style-type: none"> <li>・手拍子をする</li> <li>・声を出す</li> </ul>           「タン・タン・タ・ターン」         </li> </ul>	<p>◇学習カードを使い、観察の時に友達の走りを記録する</p> <p>◇能力に応じたインターバルを選択し、リズムを意識しながら練習するよう促す</p> <p>&lt;走者のポイント&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・遠くから踏み切る</li> <li>・リズムを意識する</li> <li>・最後のハードルを越えた後もしっかりコーンまで走り抜ける</li> </ul> <p>&lt;パートナーのポイント&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・踏み切りの位置を確認する</li> <li>・しっかりリズムを刻む</li> </ul> <p>&lt;予想されるつまずき&gt;        コース選択を迷っている生徒</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>一番低いコースから跳んでみよう</p> </div> <p>&lt;予想されるつまずき&gt;        踏み切りが近く高く跳んでいる生徒</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ワンランク上のインターバルに挑戦しよう</p> </div>	<p>《評価規準》        ④関心・意欲・態度        課題解決に向けてお互いに助け合い高め合おうとしている</p> <p>《評価方法》 観察</p> <p>○場の安全に留意しながら練習しているか</p>

10分	◇本時の目標を達成するように5コース同時に走る ・観察者は走者の評価をする  ◇本時の振り返り	◇リズムカルに走るように促す (タイムは測定しない)  ◇学習カードをつかって本時の学習を振り返らせ,成果を確認する	≪評価規準≫③技能 3歩のリズムでインターバルを走ることができる ≪評価方法≫ 学習カード  ○本時の成果と次の課題が明確にできたか
まとめ	◇整理運動 ◇次時の予告をする 次時：ハードル5台に挑戦しよう  ◇挨拶	◇使用した部位を意識して伸ばす ◇次時の学習に見通しをもつことができるようにする。	○服装や姿勢がしっかりとできていたか

### 【場の設定】

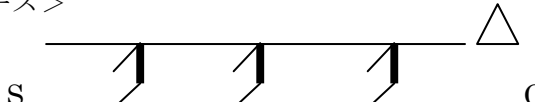
○全40メートル  
 ○スタートから第1ハードルまで8m  
 ○インターバルは下の5コースもうける

<6. 5mコース>



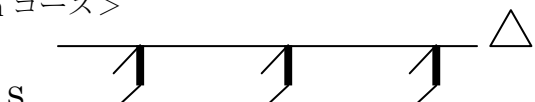
○観察生徒

<7mコース>



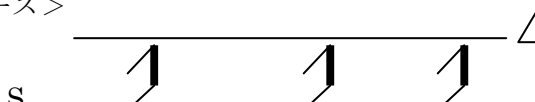
○観察生徒

<7. 5mコース>



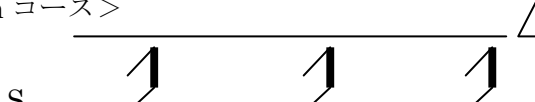
○観察生徒

<8mコース>



○観察生徒

<8. 5mコース>



○観察生徒

【本時の学習カード】

( 6 ) 月 ( 19 ) 日 ( 木 ) 曜日

**インターバル(ハードル間)を3歩でリズムカルに走ろう**

友達の走りを横から観察しながら手拍子などでリズムを刻む → カードに記入 → 2本走り終わるごとにペアと交代する

タン・タン・タ・ターン

ペアからの評価 (※ペアに記入してもらう)

	1回目		2回目		3回目		4回目		5回目		※1回につき2本走る
試したコース (インターバルの距離)	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	
リズムカルに走っているか											
踏み切り位置はどうか											
友達へのアドバイスなど											

評価の記入方法

○	踏み切り位置から跳んでいる
△	踏み切り位置より近い

○	3歩でリズムカルに走っている
△	最後のタ・ターンのリズムが長くなっている (タ・ターーン)

本時の振り返り (自己評価)	よくできた	まあまあできた	ふつう	あまりできなかった	できなかった
1 意欲を持って活動し、ハードル走を楽しめたか	5	4	3	2	1
2 互いに協力して活動できたか	5	4	3	2	1
3 自己の課題や目標を意識して活動できたか	5	4	3	2	1
4 安全に留意して活動できたか	5	4	3	2	1
5 3歩でリズムカルに走ることができたか	5	4	3	2	1
6 感想など					

# 保健体育科（保健）学習指導案

期 日	平成26年12月19日（金曜日）4校時
場 所	鹿児島県立松陽高等学校 1年8組教室
対 象	美 術 科 1 年 8 組 (男子7名, 女子33名 計40名)
指導教諭	吉 浦 知 子
指 導 者	須 貝 佳 奈 子

## 1 単元名 (1) 現代社会と健康 ウ 精神の健康 ( ストレスへの対処 )

### 2 単元について

#### (1) 系統性

保健学習は、小学校3年生から始まり、高等学校の2年生まで9年間にわたって継続的に行われている。本単元で取り扱う「ウ 精神の健康」は、小学校5年生で「(1) 心の健康 ウ 不安や悩みへの対処」、中学校1年生で「(1) 心身の機能の発達と心の健康 エ 欲求やストレスへの対処と心の健康」という内容で取り扱われている。そして、小中学校の内容を踏まえて、高等学校では「心の健康に関する内容」の最終段階として、精神の健康を保持増進するには、欲求やストレスに適切に対処し自己実現を図る努力が重要であることを目指し、構成されている。

#### (2) 教材について

ストレスとは外界からの様々な刺激に対する防衛反応であり、心身に負担がかかった状態を意味する。現代社会におけるストレスは、物理的要因、心理的要因、社会的要因など多岐多様にわたり、それらは複雑に絡み合っており、私たちが取り囲んでいる。高校生の時期も進路や勉強、友人関係など様々な出来事がストレスとなり、それらを回避して生活することは困難である。生徒各々が自身のストレス反応に気づき、その軽減のための対処法を身に付けていくことは、様々な問題を未然に防ぎ、日々の学校生活をより充実させることにつながっていく。また、人が生きていく上で、ストレスを感じることは自然なことであり、適度なストレスは精神発達に必要なものである。しかし、過度のストレスは心身に好ましくない影響をもたらすことから、自分なりのストレス対処法を身に付けることが精神の健康のために大切であることを理解できるようにする。

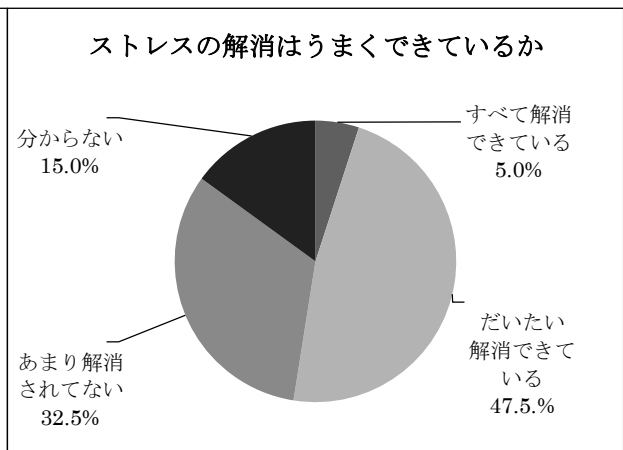
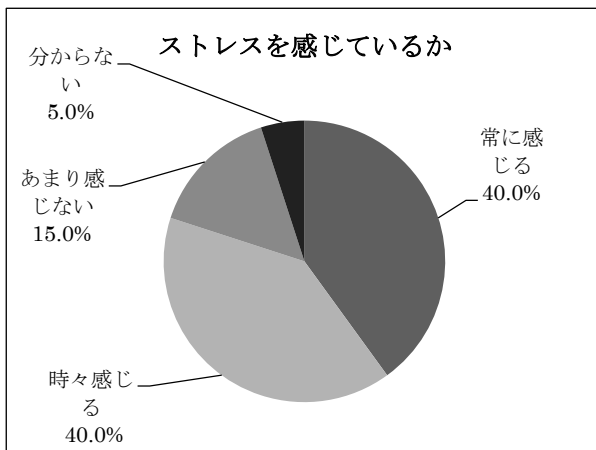
#### (3) 生徒の実態

落ち着いた雰囲気の中で授業に取り組み、学習態度はとても良好である。教師の発問に対して、率先して自ら発言する生徒に限られる傾向にあるが、グループ活動になると一人一人が積極的に参加し発言することができる。ストレスについては、クラスの約8割の生徒が「常にストレスを感じる」または「時々ストレスを感じる」と答えている。一方で「あまり感じない」または「分からない」と答えている生徒も2割いることから、ストレス状態にあっても、自分自身でそれに気づかずに生活している生徒もいるのではないかと考えられる。

以下、生徒に行ったアンケート結果である。

《アンケート》

<p>1 現在あなたの心と体の調子はどうですか。</p> <p>①心身ともに健康 ②体の調子はよいが精神的に不調 ③精神的にはよいが体が不調 ④心身ともに調子が悪い ⑤分からない</p>	<p>①32.5% (13名) ②30.0% (12名) ③ 2.5% (1名) ④17.5% (7名) ⑤17.5% (7名)</p>
<p>2 あなたは日頃ストレス（不安やゆううつ，イライラ，無気力など）を感じていますか。</p> <p>①常にストレスを感じる ②時々ストレスを感じる ③あまり感じない ④分からない</p>	<p>①40.0% (16名) ②40.0% (16名) ③15.0% (6名) ④ 5.0% (2名)</p>
<p>3 ストレスの解消はうまくできていると思いますか。</p> <p>①すべて解消できている ②だいたい解消できている ③あまり解消されていない ④分からない</p>	<p>① 5.0% (2名) ②47.5% (19名) ③32.5% (13名) ④15.0% (6名)</p>
<p>4 ストレスとその対処法について学ぶことは自分の生活に関係があると思いますか。</p> <p>①とてもある ②少しある ③あまりない ④全くない</p>	<p>①60.0% (24名) ②25.0% (10名) ③10.0% (4名) ④ 5.0% (2名)</p>



(4) 指導にあたって

本時では、ストレスの意味やその対処法を知り、自分なりのストレス対処法を見つけることが心の健康のために大切であることを理解し、友達の意見も参考にしながら、自分なりの対処法を考えさせたい。その際、付箋紙を使ったブレインストーミングを行い、班の中で自分の考えを発言したり、他の人の考えを知ったりして、一人一人の生徒が意欲的に授業に参加できるようにする。その中でたくさんのストレス対処法があることに気づき、自分なりの対処法を実生活に取り入れていくことができる態度を育成したい。



### 3 単元及び学習活動に即した評価規準

#### (1) 内容のまとめりごとの評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
現代社会と健康について、健康を保持増進するためには、自らの健康を適切に管理すること及び環境を改善していくことが重要であることに関心をもち、学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	現代社会と健康について、健康を保持増進するための課題の解決を目指して、知識を活用した学習活動などにより、総合的に考え、判断し、それらを表している。	現代社会と健康について、健康を保持増進するための課題の解決に役立つ自らの健康を適切に管理すること及び環境を改善していくための基礎的な事項を理解している。

#### (2) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
欲求と適応機制、心身の相関、ストレスへの対処、自己実現について、資料を見たり読んだりするなどの学習活動や課題の解決に向けての話し合いや意見交換などの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	欲求と適応機制、心身の相関、ストレスへの対処、自己実現について、資料等で調べたことを基に整理したり、自分の考えを導き出したりして、それらを説明している。また、学習したことを個人及び社会生活や事例と比較したり、評価したりするなどしている。	人間の欲求と適応機制には様々な種類があること、精神と身体には、密接な関連があること、精神の健康を保持増進するには欲求やストレスに適切に対処するとともに、自己実現への努力が重要であることについて、理解したことを発言したり、記述したりしている。

#### (3) 学習活動に即した評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
①欲求と適応機制について、話し合いなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	①欲求と適応機制について、日常生活の事例と比較したり評価したりするなどしている。	①人間の欲求や適応機制には様々な種類があり、その具体例を書き出している。
②心身の相関やストレスについて、話し合いなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	②心身の相関やストレスについて、日常生活の事例と比較したり評価したりするなどしている。	②精神と身体には、密接な関連があり、適度なストレスは精神発達上必要なものであることについて理解したことを記述している。
③ストレスの対処法について、話し合いなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	③ストレスへの適切な対処について、仲間との意見交換をもとに自分の考えを導きだしたりして、選択すべき行動を判断している。	③自分なりのストレス対処法を身に付けることが心の健康のために重要であることについて、理解したことを記述している。
④自己実現に向けた道筋について、ワークシートに記録するなどして学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	④自己実現への道筋について、自分の考えを導き出したりして、選択すべき行動を判断している。	④自己実現の欲求の充足が精神の健康と深く関わっていることについて、理解したことを記述している。

#### 4 指導と評価の計画

時間	小単元	ねらい・学習活動	評価規準			評価方法
			関心 意欲 態度	思考 判断	知識 理解	
1	欲求と適応機制	<p>人間には様々な欲求があり、欲求が満たされない時は様々な適応機制が働き、精神の安定を図ろうとすることを理解できるようにする。</p> <p>&lt;学習活動&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の欲求を一次的欲求と二次的欲求に分類し、脳の働きについて理解する。</li> <li>日常生活を振り返り、どのような時にどのような適応機制を使ったか、グループで意見交換する。</li> <li>精神の安定を図ろうとする適応機制の働きを理解する。</li> </ul>	①	①	①	観察 ・ ノート
2	心身の相関とストレス	<p>心身相関の仕組みとストレスについて知り、ストレスに適切に対処することが心の健康のために重要であることを理解できるようにする。</p> <p>&lt;学習活動&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日常生活を振り返り、ストレスを感じたときの心身の変化と行動についてグループで意見交換し、発表する。</li> <li>心身相関の仕組みとストレスについて理解する。</li> </ul>	②	②	②	観察 ・ ノート
3 【本時】	ストレスへの対処	<p>様々なストレスへの対処法を知り、自分なりのストレス対処法を考えることができるようにする。</p> <p>&lt;学習活動&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ストレスへの対処法は、原因への対処法、とらえ方を変える対処法、気分転換、信頼できる人や専門家への相談があることを理解する。</li> <li>ストレスを抱えた事例の対処法についてグループで話し合う。</li> <li>自分なりのストレス対処法を考える。</li> </ul>	③	③	③	観察 ・ ワークシート
4	自己実現	<p>自己実現と心の健康について理解し、実際に自己実現をはかるための計画を考えることができるようにする。</p> <p>&lt;学習活動&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自己実現と心の健康について理解する。</li> <li>自分が実現したいこと、そのために必要となることや行動すべきことをワークシートにまとめる。</li> </ul>	④	④	④	ワークシート

## 5 本時について

### (1) 本時の目標

- ア 話し合いや意見交換などの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。(関心・意欲・態度)
- イ ストレスへの適切な対処の仕方を考えることができる。(思考・判断)
- ウ ストレスへの適切な対処の仕方には色々な方法があり、自分なりの対処法を身に付けることが心の健康のために大切であることを理解できる。(知識・理解)

### (2) 教材

現代高等保健体育 (大修館), 現代高等保健体育ノート (大修館), ワークシート, グループ用ワークシート, 付箋紙, マジック

### (3) 本時の実際

段階	時間	学習活動	教師の支援・指導	形態	評価の観点
導入	15分	1 挨拶をする。 2 前時の復習と本時ねらいを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">             &lt;ねらい&gt;              様々なストレスへの対処法を知り,自分なりのストレス対処法を考えよう。           </div> 3 ストレスの対処法には大きく分けて次の4つがあることを知る。 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">             ①原因への対処              ②とらえ方を変える              ③気分転換              ④専門家への相談           </div>	○前時で学習したストレスについて説明し,前時の活動を振り返らせる。 ・ストレスとは何か。 ・適度なストレスは精神的な発達のために役立つこと。 ・事前調査をもとに主なストレスサーを紹介し,誰でも不安や悩み,イライラなどのストレスを抱えている人が多いことを知らせる。 ○教科書を使い,ストレス対処法について板書しながら説明する。	一斉	

展開 1	25 分	<p>4 ストレスを抱えて生活している事例について、対処法を考える。</p> <div data-bbox="312 248 687 490" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>&lt;事例&gt; 期末テストに向けて勉強をしなければならぬが、最近授業が全く分からず、勉強に行き詰まってしまった。</p> </div> <p>(1) 個々で具体的な対処法を考え付箋紙に書き出す。</p> <p>(2) グループでブレインストーミングを行い、個々で考えた対処法が①～④の対処法のどれに当てはまるか、付箋紙を分類しながら意見交換する。</p> <p>(3) ブレインストーミングで出てきた対処法の中からおすすめの手紙法を決めて、用紙に記入して黒板に掲示する。</p>	<p>○事例を書いた用紙を提示する。</p> <div data-bbox="715 174 1090 409" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>&lt;発問&gt; こんな時あなただったらストレスを小さくするためにどのようなことを考えたり行ったりしますか？</p> </div> <p>○ストレスが「勉強」であることを確認させる。</p> <p>○付箋紙を配布し、個々で考えさせる。</p> <p>○活動時間を明示する。</p> <p>○グループ活動では友達の意見に対して否定をしないという約束事を確認する。</p> <p>○グループをつくらせ、グループ用ワークシートを配布する。</p> <p>○個々が考えた対処法をブレインストーミングで挙げながら、①～④の対処法に分類させる。</p> <p>○机間巡視を行い、スムーズな話し合いを促す。</p> <p>○マジックと掲示用の用紙を配布し、グループで考えたおすすめ対処法を記入させ、掲示させる。</p> <p>○①～④の対処法それぞれに対して具体的な対処を1つずつ決めさせるが、①～④すべてに対して具体例が挙げらなくても良い。</p>	<p>班別</p> <p>《評価の観点》 【関心・意欲・態度】 ③ストレスの対処法について、話し合いなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。 (観察)</p>

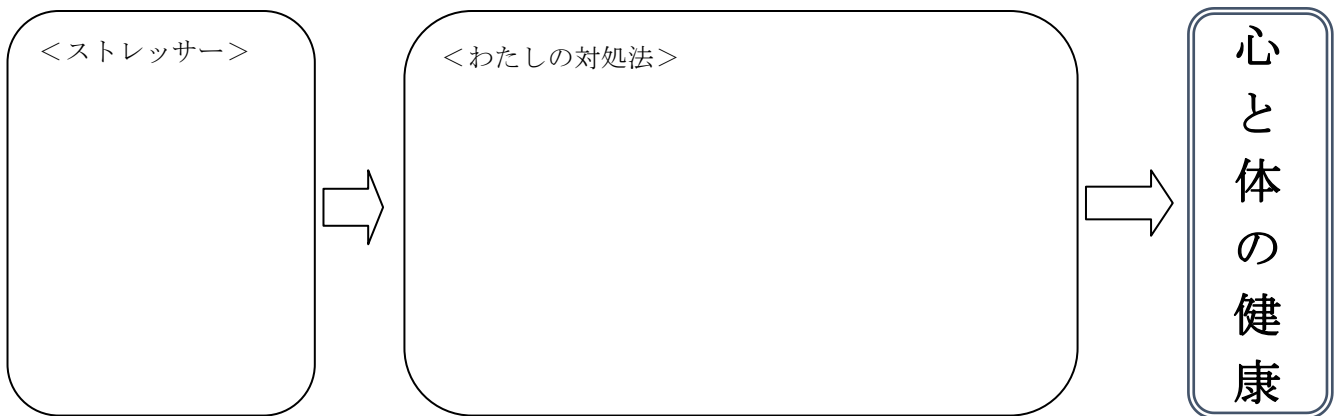
展開Ⅱ	5分	<p>5 ストレスの対処法について説明を聞く。</p>	<p>○活動に対して賞賛する。</p> <p>○グループから出された対処法をもとに、適応機制や心身関連の項と関連づけてストレスへの対処法について説明する。</p> <p>○好ましくない対処法についても説明する。</p> <p>①やっちはいけない対処法 (人や物を傷つける、ネットで誹謗中傷する、など)</p> <p>②やりすぎるとダメな対処法 (お菓子をたくさん食べる、ゲームをするなど)</p> <p>○ストレスへの対処法は様々なことに気づかせ、自分なりの対処方法を身に付けることの大切さを理解させる。</p>	一斉	<p>《評価の観点》</p> <p>【知識・理解】</p> <p>③自分なりのストレス対処法を身に付けることが心の健康のために重要であることについて、理解したことを記述している。 (ワークシート)</p>
まとめ	5分	<p>6 自分なりの対処法をワークシートに記入する。</p> <p>7 次時の学習内容を確認する。 「心の健康と自己実現」</p> <p>8 挨拶をする。</p>	<p>○ワークシートを配布する。</p> <p>○友達の考えを取り入れながら、自分なりの対処法を考えさせる。</p> <p>○机間巡視を行う。</p> <p>○ワークシートを回収する。</p>	一斉	<p>《評価の観点》</p> <p>【思考・判断】</p> <p>③ストレスへの適切な対処について、仲間との意見交換をもとに自分の考えを導きだしたりして、選択すべき行動を判断している。 (ワークシート)</p>

# ストレスへの対処法

( ) 番 名前 ( )

様々なストレスへの対処法を知り，自分なりのストレス対処法を考えよう。

- 1 今日の学習を終えて，これからストレスに対してどのように対処していきたいと思いませんか。みんなの意見を参考にして，自分なりのストレス対処法を記入しよう。



- 2 今日の授業（活動）を振り返って，学んだことや感想を書いてください。

A large, empty rounded rectangular box with a dashed border, intended for students to write their reflections on the lesson and their feelings.

# LHR 学習指導案

学 校 名：鹿児島県立松陽高等学校  
日 時：平成 26 年 12 月 10 日（水）第 7 校時  
対象学級：1 年 5 組（男子 17 人，女子 19 人）  
場 所：1 年 5 組教室  
授 業 者：福山 健太郎  
指 導 者：永田 裕子

## 1 題材名 「自他尊重の表現方法を身につける」

### 2 主題設定の理由

高校生にとって、お互いを尊重しながら自分の思いや考えを相手に適切に伝えるということは、社会的なスキルを高め、自己実現や社会的自立を図る上でとても重要である。対人関係における自己の表現のタイプを把握しアサーションを学ぶことで、自分の考えや気持ちを率直に表現するスキルが身につくだけでなく、自己理解・他者理解が深まり、自他尊重の精神が醸成され、より良い人間関係を育むことができる。また、ロールプレイを通して自己表現能力を高めるだけでなく体験的に学習することで、お互いを大切にする人権感覚を高め、この経験を今後の生活の中で生かし、豊かな人間関係を築いてほしいと考え、本主題を設定した。

### 3 生徒の実態

1 年普通科のクラスである。9 月の進路希望調査では、国公立 4 年制大学への進学希望者は 21 人であり、4 月の進路希望調査の結果と比較して 4 人増加している。授業の態度は概ね良好であり、クラス全体への発問時には、自ら考え答えようとし、積極性を見せる生徒が多い。また、机間指導時には積極的に質問をしたり、授業後に質問をしたりする生徒もいる一方で、あまり自己主張をせず消極的な態度の生徒もいる。

クラス全体としては、活発な生徒とおとなしい生徒がおおよそ半数ずつおり、仲の良いグループで活動したり、特定の生徒と話したりすることに関しては特に問題はないが、普段あまり関わりをもたない人とのコミュニケーションの取り方を苦手とする生徒は多く、時には自分本位な発言をしてしまう生徒もいる。

### 4 指導観

今回の授業では身近な場면을例に挙げ、生徒が自分のこととして捉えやすいように題材を設定した。指導にあたっては、アサーティブなコミュニケーションの考え方にに基づき、ロールプレイによる自己表現の練習を行うことで、知識としての理解だけでなく体験的な学習を通して人権感覚を高め、人間関係形成能力の育成を目指したい。

### 5 本時の目標

- (1) ロールプレイングを通して、アサーション・トレーニングの「3つの表現方法」を体験的に理解する。
- (2) 「自他尊重」の表現方法を理解し、今後の生活に生かす契機とする。

## 6 本時の指導計画

過程	学習活動	指導上の留意点	評価の観点等
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料1の説明を聞く。</li> <li>資料1を読んで、自分ならどのように言うかを考え、回答欄に記入する。</li> <li>本時のねらいを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な題材を取り上げることで、生徒の興味・関心を高める。</li> <li>率直に考えた表現を記入させる。</li> <li>目的を明確かつ簡潔に伝える。</li> </ul>	
展開Ⅰ 15分	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料2を用いて「アサーションチェック」をする。</li> <li>「3つの表現方法」について確認する。               <ol style="list-style-type: none"> <li>受身的・非主張的な自己表現</li> <li>攻撃的な自己表現</li> <li>アサーティブな自己表現</li> </ol> </li> <li>資料1で回答した表現が、①～③のどれに該当するかを確認する。</li> <li>③の表現方法が快いことを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の自己理解を促す。</li> <li>自分のタイプを認識させる。</li> <li>3つの方法で自己表現したときの気持ちを考えさせる。</li> <li>3つの表現のそれぞれに該当した生徒に発表させる。</li> </ul>	【知識・理解】
展開Ⅱ 20分	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料3 または 資料4を用いてロールプレイを行う。</li> <li>(1) 3つの表現方法例をロールプレイングする。</li> <li>(2) どのように感じたか、お互いに感想を述べ合う。</li> <li>(3) 感想を発表する。</li> <li>(4)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>隣の人と3つの表現方法をシナリオ通りに演じさせる。</li> <li>何組かの生徒に発表させる。</li> </ul>	【知識・理解】
終末 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料5を用いて本時の活動を振り返る。</li> <li>(1) 振り返りシートに記入する。</li> <li>(2) 本時の感想を発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>状況に応じて適した対応が変わることを理解させ、今後の生活の中で生かせるよう指導する。</li> </ul>	【関心・意欲・態度】

## 7 評価

(1) ロールプレイングを通して「3つの表現方法」を体験し、理解することができたか。

【知識・理解】

(2) 「自他尊重」の表現方法を理解し、今後の生活の中で生かそうとする姿勢が示せたか。

【知識・理解】【関心・意欲・態度】



# 特別活動（ホームルーム活動）学習指導案

日 時	平成26年11月26日（水曜日）7限
場 所	鹿児島県立松陽高等学校1年7組教室
対 象	音楽科1年7組 （男子3名，女子37名 計40名）
指導教諭	中尾 麻里
授業者	須貝 佳奈子

## 1 主題

「進路について考える」 — 未来の自分のために、今やるべきこと —

## 2 主題設定の理由

選り好みしなければ全員が大学に入学できる大学全入時代を迎え、大学に進学したからといって将来が保障される時代ではなくなった。また、グローバル化や高度情報化など社会は急速な変化を遂げ、将来の見通しが立てにくくなり、現在の高校1年生が大学4年生になる2020年は、東京オリンピックの開催や2020年問題などで、ますます変化の激しい時代が到来されると予想される。将来、進路選択の岐路に立ったときに、環境の変化に対応しながら、よりよい選択を積み重ね自立していくことができるよう、高校3年間で主体的な意志決定のもと自分で進路をつくりあげていく素地を養うことが大切であると考えます。

音楽科1年7組の進路に関する意識は、明確な夢をもっている生徒や漠然としている生徒、将来が全く未定の生徒など様々である。自分の将来における生き方や進路を模索しつつも、多くの生徒は日々の学校生活や時間に追われて、今自分がやるべきことを見失い、学習面や進路に関して具体的な行動を起こせていないことが課題であると思う。

本題材は、音楽科1年7組の進路に関する意識の現状や課題を踏まえ、ホームルーム活動の（3）学習と進路（進路適性の理解と進路情報の活用及び主体的な進路の選択決定と将来設計）を関連させ、上級学校調べを通して、将来を広い視野でとらえさせ、「未来の自分のために、今やるべきこと」を考えさせたい。そして今の自分の生活や取り組みが将来に大きく関わってくることに気づかせ、生活や学習の仕方を工夫改善し、先を見据え、計画的かつ主体的な行動につながる契機となることをねらいとし、本主題を設定した。

## 3 生徒の実態

本時対象の音楽科1年7組は個性豊かな生徒が多く、とても明るい雰囲気のある学級で、部活動などに日々一生懸命取り組む姿勢が見られる。また、進路講演会や上級学校訪問を経験し、少しずつ進路について考える機会が増えている。

進路希望については、次に示す通りである。第1回進路希望調査（4月16日実施）では、国公立大学20名、私立大学17名、短期大学1名、専門学校2名。第2回進路希望調査（9月4日実施）では、国立大学21名、私立大学15名、短期大学1名、専門学校1名、未定2名。今回実施したアンケートでは、国公立15名、私立8名、短大2名、国公立と私立を迷っている生徒10名、未定5名だった。

また、明確な将来の夢を持っている生徒が35%、具体的に決まっていなが音楽に携わる仕事に就きたいと考えている生徒が55%おり、多くの生徒が高い目標を持って入学してきたことがうかがえる。さらに、上級学校で学びたい分野が決まっている生徒は87.5%おり、「高度な専門知識を深く学びたいから」や、「視野を広げ幅広い教養を身に付けたいから」等、進学への目的意識や意欲も高いことがうかがえる。

一方で、将来の夢が未定の生徒は10%、高校卒業後の進路が未定の生徒は12.5%おり、やりたいことが決まらず、自分の進路を迷っている生徒がいることもわかる。

また、進路について考えるときの気持ちについて見ると、学力面や経済的な不安を抱いたり、漠然としたイメージしか持てていなかったり、情報量不足への不安を抱いている生徒がいる。

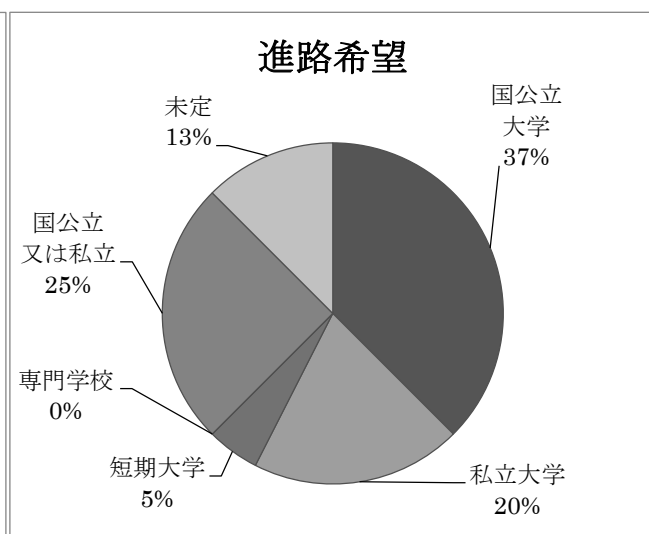
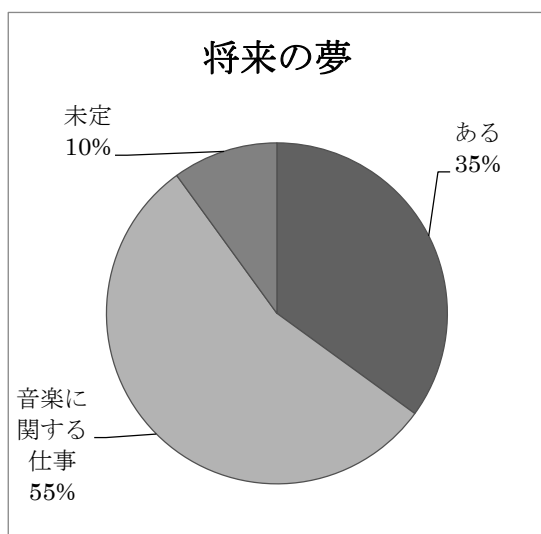
以上のことから、進学への高い意欲をもちながら、同時に、学力の問題や進路の具体的な方向性や志向という本質的な悩みを抱えていることがわかる。また、今の自分の生活や取り組みが将来や進路決定に大きく関わってくることを自覚している生徒は少ないと思われ、部活動や宿題などに追われて、先を見据えた学校生活を過ごすことができていない姿がうかがえる。

以下は生徒に実施したアンケートの結果である。

《アンケート》

<b>1 将来の夢はありますか。</b>	
①ある もしよければ、どんな夢か教えてください	①35.0% (14名) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">           ・演奏家 ・声楽家            ・教師 ・幼稚園教諭            ・オーケストラの一員            ・ミュージカル女優         </div>
②具体的に決まっていなが、音楽に携わる仕事がしたい	②55.0% (22名)
③未定	③10.0% (4名)
④その他	④ 0%
<b>2 高校卒業後、どのような進路を希望していますか。</b>	
①国公立大学	①37.5% (15名)
②私立大学	②20.0% (8名)
③短期大学	③ 5.0% (2名)
④専門学校	④ 0%
⑤国公立大学か私立大学かで迷っている	⑤25.0% (10名)
⑥未定	⑥12.5% (5名)
⑦その他 (留学など)	⑦ 0%
<b>3 上級学校で学びたい学問分野は決まっていますか。</b>	
①音楽系	①70% (28名)
②教育系	②17.5% (7名)
③語学系	③ 0%
④未定	④12.5% (5名)
⑤その他	⑤ 0%

4 上級学校へ進学したいと思う理由は何ですか。(複数選択可)	
①将来の仕事に役立つ高度な専門知識を深く学びたいから	①82.5% (33名)
②視野を広げ、幅広い教養を身に付けたい	②47.5% (19名)
③資格や免許を取得したい	③37.5% (15名)
④進学した方が就職に有利だから	④30.0% (12名)
⑤希望する職業に就くためには、大学卒業資格が必要だから	⑤10.0% (4名)
⑥将来の生き方や職業についてゆっくり考える時間が欲しいから	⑥17.5% (7名)
⑦学生生活を楽しまたいから	⑦25.0% (10名)
⑧周囲の人がみんな進学するから	⑧ 5.0% (2名)
⑨先生や家族が勧めるから	⑨ 5.0% (2名)
⑩その他	⑩ 2.5% (1名) ・習いたい声楽の先生がいる
5 進路について考えるときどんな気持ちですか。(複数選択可)	
①自分の可能性が広がるようで楽しい	①37.5% (15名)
②将来就きたい職業に向けて今努力している	②32.5% (13名)
③学力が足りないかもしれない	③62.5% (25名)
④進みたい上級学校の学費が高い	④45.0% (18名)
⑤具体的な進路をしばりきれない(漠然としている)	⑤45.0% (18名)
⑥やりたいことが見つからない	⑥12.5% (5名)
⑦まだ何も考えていない	⑦ 2.5% (1名)
⑧進路に関する情報が不足している	⑧32.5% (13名)
⑨進路に関する情報の集め方がわからない	⑨12.5% (5名)
⑩その他	⑩ 0%



#### 4 指導にあたって

本主題を扱うにあたり、第1・2時の授業では、上級学校調べを題材にし、進路への興味関心をもち、進路実現に向けて自ら行動に移していくことをねらいとした。本時の授業においては、発表の活動を通して将来を見据えて視野を広げさせ、さらに「今やるべきこと」を考える活動を通して、未来の可能性を支える土台（基礎力）をしっかりとつくり、積み上げていくことの大切さに気づかせ、生活や学習の仕方を工夫改善していくきっかけとしたい。そして進路実現に向けて計画的かつ主体的に行動できる態度を育成できるようにする。

また、上級学校に関する情報を収集整理し、今後も活用できるように冊子としてまとめた。

#### 5 学習指導要領の内容（ホームルーム活動）

ホームルーム活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてホームルームや学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。

##### (3) 学業と進路

- エ 進路適性の理解と進路情報の活用
- カ 主体的な進路の選択決定と将来設計

#### 6 評価の観点

関心・意欲・態度	思考・判断・実践	知識・理解
将来や進路に興味・関心をもち、上級学校調べの発表を意欲的に聞こうとしている。	現在の生活や学習を振り返り、将来に向けて今やるべきことを具体的に考えている。	日々の計画的、継続的な取り組みが進路決定に大きく関わってくることを理解している。

#### 7 指導計画

	主な指導内容
第1時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループごとに調べたい大学を4つ選ばせ、上級学校について調べさせる。 (鹿児島県、九州、関西又は関東の地域から1つずつ選ぶ)</li> <li>・資料やインターネットを用いて各自シートにまとめさせる。</li> <li>・調べた大学の情報をグループ内で共有し、発表する大学を2つに決定させる。</li> <li>・発表に向けた準備を行い、上級学校の情報を冊子にまとめる。</li> </ul>
第2時	<グループ分けについて（進路希望別）> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Aグループ 国立大学音楽系志望者 16名</li> <li>・Bグループ 国立大学教育系志望者 5名</li> <li>・Cグループ 私立大学志望者 7名</li> <li>・Dグループ 私立大学志望者 6名</li> <li>・Eグループ 短大志望者及び未定者 6名</li> </ul>
第3時	本時 未来の自分のために、今やるべきことを考えさせる

## 8 本時について

### (1) 本時のねらい

「今やるべきこと」について考える活動を通して、未来の可能性を支える土台（基礎力）を積み上げていくことの大切さに気づかせ、計画的かつ主体的に取り組む態度を育成する。

### (2) 本時の実際

段階	時間	学習活動と内容	教師の支援・指導（○） 発問（■）助言（◆）	評価の観点
導入	5分	1 挨拶をする。 2 前時の活動の振り返り。 3 本時のねらいを知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">             未来の自分のために、              今やるべきことを考えよう           </div>	○ 始業前に冊子を配布する。 ○ 今までの活動目的を再確認させる。 「上級学校について興味関心を持ち、先を見据え将来のために自ら動き始める」 ○ 本時のねらいを確認させる。 ○ 高校卒業後の選択肢は今まで以上に多様であることに気づかせ、本時のねらいを設定した理由を理解させる。 ■ 県内に高校はいくつある？ ■ 全国に4年生大学はいくつある？ ◆ 「県内高校 93校 → 1校 全国4年制大学 782校 → 1校」 ◆ 「将来を左右する大切な高校生活は残り28ヶ月。時間に追われるだけの毎日から、先を見据えて目的をもった学校生活へ切り替えることが大切」であることを助言する。	
展開I	25分	4 全国にどんな大学があるかを知る。 ・上級学校について調べたことをグループごとに発表する。 （1グループ5分以内）	○ 発表活動を通して視野をさらに広げ、自分の未来について考えることが「今やるべきこと」の一つであることを理解させる。 ○ 事前に役割を決めてグループの代表に発表させる。 ○ 発表を聞くときのポイントを説明する。 ・発表者にしっかり注目する ・もっと知りたいと思ったことや新たな発見などがあれば冊子にメモする。	<b>【関心・意欲・態度】</b> 将来や進路に興味・関心を持ち、上級学校調べの発表を意欲的に聞こうとしている。（観察）

		<p>&lt;発表大学及び順番&gt;</p> <p>①・大分芸術文化短期大学 ・作陽音楽短期大学</p> <p>②・鹿児島国際大学 ・昭和音楽大学</p> <p>③・洗足学園音楽大学 ・国立音楽大学</p> <p>④・広島大学 ・千葉大学</p> <p>⑤・京都市立芸術大学 ・東京芸術大学</p>	<p>◆全グループ発表後に「より具体的に大学を知るための方法としてオープンキャンパスがあり、1年生から参加できること。学校の雰囲気を感じたり授業を体験したりすることで進路選びに役立つ」ことを助言する。</p>	
展 開 Ⅱ	1 5 分	5 本時のねらいを再確認し、「今やるべきこと」を考え、ワークシートに記入する。	<p>○ワークシートを配布する。</p> <p>○「今」は過去の自分が取り組んできたことの結果である。「未来」を左右するのも「今」の自分の取り組み次第である」ことを助言し、本時のねらいをもう一度確認させる。</p> <p>○なるべく具体的に、かつ継続できることを書くように促す。</p>	<p>【思考・判断】</p> <p>現在の生活や学習を振り返り、将来に向けて今やるべきことを考えている。 (ワークシート)</p>
ま と め	5 分	6 教師の話聞く	<p>○先を見据えて計画的に取り組んでいこうとする意欲を高めさせ、行動変容を促すように話をする。</p> <p>・「未来の自分の可能性を支える土台（基礎力）を今しっかりつくること。その積み重ねが未来の自分の可能性を広げることにつながる」ことを助言する。</p>	<p>【知識・理解】</p> <p>日々の計画的、継続的な取り組みが進路決定に大きく関わってくることを理解している。 (ワークシート)</p>
		7 挨拶をする。		

【 ワークシート 】

夢をかたちに — 未来の自分のために「今」やるべきこと —	
漠然としている or ない・・・	ある！
<div style="border: 2px solid black; padding: 5px; font-size: 2em; font-weight: bold; margin: 0 auto;">夢</div>	
「夢や未来はまだ遠いところにある。だから今日という日は大した日でもない。」 な～んて思っていないですか？ 時間だけが経過し、数年後も今とほとんど変わっていない自分・・・。 その未来像・・・あなたが望んでいるものですか？ 夢はあなたが知っているものの中からしか描くことができません。 知識が増えれば見える景色が変わります。夢の選択肢が増えます。可能性が広がります。 具体的な未来を描けるようになるまで、自分の未来を拓くための <b>準備</b> をしておこう！	「いつか〇〇したいなあ～。なれたらいいなあ～。」では、達成できません。 夢を実現するためには、具体的な <b>準備</b> をしていくことが大切です。 チャンスをつかむ人は、そのための準備ができています。 今日やっていることが、数年後の自分をつくります。 夢は、今頑張っているものの延長線上に必ずあります。 未来を意識して今ある課題やするべき行動を整理する。その積み重ねが夢へ導いていく。 そして努力の中から、本物の才能が開花する。
↓	↓
それでは、未来の自分から見て今の学校生活はどうか？今自分に足りないものは何ですか？	それでは、夢に向けて小さな一歩を踏み出しましょう。あなたの夢は何ですか？
↓	↓
( 「 はあ～・・・あの時、もっとあれやっとならないうに 」 ) 未来の自分が今の自分を誇りに思えるように、今何ができればいいですか？何をしていますか？	その夢を叶えるために必要な経験、スキル、条件は？ 何ができるようにならなければいけない？
↓	↓
そのために、明日から具体的にどう行動すればいいですか？やるべきことを決めよう。	そのために、明日から具体的にどう行動すればいいですか？夢に向けた努力を始めよう。
学習面 (いつ・何を・どのくらい・どんなペースで) 今できる、必ずやること！とりあえずはダメ。	学習面 (いつ・何を・どのくらい・どんなペースで) 今できる、必ずやること！とりあえずはダメ。
部活動や特技 (いつ・何を・どのくらい・どんなペースで)	部活動や特技 (いつ・何を・どのくらい・どんなペースで)
日常生活の時間の使い方 ☆時間に追われる毎日から抜けだそう！先を見通して行動することがポイントです。 ※できない理由を見つけるよりもどうやったらできるかを徹底的に考え、時間を作り出すための行動をココに書こう。	日常生活の時間の使い方 ☆時間に追われる毎日から抜けだそう！先を見通して行動することがポイントです。 ※できない理由を見つけるよりもどうやったらできるかを徹底的に考え、時間を作り出すための行動をココに書こう。

# 音楽科ヨーロッパ研修旅行報告

音楽科2年7組 担任 濱田 淳一

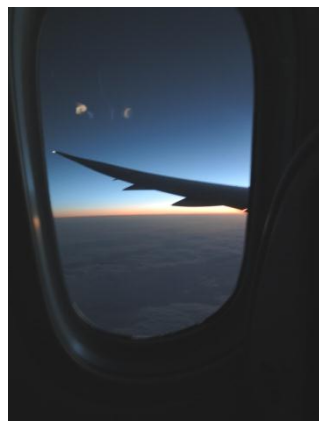
平成26年度音楽科海外研修は、音楽科2年生38名、副担任の福田教諭と私の計40名で実施された。この研修を通して生徒達が得た経験は、今後の進路実現や人生において、きっと大きな財産になると思う。その意味の大きさを考えるとき、この研修の実現を支援していただいている関係者の方々に、まず心から感謝申しあげたい。

## 事前学習

今年の研修旅行の準備は、音楽史の授業で9月から行った事前学習に始まる。17のグループに分かれ、オーストリア縁の作曲家・語学・文化・地域など、各自で設定したテーマについて学習したことをまとめたレポートと、現地でのレッスン曲の楽譜で作製した冊子は101ページにもなった。

## 出発

12月1日。集合時間より30分早く空港に到着した私は、既に何人も生徒が集まっていることに驚いた。ほとんどの生徒が初めての海外であり、中には初めて飛行機に乗るといふ生徒もいて全員がハイテンションである。今回は鹿児島空港でウィーンまでの手続きを済ませるため時間がかかった。チェックイン後、見送りにお越しいただいた保護者への生徒代表のあいさつを済ませ、鹿児島を出発となった。



2時間弱のフライトの後、羽田に到着。出国手続きなど、生徒たちにとっては、初めて体験することばかりだったが、特に混乱もなく搭乗できた。

約12時間のフライトは、あっという間に過ぎミュンヘンへ空港に到着。当たり前なのだがドイツ語のアナウンスや広告に「わあ〜外国だあ」と歓声上がる。イケメンの係官にやや興奮気味の生徒たちに、早く入国審査を通るよう促し、ウィーン行きの航空機に乗り込む。ウィーン到着後はバスに乗り換えホテルへ。いつもより8時間長い一日がようやく終わった。

## ウィーン楽友協会

12月2日。ウィーンでの最初の研修は、楽友協会のバックステージツアー。ウィーン・フィルのニュー・イヤー・コンサートの会場としても有名なグローサー・ザールをはじめ、ブラームス・ザールや各種リハーサル室等をホールスタッフの案内で見学する。扉をくぐるとテレビやDVDで目にする、あの黄金ホールが目の前に広がる。幸運なことにウィーン交響楽団のリハーサル前ということで、早く来られた楽員たちのウォームアップを耳にすることもできた。見学の後は、黄金のヨハン・シュトラウス像のある中央公園を散策の後、昼食を終えクラヴィアー・ギャラリーへ向かう。





## ノーマン・シェトラ教授のピアノレッスン

住宅街の一角にあるこのホールで、今回の研修の中でも特に重要なノーマン・シェトラ教授のピアノレッスンが行われた。受講するのは2学期末の実技試験上位4名で、残りの生徒は聴講だ。

氏のレッスンは、「聴衆に魔法をかけるような演奏するために、どのように楽譜を読み解き演奏していくのか」という内容で、特に「音色」と「表現」の重要性について熱く語っておられた。生徒達は楽譜に書かれている約束事を守りつつ、自分の思う表現をすることの難しさを感じているようだった。80歳を過ぎておられるにもかかわらず、時間を忘れてのレッスンに加え、ときおり弾いて下さるピアノの音のあまりの美しさに全員が感激。とにかく感動の一言に尽きるレッスンであった。

感動的なシェトラ教授のレッスンから帰るとウィーンで初めての夕食。ほとんどの生徒が初めての本格的な外国の食事である。概ね好評だったが、一部に脂っこさや独特の香りが苦手な生徒もいて、早くも日本食の素晴らしさを痛感する。この夕食の際、20数年ぶりの再会があった。私が学生時代所属



していたMBCユースオーケストラと一緒に活動していた、ウィーン在住の有川さん(旧姓)が訪ねてきてくれたのである。実は私のクラスの生徒の保護者とも面識があり、ヴァイオリンを専攻している娘さんともお会いしてみたいということで、訪ねてきてくれたのだ。生徒はドイツのプロオーケストラで活躍されていた有川さんを前にして少し緊張気味で話を聞いていたが、我々は自分達はその生徒と同じ年だった頃の話で盛り上がった。

## グラスナー教授の合唱レッスンとハイリゲンシュタット

12月3日。グラスナー教授の合唱レッスンを受けるため閑静な住宅街の中にあるウィーン国立音大を訪ねる。体をほぐす運動に始まり基本的な発声を終えると、鹿児島で準備してきた3声のカノンとモーツァルトの作品などをレッスンしていただいた。ときにユーモアを交えながらの心温まる氏のレッスンの受講をとおして、生徒全員がグラスナー教授のファンになっていた。



レッスンの後はハイリゲンシュタットを訪ねる。ここはベートーヴェンが過ごした場所であると同時に、甥であるカールと弟のヨハンに宛てに、日ごとに悪化する難聴への絶望と、芸術家としての運命を全うするために肉体および精神的な病気を克服したいという決意を書いた手紙「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いた場所である。彼のデスマスクや遺髪などを目の当たりにした生徒達は、「ここにベートーヴェンがいたのだ」という感慨に浸っていた。



## シェーンブルン宮殿とフォルクス・オパー

ハイリゲンシュタットを後にし、次にシェーンブルン宮殿を訪れる。みぞれ模様の中目の前に広がる広大な宮殿に生徒達も興奮気味だ。マリア・テレジア、マリー・アントワネット、ナポレオンと、世界史で学習した人々が実際に過ごしていた宮殿。宮殿の広さもさることながら、壁に飾られた絵画や調度品の素晴らしさ、交通の不便だった時代に、よくここまで集めたと思う中国の陶磁器や日本の漆器など、当時の栄華を堪能する。宮殿の見学後は出発までの時間を利用して、庭園に設営されたクリスマス・マーケットをめぐる。生徒達は今回の研修中、数少ない自由な時間を十分に楽しんでいるようだった。



早めの夕食後、フォルクス・オパーへと向かう。国立歌劇場とともにオペラファン憧れの劇場で、ヴェルディ作曲の「椿姫」を鑑賞する。オペラファンならずとも作品名は知っているであろう、オペラの代表作を鑑賞できたことは本当に幸運であった。オーケストラの音楽に導かれる美しい歌声、豪華な衣装や舞台装置に、一幕が終わった時点で既に興奮状態。終演後は口々に印象に残ったシーンや音楽について語り合っていた。

## 作曲家の眠る地～楽器博物館

12月4日、ウィーンの最終日。朝食の後、荷造りを済ませ、ベートーヴェン、シューベルト、ブラームスなど、多くの作曲家が眠る中央墓地を訪れる。私自身は5回目の訪問になるが、いつ来てもベートーヴェンの墓石の前には、綺麗な花が手向けられている。一時体調を崩す生徒もいたが、副担任の福田先生、バスのドライバーにもご協力いただき、事なきを得る。



その後の訪問先、王宮内にある古楽器博物館は、我々が現在使用している楽器のルーツに会える場所だ。自分達が演奏している楽器が、かつて、どのような姿をしていたのか、興味深げに観察し写真に収めていた。また、中には隣接する古武器博物館足を運び、本物のサーベルを目の当たりにし、「カッコいい！！」を連発する女子生徒もいた。

## ケルントナー通り

ウィーン最後の研修は、今回唯一の市内観光「ケルントナー通りの散策」だ。旧市内中心部にあるシュテファン大聖堂を起点に、南側はシュターツ・オパーまで伸びる通りで、数多くのブランドショップが立ち並ぶウィーンで一番の繁華街である。しかし、生徒たちにとっては楽しくも勇気のいる「サバイバルタイム」の始まりなのである。なにしろこの研修、食事と買い物は「各自御自由に！」なのだ。引率の我々が気を配っているとはいえ、お店を決めて注文or買い物をし、





会計を済ませるまで、全てを自力でやらなければならない。通訳も無く片言の英語や独語を駆使(?)して、屋台やカフェで何とかお腹を満たし、家族や友人へのお土産の購入も合わせて、たった2時間で集合場所まで帰って来なければならないのだ。

私はというと、楽譜を購入したいという数名の生徒をケルトナー通りから少し離れたところにあるドブリングガーという楽譜屋へ連れて行ったあと、大急ぎで福田先生と合流し、近くの「北海なんとか?(たぶん)」という、オープンキッチンの海鮮料理屋で昼食を済ませ、自分の買い物は出来ないまま集合場所へと向かった。楽しいひとときを過ぎた生徒達は、時間に遅れることもなく集合場所へと集まり「サバイバルタイム」は終了となった。

## ザルツブルク～モーツァルトの生家

12月5日。海外研修旅行最後の研修はザルツブルクでの研修だ。ヨーロッパの冬らしい、雲底の低い天気の中、ミラベル庭園へ向かう。ここは、ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」のロケ地ということもあり、様々な場所で記念撮影後、モーツァルトの生家を訪ねる。

ザルツブルクの旧市街にあるこの家は、モーツァルトが実際に使用していた楽器や楽譜も展示している記念館となっている。彼が立っていたその場所に自分が立っている、彼が使っていた楽器がそこにある、本物を目の当たりにして、生徒たちは大変感激している様子だった。なお、この日はモーツァルトの命日でもあった。

私個人としては、ザルツブルクでガイドを務めていただいた小山さんと話をする中で、彼の部下が、私が30歳のころ受講した浜松国際管楽器アカデミーという講習会で通訳をされた高森さんということが分かったのが驚きだった。



当時ウィーン・モーツァルテウムに留学中の高森さんは、バイエルン放送交響楽団首席トロンボーン奏者のトーマス・ホルヒさんの通訳として一時帰国していたのだが、その後、紆余曲折あり、小山さんの会社に入社したとのことであつた。残念ながら再会は叶わなかったが、高森さんの近況を聴くことができ懐かしかった。



## 鹿児島へ

ザルツブルクでの昼食を終え、ミュンヘンを経由して羽田へ向かう。生徒達は一週間の研修の感動と疲れが相まって、バスの中でも飛行機の中でも熟睡している者が多いが、私はこれでなんとか日本には無事に帰れると少しホッとし、友人でもある指揮者の下野竜也氏による指揮者講習会に向けて、ベートーヴェン作曲の「交響曲第三番」を勉強して過ごした。羽田に着いてから聞いてみると、「飛行機に乗ったところまでは覚えているのですが記憶が・・・」「行きよりずっと短く感じました」と言葉が返ってきた。入国手続きを済ませ鹿児島までの機内では再び熟睡。ゴゴッ・・・という音で目を覚ますと、既に鹿

児島空港だ。生徒達は半ば寝ぼけながら荷物を受け取ると、多くの保護者の出迎えを受ける。特に大きなトラブルもなく、ひどく体調を崩す者もなく、こうして無事に帰って来られたのも、今回の旅行の企画に協力いただいたJTBの大熊さん、添乗員の金田さん、シェトラー先生とのメールのやり取りで英訳のお手伝いをいただいた英語科の薬丸先生など、多くの方々のお力添えがあつてのことである。この場を借りて改めて感謝申し上げたい。

そして、何より生徒達自身の頑張りが素晴らしかったことを併せて記しておきたい。解散式の後、楽しそうに話をする生徒達と、一回り大きく成長したわが子を温かく迎える保護者の皆さんの姿が印象的だった。



# 美術科海外研修旅行報告

2年8組 担任 前村 卓巨

## はじめに

本校美術科では、毎年海外研修旅行でフランスを訪問し、本物の作品に触れることで、より深く鑑賞をし、今後の制作に役立ててきている。

今年は、特に事前学習をしっかりと行ってきた。西洋美術史における作家研究や、黒田清輝を通しての同時代のパリの画家たちなどを年間を通し研究し発表会を行ってきた。

訪問地は、パリの他、フォンテーヌ・ブローにあるバルビゾンや黒田清輝の滞在したグレー＝シュル＝ロワン市も訪れた。グレー市では、市庁舎を表敬訪問して、学校長があいさつするなど交流を深めることが出来た。鹿児島県からの歴代留学生が寄贈した作品を鑑賞したり、黒田清輝や歴代留学生が滞在したシュビオンホテルも見学し、現代も続く鹿児島県との交流なども感じる事が出来た。



## 日程と共に振り返りながら

### 12月1日(月) 1日目 鹿児島空港、結団式。羽田空港～シャル・ド・ゴール空港。パリ泊

午前7時集合という早い時間であったが時間どおり集まった。音楽科と一緒に結団式を行い、保護者に見送られながら出発した。羽田空港着、バスで成田空港へ移動。到着後、出国手続きを済ませ機内へ。ANAの機内は快適で、シャル・ド・ゴール空港までの12時間半はそれぞれに映画やゲームなど楽しみながら過ごしていた。予定より1時間早くフランス到着。

ほとんどの生徒にとって初めての外国。外国人の空港関係者、アルファベットのみの表示などきょろきょろしながら入国審査へ。ここで早速「ボンジュール」「メルシー」等のフランス語デビュー。「次来るときは列車？バス？・・・であればこちらに向かうんだね」などと話しながら、次回一人で来た場合を想定し表示に沿って進みバス乗りこんだ。生徒たちはバスが出発した瞬間から窓にはり付き、シャッターを押しまくっていた。街並み、建物、看板、自動車、何もかもが新鮮で驚きだったようだ。

### 【凱旋門】【シャンゼリゼ通り】(車窓)

パリ市内に入り、バスドライバーの配慮でまず凱旋門に向かい、シャンゼリゼ通りを通過してコンコルド広場へ。クリスマスのイルミネーションで電飾された街並み木やクリスマスの出店などが立ち並びまさにあこがれたパリの華やかさが見て取れた。

### 【シャイヨー宮】【エッフェル塔】



白亜の建物(シャイヨー宮)が見えてくると、その後ろにライトアップされたエッフェル塔が現れ、車内に歓声が上がった。パリの夜空に電飾で輝くエッフェル塔の姿はきっと生涯忘れられないパリの第一印象となるであろう。

バスを降り「エッフェル塔のキーホルダー」をいっぱい抱えた怪しい物売りのお兄さん達の間を抜けて最もよく見える場所へ。早速カメラを記念撮影第一弾を行った。階段を降りてだんだん近づくエッフェル塔に感激。セヌ川を渡りついに塔の真下へ。寒空の下、上を見上げたまま皆思い思いに写真を撮ったりはしゃいだりしていた。9時に始まった電飾点滅も見る事が出来た。

バスに乗り、ホテルへ。「メディアン パリ コングレホテル」へ到着。

チェックインした後、それぞれ部屋へ向かった。その後班長会を開き、本日の反省と明日の確認を行い、就寝。

## 12月2日(水) 2日目

7:20の朝食, 8:00の集合のいずれも時間通りに行動。本日からガイドとして島田さんが添乗して下さることになった。

### 【オルセー美術館】

事前予約が取れていなかったため, 9時前には並び始める。大阪の美術科のある高校生も来ていた。9:45開館。ここは, 2時間半の見学時間をとる予定だったが, 入場が遅れた上, 荷物預けやトイレ, イヤホンガイド借り受けなどしているうちに実質1時間しか見学の時間がとれずに駆け回っての鑑賞となった。事前研修でじっくり学んだミレーの《晩鐘》《落ち穂拾い》の本物を見られた他, マネ, モネ, ルノワール, シャバンヌ, ゴッホ, セザンヌ, ロダンなど印象派を中心とした画家や彫刻家などの代表作を生で見ることが出来たが, 残念ながら時間は全く足りず, いつかじっくり見に来ようと言いながらオルセー美術館を後にした。

### 【シャンゼリゼ通り】 散策

凱旋門で降りてから, 班ごとにシャンゼリゼ通り1キロ近くを散策。それぞれにサンドウィッチなどの昼食をとった後, ヴィトン本店に行く者, レコード屋に行く者, カフェに寄る者, フランス自動車メーカーのショールームに行く者など, 思い思いに行動していたが, あっという間に時間が来てしまったようだった。

### 【モンマルトル】 散策

サクレクール寺院前で記念撮影の後, 似顔絵描きたちの集まる広場やピカソの暮らしたアトリエ洗濯船を見学。その後スケッチも兼ねて自由散策となった。見所の多いところだったが夕闇も迫り, すぐに時間が来てしまった。

モンマルトルからグランショミエール美術専門学校のあるモンパルナスまでの道路は大変な渋滞となっており, 島田さんの話では「政府はパリから自動車を締め出そうとしている様で, 道幅などだんだん狭くする工事が進んでいる。そのため年々渋滞がひどくなってきている。」とのこと。観光に力を入れているはずのパリだが不思議な町である。予定より30分ほど遅れて到着。



### 【グランショミエール美術専門学校】

一昨年まで本校に勤務し, 現在パリ留学中の久保孝彰先生が待っていて感動の再会をした。久保先生は, 歴代の留学生と同じようにここで絵の勉強をしているとのことだった。

ここでは海外研修旅行の重要な目的の一つである「パリの先生からヌードデッサンの指導を受ける」ということ。長い歴史を感じる教室に入り, 先生の指導の下にクロッキーを始めた。5分とか10分間でモデルさんをクロッキーするだけでなく, ポーズ中にゆっくり動き出したり, 短時間に色々なポーズをとるなど緊張感のあるデッサンとなった。モデルさんはすばらしい肉体をしており, 緊張感のある動きやきつそうなポーズを難なくとってくださった。フランス人の先生は生徒の作品に「トレビア〜」を連発し, 松陽高校生のデッサン力を大いに褒めてくださった。いろんな意味で日本では経験できないすばらしい美術体験となった。



午後10時ホテルに戻り, 遅い鶏肉の夕食。班長会では班行動に関する反省が続出, 「個人行動を避け常に集団で行動することを自覚するように呼びかけよう」という内容となった。

## 12月3日(木) 3日目

8:20分時間通り出発。スウェーデンの国王夫妻がパリを訪問されるとのこと町中にスウェーデン国旗が掲げられていた。そのため道路は混み合っていた。

### 【シテ島】【ノートルダム寺院】

降車後, セーヌ川を渡りシテ島にある“ノートルダム寺院”に移動。ゴシック建築の極みともいえる荘厳な教会をまず外観から見学。普段はあまり見ない裏側で記念撮影をした後入館。神聖なる雰囲気の中, 生徒たちはバラ窓の美しさに見とれ, 壁画や彫刻そして祭壇のすばらしさに圧倒されていた。ここから久保先生も同行してくださった。



サントチャペル教会(最も美しいステンドグラスが見られるという教会)やコンシェルジュリ(マ

リー・アントワネットが幽閉された牢獄) などの見学も含め自由行動となった。シテ島周辺から見る街並み、セーヌ川などいかにもパリらしい景観にシャッターを切りスケッチも楽しんでいた。

セーヌ河畔を歩き、私のシテ島に関する想いについての説明を聞きながらポンヌフ橋を渡りルーブル美術館へ。ガラスのピラミッドの前で、記念撮影した後いよいよ館内へ。

### 【ルーブル美術館】

記念撮影の後、集合場所を確認。何しろ超巨大な建物で地下から3階まであり、果たして全員無事にたどり着けるか。島田さんと鏡さんのグループの2手に分かれての見学となった。

まず、彫刻 [マルス像, ミロのビーナス, サモトラケのニケ], イタリアファエロ, レオナルド・ダ・ビンチ], フランス絵画 [ダービット, アングル・ドラクロワ] その中に, 《モナリザ》《メデューズ号の筏》《民衆を導く自由の女神》など超有名な絵画が続々と現れた。そして, なかなか見る機会がなく辿りつくことが難しいエジプト関連展示会場まで案内していただいた後自由行動となったが, 昼食もとらずに4時間余り鑑賞をしていた生徒がほとんどであった。後から聞いてみると驚くほどに効率的に要所を捉えて見て回っていた。バス乗車後, マイクを握った荒田君の興奮した様子が皆の共感を呼び, 感動の空気に包まれたバスの車内となった。



### 【ポンピドーセンター】

バスでポンピドーセンターに移動。ここは20世紀以降の現代芸術を展示している施設。鉄骨, 配管, エスカレーターがむき出しになった斬新な建築に目を見張る。庭の噴水にあるティンゲリヤニキ・ド・サンファールの彫刻も好評であった。

2班に分かれ, 島田さんと鏡さんの説明を聞いた後は各自で自由に鑑賞した。企画展では「フランク・ゲーリーの建築展」, 「マルセル・デュシャン展」, 「ジュフ・クーンズ展」を開催しており, いずれも歴史的記念となるレベルの展覧会であった。生徒はそれぞれのペースで回っていた。難解な現代アートではあったが感想を聞くと皆一同に「すごくよかった」と答えていた。



### 【オペラ座周辺散策】 [ラファイエット, プランタン]

ナポレオン3世期に建設された豪華なパリ市庁舎を抜け, オペラ座で降りる。ここはパリ有数のデパート群が立ち並ぶところ。特にこの時期のショーウィンドの飾り付けはすばらしい。美術科としては是非生徒に見て欲しい現代のパリのデザインでありファッションであった。夕方6時には周りはすでに真っ暗。おかげでクリスマスのイルミネーションが美しく映えていた。親子連れなども多大変な人混みであった。はじめは集団で移動し, ショーウィンドなど一通り見学した後, 撮影したりショッピングをする時間をとった。店内の電飾や飾り付けもすばらしく日本人の姿もたくさん見られた。感動の余韻の中ホテルへ。



魚料理の夕食のあと班長会を行った。日々反省のことばも良くなってきた。

## 12月4日(金) 4日目

8:00チェックアウトの後, 一路南へ。約1時間かけてパリの南約64キロのグレー=シュル=ロワン市に向かう。

ここからモワヌ前田恵美子さんがガイドを, ご主人のピエールさんが自家用車で随行してくださいました。前田さんは, これまで宮家の案内や歴代首相の美術館案内をするなど, コンフレランシェ(美術館専門のガイド)のフランス国家資格を持った鹿児島出身の美術館ガイドである。これまでも松陽高校で特別講義をしてくださったり海外研修旅行でガイドをしてくださったりと, 本校美術科にとっても大変お世話になっている方である。コンフレランシェとして40年あまり活動した経

験を基に、次代を担う若者に対するメッセージを紡ぐような歴史に残るすばらしいガイドであった。  
渋滞で混み合うパリを抜けると徐々に車も少なくなり快適なドライブとなる。また、風景も都会から田舎のそれに変わり、広々とした畑が見えてくる。ヨーロッパらしい深い森を抜けてグレーに到着。

### 【グレー＝シュル＝ロワン】



橋の手前で降りた後、曇天の下各自思い思いにスケッチを始めた。これまで事前学習で何度も目にした馴染みの風景。浅井忠の絵の世界そのままに、12世紀に造られた古い橋が架かるロワン川にはカモや白鳥が泳いでいた。かつて児島虎次郎が「永遠にこの場所にとどまりたい」と言っていたほどの魅了される幻想的な風景である。

ガンヌの塔を抜け黒田清輝通りまで歩いて移動。記念プレート前で前田さんの説明を聞いた。黒田清輝通りが出来たいきさつや、私がグレーを描いた南日本美術展のチケットも紹介された。2000年に南日本海外留学生として滞在していた私は、前田さんからグレーで開催された展覧会に誘われたことがきっかけで、グレーの人々と共に黒田の借りていた納屋のあった場所を調査することになった。黒田の日記を読み、1894年の住民台帳・土地台帳を基に当時の下宿先をほぼ特定したことがきっかけで、2001年10月17日「黒田清輝通り」が誕生したのである。このプレートの「黒田清輝通り」という文字は当時の須賀龍郎鹿児島県知事が書き、村の彫刻家が石版に掘り、東京文化財研究所が所蔵している自画像を転写したもの。当時の苦勞が思い出された。あれから13年。まさか自分が担任している生徒と一緒にこの地を訪れようとは・・・感慨ひとしおであった。



### 【市庁舎表敬訪問】



若い女性の副市長と文化協会会長のジャンさんが対応してくださった。前田さんの通訳で、田淵校長がこれまでの交流について感謝するとともに鹿児島とグレー、日本とフランスの関係が続くようあいさつを行った。また、ジャンさんからは「ここグレーは日本の若い芸術家たちの作品をフランスで最も多く持っている町である。今後とも作品を送ってもらい交流を深めていきたい」との話があった。鹿児島からのお土産も差し上げた。

### 【バルビゾン】

バスに乗りフォンテーヌ・ブローを通り一路バルビゾンを目指す。  
バルビゾンはミレーなどの農村を描いた画家たちが滞在したことで有名だが今や高級別荘地となっている。昼食は暖炉のある素敵なレストランでとり、料理もおいしく生徒にも大好評であった。いよいよミレーのアトリエへ。館長自ら丁寧な解説をしてくださった。《晩鐘》の描かれた場所、モデルの立っていた場所を見ることができた。また、ミレーの使っていたパレットも展示してあった。  
その後、バルビゾンの森に入り大きな岩がごろごろしている場所（ここは昔海の底だった）にあるミレーとルッソーのプレートを見学した。



次に、観光客は訪れることが無い（まずみんな知らない）ミレーとルッソーのお墓”と《晩鐘》の絵に小さく描かれている“教会”を訪ねることができた。お墓の前では自然と手を合わせる姿が見られた。事前学習では特にミレーについて深く学習してきただけに、オルセー美術館で《晩鐘》《落ち穂拾い》を見て、ミレーの暮らした家に入りアトリエを見学し、ついには本人が眠っているお墓を訪ね手を合わせたことで、一連のストーリーの終わりを迎えた感があった。



### 【フォンテーヌ・ブロー】

フォンテーヌ・ブロー城の目の前にある「ホテル・ナポレオン」は3つ星であるだけにパリのホテルより格段にすばらしかった。古き良きフランス建築を近代的に改装され、室内は広く明るく、ガラス張りのお風呂がついていた。アメニティーグッズも充実しており、おかげで生徒は大喜びであった。



夕食までの1時間ほどあったため、ホテル前のモノプリ（地元の食糧から日用品まで売っているスーパー）でじっくり買い物をすることができた。フランスの野菜や肉類、缶詰、日用品など日本との違いを楽しみ、かごいっぱいにお土産を買い込んでいた。レジではちゃんと挨拶をしてお礼を言っていた。買い物ができたことはある意味フランスの人々の暮らしを感じる最も身近な体験となったのかもしれない。

モアンヌ前田夫妻がホテルに残っていたため、買い物を済ませた生徒達が次々と集まり、美術に関する疑問や自分の将来についての相談などで会話が弾んだ。夫妻が帰るときは、夕食をとっていた全員が玄関まで見送りに飛び出してきて、感動的な別れとなった。来年11月には本校に来てくださるという約束もいただいた。

夕食も「これぞフランス料理！」といった雰囲気でもフォアグラ料理も出て、生徒にとって大満足のフォンテーヌ・ブローの夜だった。

## 12月5日(土) 5日目

### 【フォンテーヌ・ブロー城】



世界遺産にも登録されているフォンテーヌ・ブロー城見学。開園時間まで記念撮影などして過ごし入場。ここでも島田さんと鏡さんに案内していただいた。600年にわたり29人の国王が好んで訪れ、フランソワ1世がルネッサンス様式の宮殿に作りかえたフランス最大の宮殿。かつてレオナルド・ダ・ビンチも滞在。ベルサイユ宮殿と違い、当時の物も多数残っており、フランス史を学ぶには大変興味深い見学となった。《モナ・リザ》も一時期ここにあったという。また、ナポレオンもここで亡命生活をしていたという宮殿で、広大な庭と共に見所が多かった。

ここで、美術史という観点だけでなく、フランスの歴史も調べてみたいという興味がわいてきた。特にナポレオンは次のテーマにしたいと感じた。ここでは時間に余裕がありゆっくりスケッチをすることができた。

### 【フォンダシオン ルイ・ヴィトン】

最も話題の現代美術館が、今年10月27日パリにオープンした。フランク・ゲーリーによる設計で、ルイ・ヴィトンが美術館を造ったのだ。ブローニュの森にガラスの帆船が浮かんでいるような造形はこれまでの建築の概念を打ち破るかのような奇抜さで圧巻であった。時間の関係で外観のみの見学であったが、生徒は大いに刺激を受けていた。中には入場料を払い駆け足で場内を見学する生徒もいた。



### 【再びルーブル美術館】

昼食の弁当をとるためパリに戻り、フードコートが充実しているということでルーブル美術館へ。中には、昼食もとらずダビンチやラファエロの絵に走っていく生徒もいた。パリの美術館は年齢の

証明ができれば高校生は無料である。私は入場料を払って入場。生徒と一緒にラファエロやダビンチの絵の前でずーっと過ごした。松陽高校の教室で図版を広げて「ああだこうだ」と言ってきた生徒が本物の絵の前で食い入るように見つめ議論している生徒の姿を見ている私にとっても至福の時間であった。昼食をサンドウィッチなどで簡単に済ませた他の生徒たちもそれぞれに時間を有効に過ごしていた。



チュイルリー公園を歩いて、オランジュリー美術館へ。途中アンケートのサインを求める子供達に絡まれたり、エッフェル塔の模型売りのお兄さんに声をかけられたりしながら、美術館到着。2班に分けて間隔を空けて入場しなければならなかったため、半分はコン

コルド広場などをスケッチをして過ごした。

### 【オランジュリー美術館】

モネの睡蓮の間があることで有名な美術館。他にも印象派を中心に質の高いコレクションもあり、人気の美術館である。ガイドさんの説明を聞きながら改めて印象派や近代の絵画の魅力を味わうことができた。モネ晩年に描かれた睡蓮の大作4枚で囲まれた睡蓮の間では、まるで池の中に漂っているかのような錯覚を覚え絵に包まれながら時間を過ごすことができた。



島田さんと鏡さんとはここでお別れ。生徒は美術館の作品についての彼らの知識の豊富さに驚いていた。描くという立場から観るという立場で鑑賞するということの奥の深さを気づかされた大変学ぶことの多いガイドさんたちであった。

空港まで順調に向かい、スーツケースの重さ（23キロまで）を調整しながら、帰国手続きをした。手続きの後、最後のショッピングを楽しみ JAL 機内へ。帰りの便は、静岡の高校生も一緒に便で満席であった。

### 12月6日(日) 6日目

行きと比べ、帰りは早く感じられトラブルもなく羽田空港到着。全員の無事を喜び合った。帰国手続きも問題なく終わり機内へ。

鹿児島空港到着。音楽科とも合流したくさんの保護者のお迎えの中、解散式。教頭先生も出迎えに来られていた。

### おわりに

ほとんどの生徒にとって初めての海外旅行であったが、中身の濃い充実した研修となった。事後のアンケートでは、全ての生徒が満足し将来再びフランスを訪問したいと回答していた。パリ郊外のフォンテーヌ・ブローヤバルビゾン、グレーが良かったと答えている生徒も多かった。

旅行中の生徒の態度もすばらしかった。総務を中心に毎日班長会を行い、その日の反省をしっかりと行い、翌日の予定を確認し連絡が徹底されたおかげで、日々、自ら考え行動する態度が育っていた。これは事前学習から係り分担、班分け、部屋割り全てが生徒の手によって行われた結果であり、普段の学級活動の延長であったともいえる。

また、今回は団長として校長先生も参加され、生徒と共にフランスの伝統文化について感じていただき、美術科生にとっての海外研修旅行の意義を理解していただける機会になったと思う。

パリやグレーは黒田清輝が滞在した場所であり、黒田の研究を通してより深くフランスを見つめることができた。また、グレーの人々との交流の中で、将来美術を志す若者に対する期待を感じることができ、将来一人前の芸術家となってフランスと日本の架け橋になってくれると感じた。改めてこのようなきっかけを作ってくれた郷土の偉大な画家黒田清輝と、現在も鹿児島とグレーのために架け橋となっているモワヌ前田恵美子様夫妻に心から感謝したい。そしてここまで至った松陽高校海外研修旅行の歴史と、学校の体制、保護者の理解に感謝したい。



# 平成26年度普通科修学旅行 報告

2学年主任 内西 昭文

## 1. はじめに

2学年普通科は、平成26年12月3日（水）から12月6日（土）までの3泊4日、長野県志賀高原でのスキー研修を中心とする修学旅行を実施した。参加者は、普通科生徒232名（男子118名・女子114名）、団長（遠藤教頭）以下引率職員9名（男性7名・女性2名）、添乗員3名（男性1名・女性2名）、カメラマン1名（男性）、看護師1名（女性）の計246名である。

研修日程にもとづいて、その概要をここに報告する。

## 2. 日程

1日目；12月3日（水） 晴/曇

- 6時15分 鹿児島中央駅西口 集合完了（バス配車は5時40分）
- 7時10分 鹿児島空港 到着
- 8時10分 鹿児島空港 出発
- 9時45分 羽田空港 到着
- 10時35分 羽田空港 出発
- 昼食休憩（11時45分～12時29分 <sup>みよし</sup>三芳PA；埼玉県）
- トイレ休憩（14時12分～14時27分 東部湯の丸SA；長野県）
- 15時55分 高天ヶ原ホテル 到着
- 16時55分 スキー教室開校式の一部及び講話（4F多目的ホールで）  
スキー教室①は実施できず（リフト点検のため）
- 18時10分 夕食
- 19時30分 入浴
- 22時15分 室長会（4F多目的ホールで）
- 22時45分 点呼
- 23時00分 消灯



朝まだ暗い時間の集合であったが、5時20分ぐらいから早い生徒は到着していた。学校発の便（5時30分に1台、生徒33名と職員2名乗車）も順調に合流でき、予定5分前の6時25分には鹿児島中央駅西口を出発した。渋滞もなく、鹿児島空港に到着できた。

鹿児島空港で、カメラマン及び空港集合の生徒6名と合流した。搭乗手続きでは、荷物預けとセキュリティチェックに時間がかかったが、ほぼ定刻に出発した。一般の搭乗客には、先に進んでもらう対応

をしたため、列の後ろに並ぶことはほとんどなかった。飛行機内では、男子後、女子前（職員は男子の後で最後尾席）に着席した。途中機内から富士山を様々な角度から眺めることができ、生徒たちも興奮し、歓声を上げていた。羽田空港には予定通りに到着した。

羽田空港で看護師1名と合流し、志賀高原に向けて出発した。昼食は三芳パーキングエリアで弁当をとった。弁当の仕分けに少々時間がかかったが、バス車内やPAのベンチ等で無事昼食をとることができた。道中は全くといっていいほど積雪はなく、チェーンも巻かずに予定時間より5分早くホテルに到着した。到着後、スキーウェアや靴のサイズ確認や、事前に購入していたスキー小物（靴下やネックウォーマー）の現金引き換えもスムーズに行われた。

志賀高原高天ヶ原マンモススキー場は標高が高く、積雪は十分にあった。しかし、11月下旬に長野県北部を襲った地震の影響で、（事前打合せで連絡をうけていたが、）この日はリフトの最終点検を行っていた（例年であると、既に1週間前にオープンしているようだった）。

スキー教室開校式では、団長（遠藤教頭）とスキー学校長（指導員の方が代理）の挨拶のあと、生徒代表（6組の岩下君（生徒会体育委員長））が挨拶をした。本日は、前記の通りスキー教室①が実施できなかったため、スキー学校長による講話（志賀高原の特色等）が行われた。

その後、当初の計画を変更して夕食を早めに実施した。そのときに、同行する添乗員・カメラマン・看護師に挨拶してもらった。入浴は事前の打合せ通り計画より30分前からローテーションで行った。室長会で、健康管理及び貴重品の管理、明日朝の日程を再度連絡し、1日目を終えた。

2日目；12月4日（木） 小雨/雪

- 7時00分 起床
- 7時30分 朝食
- 8時30分 クラス写真撮影（ゲレンデ下で）
- 9時00分 スキー教室開校式の続き（ゲレンデ下で）  
スキー教室②（午前の部）
- 11時30分 昼食・休憩
- 13時00分 スキー教室③（午後の部）
- 15時30分 休憩
- 16時00分 スキー教室④（トワイライトの部）
- 17時45分 スキー教室（2日目）終了
- 18時30分 夕食
- 19時30分 入浴
- 22時15分 室長会（4F多目的ホールで）
- 22時45分 点呼
- 23時00分 消灯



朝から小雪の舞う中、最高のスキー日和となった。昨日実施できなかったスキー教室開校式の残り（インストラクターの紹介等）を実施した後、ゲレンデ下でクラスごとの写真撮影を行った（併せて、スキー班ごとの写真撮影も明日にかけて行った）。その後、班ごとのインストラクター指導の下、緩斜面での滑り方や止まり方、スキー板を履いての斜面の登り方などを練習した。

午後は、リフトを使って上の方に登っていき、急斜面での滑り方を練習した。生徒たちは慣れないスキー板に苦勞しながらもメキメキ上達し、夕方には多くの生徒が転ばなくなっていた。生徒たちの上達ぶりには目を見張るものがあった。多くのインストラクターからは、「松陽高校生の飲み込みは本当に早いですね」とたくさん褒めていただいた。

トワイライトの部では、リフトが次第に混雑し始め、より一層上達が分かるものとなった。滑りを覚えた生徒たちは何度も何度も滑りたいようで、最後の最後までリフトに並んで列をつくる姿が印象的だった。この日は、体調不良を訴える生徒が数名出たが、いずれも程度は軽く、大事には至らなかった。

また、この日は一日中スキー研修ということで、当初からスキーの見学予定の生徒3名（ホテルの方が運転し、職員・添乗員を加えると計6名）は、小雨の降りしきる中、周辺の散策（善光寺・小布施）に向かった（9：50出発で、14：55帰着）。その後、この3名は、「そり」をお借りしてゲレンデ下で本場の雪を体験した。



その後、前日同様夕食を早めに実施した。入浴は事前の打合せ通り計画より30分前からローテーションで行った。

室長会で、前日同様の連絡に加えて、ホテル出発のための荷物の整理整頓と、少々散見された気の緩み行為への注意指導を行って、2日目を終えた。

3日目；12月5日（金） 雪/晴

- 6時30分 起床
- 7時00分 朝食
- 9時00分 スキー教室⑤
- 11時00分 スキー教室閉校式（ゲレンデ下）
- 11時50分 昼食
- 12時53分 高天ヶ原ホテル 出発
- 14時27分 信州フルーツランド 出発

トイレ休憩（16時07分～16時25分 <sup>かみきよ</sup>上里SA；埼玉県）

- 18時48分 東京ベイ舞浜ホテルクラブリゾート 到着
- 19時30分 夕食（夕食後、入浴は各部屋で）
- 22時15分 室長会（1Fインペリアルホール前）
- 22時45分 点呼
- 23時00分 消灯





本格的な降雪のもとで天候に恵まれ、スキー研修は順調に行われた。生徒たちのスキーの上達ぶりは目覚ましく、隊列を組んでの滑走も見事なものになった。体育コース生を始め、多くの生徒が何度もリフトに並び、本場のスキー場での滑りを満喫していた。なお、当初からスキーの見学予定の生徒3名は、この日も「そり」をお借りしてゲレンデ下で本場の雪を満喫した。

小雪が降りしきる中、閉校式では、団長（遠藤教頭）の挨拶に続いて、スキー学校長（指導員の方が代理）から激励の言葉をいただいた。また、生徒全員分の講習修了証（班ごとの写真入り）が生徒代表（1組尾辻さん（体育コース生代表））に渡され、そのままお礼を述べて、スキー教室を終了した。スキー研修による大きな怪我もなく、参加した生徒たちが思い思いに滑れるようになり、「スキーが楽しかった」「また志賀高原に来たい」と話してくれたことをとても嬉しく思った。ただし、男子生徒が前日入浴中に、足を踏み外して出血し、前日夜と本日朝にそれぞれ職員1名が付添って病院へ向かった。左膝を4針縫う怪我であった。

ホテルで昼食後、お世話になったホテルの方や、スキー教室のインストラクターに見送られて、少し早めに千葉・舞浜へ向けて出発した。途中の信州フルーツランドで、たくさんの長野のお土産を抱えて悩む微笑ましい姿が見受けられた。東京都内に入って一部渋滞が見られたが、ほぼ予定時刻にホテルへ到着した。

食事中、ホテルでのマナーや、翌日に備えて荷物の整理、健康管理について念入りに話をした。また、旅行中に誕生日を迎えた2人の生徒へ極秘の誕生日祝いを行って大変盛り上がった。2学年のまとまりを感じた一幕であった。

その後、室長会でも、ホテルでのマナーや、翌日に備えて荷物の整理、健康管理について話をした。そして、点呼の後も生徒の体調等が気になったので、数回部屋を巡視し、一部指導を行って3日目を終えた。

#### 4日目；12月6日（土） 快晴

- 6時00分 起床
- 6時30分 朝食
- 7時25分 東京ベイ舞浜ホテルクラブリゾート 出発
- 7時45分 東京ディズニーランド 到着  
クラス写真撮影（入口付近で）
- 8時30分 入場（開園は8時）
- 13時40分 入場ゲート前 集合
- 13時50分 東京ディズニーランド 出発
- 14時37分 羽田空港 到着
- 16時05分 修学旅行解団式（羽田空港60番搭乗口前で）
- 16時40分 羽田空港 出発

- 18時40分 鹿児島空港 到着
- 19時47分 鹿児島空港 出発
- 20時30分頃 鹿児島中央駅西口 到着（解散）

（吉野早馬・鹿児島駅前行きのバス，学校まで行きのバスもそれぞれで解散）

昨年と同じ8時開園のため，5分ほど早くホテルを出発した。天候も良く，何とかクラス写真の撮影をし，ディズニーランドに無事入場できた。土曜日ということもあり，入場者は多めであった。生徒たちはそれぞれ笑顔で買い物を楽しんでいましたが，心ゆくまで各種のアトラクションを楽しめたとは言いきれないようだった。集合時間の13時40分にはほぼ集合できていた。全員整列後，クラスごとに駐車場のバスへ移動し，羽田空港に向かった。



空港へも，計画より20分ほど早く到着した。搭乗手続きでは，手荷物が増えたことによって荷物預けとセキュリティチェックにかなり時間を要したが，空港に早めに到着していたこともあって，昨年同様羽田空港で修学旅行解団式を行うことができた。

飛行機内では，行きと同じく男子後，女子前（職員は男子の後ろで最後尾席）に着席した。疲れも相当あったのだろうが，機内は静かで穏やかだった。

鹿児島空港到着後，そのまま空港から帰る生徒6名と別れ，バスを吉野早馬（22名下車）及び鹿児島駅前（13名下車）行きに1台（職員及び添乗員1名ずつ乗車），鹿児島中央駅への直行便バス5台（そのうち1台を学校まで，生徒25名と職員2名乗車）に分けた。バス乗車に少々時間を要したが，それぞれで解散・帰宅して全研修日程を終了した。

### 3. おわりに

今回の修学旅行は，11月下旬の長野県北部の地震や，直前に部活動の練習等で怪我をする生徒が見られてスキー研修の実施（参加）が危ぶまれる中，結果的には天候に恵まれて，かつ降雪量も十分で，スキー研修は大きな怪我もなく順調に進められたことが，何より良かった。協力いただいた多くの方々に感謝したい。

この時期は，体調不良（インフルエンザや嘔吐下痢等）の心配も大いに考えられたため，11月7日（金）の2学年PTAの場で事前に保護者へも十分説明する時間をつくった。また，2学年としても約三週間前から「学校感染症予防週間」と銘打ち，全クラスでマスク着用や手洗いうがいの励行をすすめてきたことで，大きな病気もなく無事に旅行日程を終えることにつながったのではないかと思う。

ともあれ，今年の2年生は，スキーの上達が大変早く多くの生徒たちが十分滑ることができ，とても嬉しそうな表情を数多く見せていた。今回の貴重な経験が，今後の高校生活に十分反映されればと願う次第である。非常に有意義なスキー研修を中心とした修学旅行ができたことをここに報告する。

# 平成26年度 美術科 1年 風景画合宿研修実施報告

美術科 餅原 宣久



## ■実施要項

1 目 的 学校を離れ、広く自然の素材を活用し風景画制作を体験して写生による表現の能力を高めるとともに、美術科生としての意識の高揚を図る。

2 日 時 平成26年7月30日(水)～8月1日(金) 2泊3日

3 場 所 日置市吹上

制作～薩摩湖周辺および「吹上温泉と歴史ゾーン」

①正円池周辺 ②海浜エリア ③吹上温泉街 ④大汝牟遅神社

周辺

宿泊～吹上砂丘荘

4 日 程 (現地までの移動は貸し切りバス)

○7月30日(水)

8:00 鹿児島中央駅集合 8:10 バス出発

8:40 松陽高校 8:50 バス発

9:30 吹上着

バスで①正円池周辺②海浜エリア③吹上温泉街④大汝牟遅神社



社周辺を下見

※制作場所の決定, 集合・トイレ・昼食場所の確認 周辺の散策

11:00 吹上砂丘荘着

荷物整理, スケッチ準備 ※自分の制作場所を担当に届ける。昼食(持参の弁当)

12:30 事前説明 移動(吹上砂丘荘周辺以外はバス) スケッチ, 下描き

16:30 制作終了

16:45 集合・移動(吹上砂丘荘周辺以外はバス) 入室・荷物整理 入浴

18:30 夕食 20:00 事前学習(下描きの講評) 22:30 就寝

○7月31日(木)

6:30 起床 7:00 朝食 スケッチ準備

8:30 集合・諸注意 8:45 移動(吹上砂丘荘周辺以外はバス)

9:00 制作開始

12:00 昼食(注文した弁当)

16:30 制作終了

16:45 集合・移動(吹上砂丘荘周辺以外はバス) 入室・荷物整理 入浴

18:30 夕食 20:00 講評会・交流会 22:30 就寝

○8月1日(金)

7:00 起床 7:30 朝食・片づけ 8:30 清掃・後始末

9:20 出発

10:00 美山着「荒木陶芸」見学 11:00 「荒木陶芸」発

11:30 松陽高校着 12:10 鹿児島中央駅 解散

5 参 加 者 美術科1年生(20期生) 男子7名 女子33名 計40名

6 引 率 餅原宣久(担任/美術科), 桑畑真由美(副担任/英語科)

前村卓巨(美術科), 宮蘭広幸(美術科)

7 経 費 生徒一人あたりの経費 12,000円(材料代・宿泊代 9600円・食事代～二日目の昼食)

8 持参する物 水筒, バスタオル, 洗面用具, 着替え, 寝間着, つば広帽子, 長袖服, 雨具, 常備薬, 画材(油彩道具, スケッチブック, 鉛筆, 木炭, キャンバス, 野外イーゼル, クロッキー帳, 制作ノート等), 医療箱



鹿児島県立松陽高等学校美術科  
2014 風景画合宿  
07.30～08.01



## ■合宿を振り返って

本行事は、毎年7月末から8月初めにかけて二泊三日で行われる美術科恒例の行事である。高校生になり「美術科」という特別な環境の中、初めての体験の連続で過ごしてきた1年生がようやく1学期を終え、真夏の炎天下の下、集中して制作を行う機会である。美術科1期生から5期生までは甌島(5期生は台風で中止)、6期生から12期生までは長島、13期生から16期生までは南九州市穎娃と場所を変えて行ってきた。公民館で寝泊まりし、協力して自炊を行うスタイルもひとつの伝統であったが、調理や入浴にかかる時間や労力、食中毒等の衛生面についての危惧などを鑑み、平成23年度の17期生から日置市吹上の宿泊施設を利用した合宿とし、本年度で4回目となった。

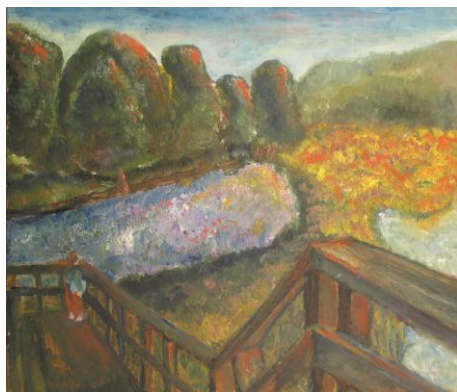
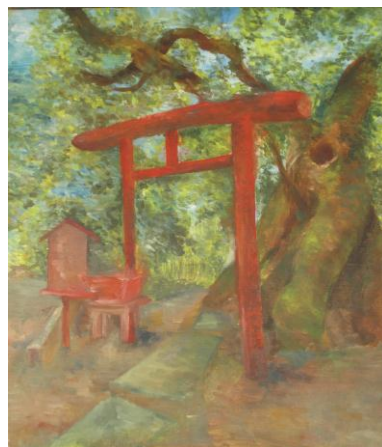
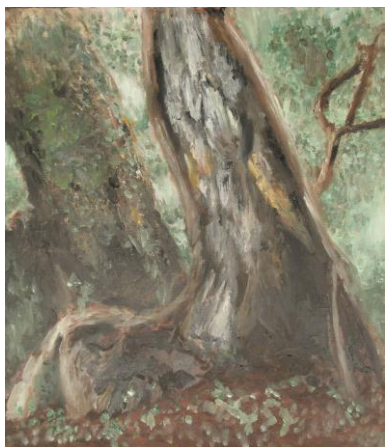
過去3回の合宿を行ってきた地ではあるが、生徒の安全面を最優先に考え、下見と打ち合わせを2回、入念に行った。その上で制作地を吹上町内の4か所の候補地としたが安全面と生徒の健康面(日差しを避けて休息をとる場所が少ないこと)を考え、海浜エリアは見学のみとした。宿泊場所の「吹上砂丘荘」においても食事や入浴は勿論のこと、制作地までのバスでの送迎など、これまでの経験を生かして快適な研修環境への協力があった。生徒たちには事前学習会を行い、合宿地についての予備知識をつけ、制作へのイメージを膨らませた。

合宿の3日間は終始充実した活動を行うことができたが、2日目に台風が接近し、現場での制作ができなかったことが唯一残念であった。急遽、引率者で検討し、前日のスケッチを踏まえ、朝のうちにバスで短時間の取材に行き、その後は宿泊施設の軒下を借りての制作となった。そのような中でも、生徒達は積極的にのびのびとした制作を行い、まだまだ制作経験の少ない現時点においては高いレベルの作品を仕上げることができた。作品の出来不出来はさることながら、暑さや雨風に耐えながら制作に集中し、自分なりの画面を完成させる満足感を得られたことで、美術科生としての今後の生活に生きてくる精神面の収穫がたいへん大きかったように思う。また、寝泊りを共にすることで学級の結束もさらに固めることができた。

今回の合宿には美術科非常勤の塩津先生、風間先生、荒木先生、駒井先生も途中から参加していただき、夜の講評会でも貴重なご指導をいただいた。また、合宿地から帰校する途中には「荒木陶芸」を見学させていただき、制作現場を直接目にしながら日常の制作活動についてのお話を伺うことができた。このように多くの皆様のご協力をいただきながら行った本年度の風景画合宿は成功裏に終わり、美術科20期生の胸にいつまでも思い出として残っていくような機会になったように思う。



■生徒作品



# 平成 26 年度 英語コース語学研修 (English Course Summer Seminar) 実施報告

教諭 (英語科) 上村 武志

## 1 はじめに

本校では、昭和 58 年の開校以来、国際社会に通用する人材の育成を目的に、普通科に英語コースを設置している。その学習の一環として、平成元年より夏休みに 2 年生を中心に語学研修を実施しており、今回が 26 回目である。

以下に平成 26 年度サマーセミナーについて概要及び成果などを紹介する。

## 2 平成 26 年度英語コース語学研修の概要

### (1) 目的

- (ア) 集中講座による密度の濃い学習を通して、英語についての理解を深めるとともに、語学学習への意欲を高める。
- (イ) 少人数制のグループ学習により、特に英語のリスニング・スピーキングの能力及び自己表現力の伸長を図る。
- (ウ) 外国人講師と起居を共にすることで、英語のみを用いる生活環境を設定し、英語に慣れ親しむとともに、国際的感覚を養う。

### (2) 内容

- (ア) 講座制によるグループ学習と全体学習
- (イ) スピーチ (発表)
- (ウ) ディベート
- (エ) レクリエーション

(3) 対象者：2 年生英語コース生 (24 名)・1 年生 (2 名) 計 26 名

(4) 期日：平成 26 年 7 月 31 日 (木)～8 月 2 日 (土) (2 泊 3 日)

(5) 場所：霧島自然ふれあいセンター (TEL: 0995-78-2815)

(6) 経費：生徒 1 人当たり (2 泊 3 日) 4,000 円

内訳：シーツ代 100 円 / 食事代 2,980 円 / 予備費 920 円 ※交通費については、本校が負担

(7) 集合日時・場所：平成 26 年 7 月 31 日 (木) 11:30 LL 教室 (松陽) 集合

(8) 帰着日時・場所：平成 26 年 8 月 2 日 (土) 15:00 鹿児島中央駅にて解散

(9) 服装：夏季制服、正課体育服 (ジャージ上下)、動きやすい服装、運動靴

(10) 携行品：研修資料、英和・和英辞典、筆記用具 (ノートを含む)、洗面用具、着替え、上履き、常備薬、その他 (各自グループ活動に必要なもの)

### (11) 引率者・講師

英語科職員： 船迫千鶴, 薬丸賢吾, 上村武志, 鶴田美里映

A L T: Ms. Hannah Tomalin 松陽高等学校  
 Ms. Rhiannon Knecht 加治木工業高等学校  
 Mr. Alexander O'Brien 錦江湾高等学校  
 Mr. Matthew Miller 霧島高等学校

### (12) 日程

期日	時刻	研修内容
7 月 31 日 (木)	10:00	・ A L T, J T E 打ち合わせ
	11:30	・ 研修 1 (自己紹介, Ice-breaking①) 於: LL 教室
	12:00	・ 昼食
	12:45	・ バスへ移動, 出席者確認後, 霧島自然ふれあいセンターへ出発
	14:30	・ センター着後, 研修 2 (Ice-breaking②)
	15:00	・ 開会行事 開会の言葉 / 日程説明, 諸注意
	15:30	・ 研修 3 (スピーチのための Activity)
	16:15	・ 研修 4 (スピーチの練習)
	17:15	・ 研修 5 (スピーチ発表) ※グループ代表 (各 2 名) 決定
	18:00	・ 夕食
	19:30	・ 入浴
21:30	・ グループミーティング	

8月1日(金)	6:30 7:00 8:00 9:00 10:30 11:30 12:00 13:30 17:20 18:00 19:00 21:30	<ul style="list-style-type: none"> <li>起床, 洗面</li> <li>朝の集い, 清掃</li> <li>朝食</li> <li>研修6 (グループ代表によるスピーチ発表) *全体代表3名決定</li> <li>研修7 (ディベートのための Activity)</li> <li>研修8 (ディベート準備)</li> <li>昼食</li> <li>研修9 (レクリエーション) レザークラフト</li> <li>入浴</li> <li>夕食</li> <li>研修10 (ディベート準備)</li> <li>グループミーティング</li> </ul>
8月2日(土)	6:30 7:00 8:00 9:00 11:15 12:00 13:15 13:30 15:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>起床・洗面</li> <li>朝の集い, 清掃</li> <li>朝食</li> <li>研修11 (ディベートマッチ)</li> <li>研修12 (反省・感想記入)</li> <li>昼食</li> <li>閉会行事</li> <li>霧島自然ふれあいセンター出発</li> <li>鹿児島中央駅着・解散</li> </ul>

### (13) 主な研修内容

#### ①スピーチ

生徒たちは5月中旬からスピーチにおいて大切なことや書き方を学んだあと、各自興味のあることを調べたり、自分の経験から考えたり学んだりしたことを日本語でまとめ、その後英語のスピーチにして各自パソコン入力したものを提出した。セミナーまでに各自練習、暗記させた。ディベートの準備や部活動、他教科の課題等もあり、暗記にかかる時間がほとんどとれなかったが、生徒たちはよくがんばった。

小さな勇気を持つことの大切さ、あだ名が教えてくれたこと、日本は安全な国か、飢餓から世界を救え、など幅広い分野にわたるスピーチがそろった。

セミナーでは、初日にスピーチに必要な技術を身につけるための Activity が行われた後、各グループ(6名)ごとに発表、

ALTとJTEにより2名ずつ選出された。2日目にグループ代表8名が発表、ALTによって3名が選出され、この3名から校内英語弁論大会を経て選出された1名が県大会に出場し、堂々と弁論を行った。

生徒たちは英語で自分の意見をまとめ、それを聴衆に自信を持って伝えられる能力を身につけることができ、素晴らしい経験となった。



#### ②ディベート

ディベートマッチのテーマ「日本は軍事力を保持すべきである」に向けて、生徒たちは各自調査した内容を英語でまとめてきた。グループの意見をまとめたり、発表したりする練習をするために、セミナーでは2日目にディベートマッチに向けての Activity を行った。

最初に、生徒たちはALTと「日本は原子力エネルギー使用をやめるべき」というテーマにおけるディベート





マッチの流れを確認し、それぞれのグループ内で賛成・反対派に別れ、練習を行った。

2日目夜にディベートマッチに向けて各グループ最終準備をしたが、ALTも遅くまで生徒たちの指導にあたってくれ、本当にありがたかった。3日目のディベートマッチでは生徒たちはグループのメンバーと協力しながら、各自の役割をしっかりと果たし、成長した姿が見られた。

### ③レクリエーション（レザークラフト作成）

雨と強風により予定していた池巡りを中止し、霧島ふれあいセンターの職員の方々の協力もあり、レザークラフト作成に取り組んだ。生徒たちはALTと交流を深めながら、世界に一つしかない自分だけのレザークラフトを作成し、研修の思い出を作ることができた。机上の学習だけではわからないことも喜びとともに経験することができたようだ。



### 4 おわりに

英語コース生も職員も楽しみにしていた語学研修を無事に終えることができた。2泊3日と短い期間ではあったが、参加していただいた3名のALTの多大な協力もあり、生徒たちは有意義な時間を過ごせたものとする。それぞれの活動はもちろんのこと、休憩時間や食事の間にもALT達とコミュニケーションをとり、語学力のみならず、積極的に相手に関わろうとする姿勢を身につけることができた。ALTから直接添削されたり褒められたりしたことは、生徒たちにとって忘れられない思い出になったに違いない。

今回の一番の目標としてきたディベートでは、本番前日も夜遅くまで何度も試行錯誤をかさね、ALTの先生たちと準備をすすめていた。

セミナーが始まる前までは、スピーチの原稿作成やディベートの練習がなかなかかどらず本当にディベートができるまでになるのであろうかと心配していたが、生徒たちの適応力や潜在能力には目を見張るものがあり、ディベート本番での生徒たちの成長ぶりには感動さえおぼえた。この3日間がとても充実し有意義なものであったことは彼らの現在のコースの授業での態度や表情からうかがうことができる。



# 松陽高校書道コース夏季宿泊研修実施報告

教諭（書道科） 鈴木 寛治

- 1 目的 作品制作の方法を体得させ書の実技力の向上を図るとともに、参加生徒の交流と親睦を深める。
- 2 日時 平成26年8月4日（月）～8月5日（火）
- 3 場所 国民宿舎レインボー桜島  
鹿児島市桜島横山町1722-16   Tel 099（293）2323
- 4 日程 8月4日（月）  
8：50 鹿児島港集合  
9：00 出港  
9：15 桜島港着  
9：30 会場着（徒歩）  
10：00～12：00 開会，練習Ⅰ  
12：00～13：00 昼食  
13：00～16：00 練習Ⅱ  
16：00～17：00 作品批評会  
17：00～18：00 入浴  
18：00～19：00 夕食  
19：00～20：00 練習Ⅲ  
20：00～21：00 レクレーション  
21：00～22：30 学習  
22：30 就寝  
8月5日（火）  
6：30 起床  
7：00～8：00 朝食  
9：00～12：00 練習Ⅳ  
12：00～13：00 昼食  
13：00～14：30 作品研究会，片付け  
14：30～15：00 閉会  
桜島港→鹿児島港 解散
- 5 参加者 書道コース生 5名（1年1名，2年4名）  
書道部生 10名（1年7名，2年3名）   計 15名
- 6 引率者 鈴木 寛治（書道コース担当）

## 7 所感

今年度は川内高校の書道部と合同での研修を実施した。川内高校の渡辺教諭は鹿児島県内では数少ない篆刻作家である。白と黒で表現する書作品において印は唯一の朱色であり、大きさや配置は作品制作の重要な仕上げとなる。今回は作品研究の際に押印の配置まで御助言を頂きながら、印の重要性を生徒に伝える良い機会となった。



開 講 式



揮 毫 風 景

今回は全員、全紙（140cm×70cm）のサイズに作品制作を行った。

作品は9月上旬締め切りの国際高校生選抜書展（書の甲子園）に出品する。

1年生は初めてのサイズであったので当初、運腕の動きが小さく、紙面に対して余白が目立つ作品となっていた。



作 品 批 評 会

1日目の作品制作を終えて作品批評会を行った。まず、作品制作者が自分の作品について説明し、それに対して他者が感想を述べ、指導者が助言を行った。自分の作品を客観的に見つめなおすことができ、他の作品の良いところを自分の作品にも応用することができるので、多人数での批評会は非常に効果的であった。



水上花火



レクリエーション



作品選別



閉講式

夏季宿泊研修は参加者が書道に没頭することができる、貴重な2日間である。日頃の授業や部活動では時間的な余裕がなく、批評会まではなかなか持っていくことができないが、今回は作品を鑑賞することにも十分な時間を費やすことができた。表現と鑑賞は表裏一体の関係にある。また、自分の作品や他の作品について述べることは生徒のコミュニケーション能力を高めるためにも有効であるので今後も継続したい。



# SCHEDULE

## 年間行事

### 全体行事・考査等

新任式 入学式 対面式  
実力テスト  
1年オリエンテーション  
諸検診

4月

PTA総会  
中間考査  
三者面談  
定期演奏会  
生徒総会

5月

進路講演会(3年)  
教育実習  
文化祭  
生徒会役員選挙  
期末考査

6月

高大連携出前講座  
クラスマッチ  
定期講演会  
終業式  
夏季補習前期(全)

7月

夏季補習前期(3年)  
夏季補習後期(全)

8月

始業式  
実力テスト  
体育祭  
校内英語スキット・弁論大会  
進路講演会(1、2年)

9月

中間考査  
中高連絡会  
遠行

10月

部活動中学生体験入部  
県民週間  
開校記念芸術鑑賞会  
松陽コンサート  
県総合教育センター  
研究提携校研究公開

11月

期末考査  
普通科修学旅行  
音楽科・美術科研修旅行  
終業式  
冬季補習前期(全)

12月

冬季補習後期(3年)  
始業式  
進路講演会(1、2年)  
大学入試センター試験  
松陽芸術祭  
実力テスト

1月

推薦入学者選抜  
学年末考査

2月

卒業式  
入学者選抜学力検査  
合格体験発表会  
クラスマッチ  
終業式

3月



入学式

# CAMPUS LIFE



遠行



スクールライフ



定期演奏会



ランチタイムコンサート



体育祭



松陽芸術祭



卒業式



クラスマッチ



文化祭

## 平成26年度 教職員の研修の記録（研究授業・発表・出品等）

### 1 研究授業

氏名	期日	学級	科目名	単元名	研究授業名
福山健太郎	6/19	1-5	数学 I	第2章 2次関数	フレッシュ研修 (1年目)
福山健太郎	10/28	1-2	数学 A	第1章 場合の数と確率	フレッシュ研修 (1年目)
福山健太郎	12/10	1-5	特別活動	自他尊重の表現方法を身に付ける	フレッシュ研修 (1年目)
須貝佳奈子	6/19	2-1/4	体育	陸上競技(ハードル走)	フレッシュ研修 (1年目)
須貝佳奈子	11/26	1-7	特別活動	進路について考える	フレッシュ研修 (1年目)
須貝佳奈子	12/19	2-1	保健	現代社会と健康	フレッシュ研修 (1年目)
戸田 政仁	9/25	3-7	地学基礎	水と気象	フレッシュ研修 (2年目)
日高 祐郁	11/25	3-5	異文化理解	Dealing with environmental Issues as a Resident of the Planet Earth	フレッシュ研修 (2年目)
柳田 美穂	12/12	3-2	国語表現Ⅱ	説得力のある主張を組み立て、相手に伝える	授業力向上支援プログラム フレッシュ研修(3年目)
亀山 晃	11/25	1-4	数学 A	重複組合せ	フレッシュ研修(3年目)
川畑 美沙	12/ 4	1-7	国語総合	漢文入門	ステップアップ研修
川畑 美沙	1/15	1-6	総合的な学習の時間	進路研究	ステップアップ研修
小宮路浩章	5/12	2-4	数学Ⅱ	第2章 図形と方程式	パワーアップ研修
小宮路浩章	11/ 5	2-4	数学Ⅱ	微分と積分	パワーアップ研修 松陽高校研究公開
小宮路浩章	1/29	2-4	数学Ⅲ		パワーアップ研修
桑畑真由美	5/ 9	1-8	コミュニケーション英語Ⅰ	Chapter 1 Coexistence	パワーアップ研修
桑畑真由美	11/10	1-3	英語表現Ⅰ	Lesson6 I'm glad I can see the Sydney Opera House	パワーアップ研修
桑畑真由美	11/28	1-8	コミュニケーション英語Ⅰ	Chapter 6 Friendship & Self-esteem	パワーアップ研修
岩川奈穂子	10/17	3-1	Reading	Lesson 19 Convenience Japanese Style	授業力向上支援プログラム
朝倉 真吾	11/ 5	1-4	国語総合	サイボーグとクローン人間	松陽高校研究公開
二宮 勇貴	11/ 5	2-2	日本史 B	平城京の時代	松陽高校研究公開
永田 裕子	11/ 5	1-5	化学基礎	酸と塩基の反応	松陽高校研究公開
濱田 淳一	11/ 5	2-7	音楽理論	V 移調, 移調楽器	松陽高校研究公開
前村 卓巨	11/ 5	2-8	美術史	黒田清輝と西洋絵画	松陽高校研究公開
船迫 千鶴	11/ 5	2-5	コミュニケーション英語Ⅱ	Lesson 18 Dreaming of Space	松陽高校研究公開
川畑 勉	11/ 5	1-3	社会と情報	情報モラル	松陽高校研究公開

## 2 校内研修会

研修会名	期日	担当部係	内容等
生徒指導研修会Ⅰ	4/23	生徒指導	講師：生徒指導主任 内容：平成26年度生徒指導の方針等
生徒指導研修会Ⅱ	10/17	生徒指導	講師：北教頭 内容：いじめ問題
生徒指導研修会Ⅲ	2/20	生徒指導	講師：亀田純 坂元美玲（鹿児島養護学校） 内容：特別支援教育について
人権同和教育研修会	11/19	管理職	講師：校長 内容：人権同和教育
服務規律関係研修Ⅰ	4/23	管理職	講師：校長 内容：学校教育に携わる者としての矜持
服務規律関係研修Ⅱ	12/17	管理職	講師：校長 内容：年末年始の綱紀の保持
進路指導研修会Ⅰ	4/28	進路指導	講師：進路指導主任 内容：平成26年度進路指導の方針等
進路指導研修会Ⅱ	7/28	進路指導	講師：長岡裕子（第一学習社） 内容：小論文指導の方法と実際
進路指導研修会Ⅲ	8/29	進路指導	講師：川上隆博（高校教育課指導主事） 内容：進路指導について

## 3 研究会等での発表

氏名	部署等	テーマ・内容等
鶴田 美里映	教務部 研究開発係	期日：11月5日（水） 会名：H26 県総合教育センター提携県立松陽高等学校研究公開 場所：松陽高等学校 大会議室 発表テーマ 「個々の生徒の学力向上と進路実現を目指す授業改善」 －基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用を図る学習指導－

## 4 各種連盟・部会・大会等での事務局等

教科等	氏名	役職名
校長	田 淵 敏 彦	県高等学校文化連盟会長 九州高等学校文化連盟評議員 県高文連美術・工芸専門部会長 県高等学校教育研究会美術・工芸部会長 県高体連陸上競技専門部長 県NIE研究会推進協議会会長 NIE研究会会長 第30回国民文化祭県実行委員会副会長及び企画委員会委員 県連合校長協会常任委員 県高等学校長協会理事
教頭	遠 藤 武 夫	県高等学校文化連盟参事
芸術科	鈴 木 寛 治	県高等学校文化連盟理事長，九州高等学校文化連盟専務理事
数学科	有 馬 純 平	県高等学校文化連盟事務局長
国語科	折 田 馨	県高等学校文化連盟副理事長
音楽科	中 尾 麻 里	県高等学校文化連盟副事務局長
美術科	宮 蘭 広 幸	県高等学校文化連盟美術・工芸専門部委員長
英語科	鶴 田 美里映	第56回九州高等学校演劇研究大会実行委員会事務局
地歴・公民科	田 原 辰 也	県高等学校教育研究会地歴・公民部会公民分科会会長 県高等学校教育研究会地歴・公民部会事務局長 鹿児島地区生徒指導研究協議会幹事

5 コンサートでの発表・受賞等  
 <音楽>

氏名	専門	時期(月日)	コンサート名(場所)
中尾 麻里	演奏	8/30	・ブックカフェコンサート (南さつま市図書館) 内容: サックスソロとピアノ演奏
	演奏	11/ 8	・秋の図書館コンサート (南さつま市図書館) 内容: サックストリオとピアノ演奏
	講習	12/13	・バロックダンス講習会(有川泉バレエアカデミー) 講師: 浜中康子
	演奏	3/26	・サックスカルテット コンサート (e-space hall) 内容: サックスカルテットとピアノ演奏
濱田 淳一	指揮	5/18	・鹿児島ウインドアンサンブル第44回定期演奏会 (宝山ホール)
	審査	9/6・7	・第4回鹿児島国際音楽コンクール管弦打楽器部門 (鹿児島国際大学)
	演奏 指揮	11/ 9 12/28 29	・鹿児島交響楽団第83回定期演奏会(宝山ホール) ・下野竜也指揮者講習会(福岡市末永文化センター) 講師: 下野竜也(読売日本交響楽団・客員首席指揮者) 内容: 指揮実技及び楽曲分析・管弦楽での実習 曲目: ベートーヴェン/交響曲第3番 変ホ長調
	演奏	3/21	・松陽高校OB吹奏楽団「緑」第15回定期演奏会(鹿児島市民文化ホール)
宮原 真紀	声楽	5/4	・ウインドオーケストラ フォレ定期演奏会 内容: ビゼー作曲 オペラ「カルメン」より “ハバネラ～恋は野の鳥～”(宝山ホール)
	声楽	8/10	・K T S オーケストラ定期演奏会(市民文化ホール第2) 内容: ベートーヴェン作曲「第九」合唱
	声楽	8/17	・鹿児島伯林的交響楽団定期演奏会 内容: マーラー作曲「交響曲第三番」 アルトソロ(宝山ホール)
	声楽	11/26	・平成26年度鹿児島県芸術文化奨励賞受賞 表彰式 及び 演奏 内容: ビゼー作曲オペラ「カルメン」より“ハバネラ”
	声楽	12/ 6	・みやまコンセール主催 若い芽のコンサート ～県主催「芸術家への道」受講生と今年度県芸術 文化奨励賞受賞者による演奏会～ (みやまコンセール) 内容: モーツァルト作曲 オペラ「魔笛」より “夜の女王のアリア”他4曲
	声楽	1/10	・第53回声楽研究グループ「シャンテブリュー」 演奏会(鹿児島県民交流センター) 内容: マーラー作曲「交響曲第三番」より オブラドルス作曲「エル ヴィート」他
	声楽	1/24	・南日本音楽コンクール フレンズコンサート 内容: モーツァルト作曲 オペラ「魔笛」より “夜の女王のアリア” 復讐の炎は地獄のように我が心に燃え オブラドルス作曲「エル ヴィート」 バーンスタイン作曲「着飾って 華やかに」

6 展覧会への出品・受賞等  
 <美術>

氏名	専門	時期(月)	展覧会名(場所)
前村 卓巨	油 絵 等	4月	独立展新人選抜展(東京都国立新美術館)
		5月	第61回県美展 会員出展(鹿児島市立美術館・黎明館)
		10月	第82回独立展・会友(東京都国立新美術館)
		11月	第68回南日本美術展 平面部門委嘱(鹿児島市立美術館・黎明館)
		2月	独立展 in 鹿屋(リナシティー鹿屋)
		2月	吉井記念末吉町洋画展(招待作家)
宮 蘭 広幸	彫 刻 等	4月	『霧島アートな旅』展 彫刻2点出陳(霧島市)
		5月	第61回県美展(運営委員) 会員出陳・審査(黎明館)
		5月	吹上浜砂の祭典 砂像選手権審査委員長(南さつま市)
		6月	2014 宮崎国際現代彫刻展出陳(宮崎空港)
		8月	第99回二科展 会員出陳・審査(国立新美術館)
		9月	第31回『む展』出陳(鹿児島市立美術館)
		9月	第61回都城市美術展 芸術文化協会会長賞(都城市)
		11月	第68回南日本美術展出陳 奨励賞 委嘱推挙(黎明館)
		2月	カモコレアートフェスティバル出陳・講演(蒲生町)
3月	第99回二科展 鹿児島巡回展出陳(黎明館)		
餅原 宣久	油 絵 等	5月	第61回県美展 会員出展(鹿児島市立美術館・黎明館)
		9月	第99回二科展・会友出展(東京都国立新美術館)
		11月	第68回南日本美術展・平面部門委嘱出展(鹿児島市立美術館・黎明館)
		3月	第99回二科展・鹿児島巡回展出陳(黎明館)

<書道>

氏名	専門	時期(月)	展覧会名(場所)
鈴木 寛治 (鶴聲)	漢字仮名 交じり書	4月	第49回九州創玄選抜書展出品(門司港レトロ館)
		6月	第32回日本詩文書作家協会展出品(セントラルミュージアム銀座)
		7月	第42回日本の書展出品(福岡アジア美術館)
		7月	第66回毎日書道展会員出品(国立新美術館)
		8月	第64回南日本書道展入選(県民交流センター)
		11月	第40回創玄現代書展入選(セントラルミュージアム銀座)
		12月	第40回西日本書美術展委嘱大賞(福岡市美術館)
		2月	第40回養真選抜書作展出品(小倉井筒屋)
3月	第51回創玄展審査会員出品(国立新美術館)		

## 編 集 後 記

「松濤第31号」を発行することとなりました。

今号からは従前の紙媒体に代わりまして、ネット上でのPDFファイルによる公開という形に改まりました。松陽高校ホームページからの閲覧と必要に応じてプリントしていただくことで、より簡便にご利用いただけるものと思います。

御執筆いただきました先生方や、ご協力いただいた方々に深く感謝いたします。

なお、表紙の題字は本校の鈴木先生に書いていただきました。

不備な点はなにとぞご容赦いただき、ご高覧いただきますようお願い申し上げます。

---

---

## 松 濤 第31号(平成27年3月)

発行者 鹿児島県立松陽高等学校

校長 田 淵 敏 彦

発行処 鹿児島県立松陽高等学校

〒 899-2702 鹿児島市福山町 573 番地

TEL 099-278-3986

---

---